
けいおん！ -My story-

ハーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ - M y s t o r y -

【Nコード】

N 2 4 7 5 W

【作者名】

ハーツ

【あらすじ】

過去にある出来事を抱えながら、その少年は新たな高校生活を繰り広げていく。

今回が初投稿なのでいろいろと間違ってる部分もあるでしょうがそれでも良いという方はよろしく願います。ただ更新頻度は遅いのでそれでもいい方はどうぞ) (

プロフィール（前書き）

あまり更新頻度は早くありませんがよろしくお願ひします。

プロフィール

オリキャラ紹介

ふるかわ
古川 龍斗

誕生日：11月ごろ（日にちはちょっとまだ（汗））

身長：168cm

体重：54.9kg

全体的にはとある魔術の禁書目録の一方通行に近い容姿。

髪の毛は黒色で原作一方さんより少しさっぱりしていて、目の色も普通。

体系は普通より少し細いが、鍛えてはいるので細マッチョ。

今作の主人公。

中学前半までは比較的普通の性格だったが、ある出来事から感情を

あまり出さなくなった。

と言っても喜怒哀楽の「怒」と「楽」は普通の生活では出している。

ある程度人前では普通にしているが大半の人間は信用していないため、喧嘩は数回しておりある程度殴り合いには慣れている。

渉と悠二とは小学生からの付き合い。

さかもと わたる
坂本 渉

誕生日：7月ごろ

身長：170cm

体重：56.7kg

顔は中の上。 中立的だけど性格からか爽やかタイプ

容姿はバカテスの久保 利光にある意味近い。

体系は今まで委員会にいた為に部活はしていないので、標準。
しかし空手を少しやっているので普通の人よりは強い。

助けを求められると状況によっては手助けする。それゆえに委員長キアラで、だいたいクラス委員長は渉。

龍斗のことを最も知っている数少ない友達。

友達になったと思う人のことは名前のほうで呼ぶ。

源 悠二
みなもと ゆうじ

誕生日 8月ごろ

身長：171cm

体重：57.3cm

今まで運動ばかりしてたため体系は普通ながらもガツシリしている。

顔は上の下のあたりで、結構きつちりとした顔立ち。

髪は運動に邪魔にならないようにとミディアムショートで茶髪。

この三人の中で最もテンションが高くお気楽な性格で、男女関係なく話せるため結構好かれるタイプ。

龍斗には何故かMになることがある。

- 1 - (前書き)

間違いなどがあったらすいません。

「はあ〜・・・めんどくせえ・・・」

「入学式日初っ端からそんなこというなよ。記念すべき日じゃないか？」

「そうだぜ龍斗！最初のイメージで今後の高校生活が素敵なものなるか、

すばらしき青春もなく永遠にゴットハンドを守り続けるかが決まら黙ろうか？」・・・すんません。」

今時刻 7:58

一緒に登校している二人のうち悠二が周りに生徒がいるなか・・・てかほとんど女子だけど、

なんとなく意味はわかる下ネタを無駄に大きい声で話している。

俺らからしたら迷惑以下の何者でもない。

やはりこちらもそう思ったのか涉が威圧感を出しながら止めた。

近くで桜が咲いているのを見ながらも、高校へと歩いていく。

4月上旬。

今俺達は新たな高校に向けて小学校からの親友二人と登校している。

1人は坂本 涉

多分俺らの中ではまあまあ真面目なほう。

こいつは結構頼れるいわゆる委員長的な奴だ。

もう一人は源 悠二

まあ簡単に言えば変態。普通に言えばおふざけキャラ。

だが俺達の前ではよく変態化するので俺の手がよく汚れる。

この二人とは小学生からの付き合いだ。今ではいるのが当たり前のようになっていたりする。

今からいく高校は去年まで女子高だった「私立桜ヶ丘高校」

共学にはなったがやはりまだ女子のほうが断然多い。そのためか周

りを見ても男子より確実に女子の比率のほうが多かった。

ちなみに受験理由は3人とも家から近かったため。と言っても徒歩で20分ぐらいはあるのだが。

後悠二は女子目的なのもあったりする。

・・・話を戻そう。

正直朝起きるのもめんどくさく、登校するのもめんどくさかったの
で入学式をサボるといふ快拳でもしようとしたはずだったか・・・

〔登校前〕

起床7:00

自分にしてはまあまあ早く起きた。

だがいつものお供の如く眠気も共に存在していたため

「~~~~!!!!!!!!!!」

「おいおい大丈夫か？」

涉が無駄な心配をしているなか、案の定クソ（変態）がドアの下付近で頭を抑えながら悶えていた。
見るに耐えない生物が俺の目の前で・・・キモッ

「おい！？今無表情で絶対笑つたる！！！？？」

「アホの癖に無駄に勘のいい奴だなオイ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（TAT）」

（ああ、こんな見たくもないもの見ると）

「昨日潰して体液出たゴキブリ思いつから泣くな・・・」

「俺ってゴキブリの体液と同等？」

「いやそれ以下だ」

ただ今7時20分ごろ。

太陽という名の熱の塊から放たれる眩い光が差し込むこの時間に、

俺の家の玄関の前で悠二が文字で言うorzのポーズをしてすすり泣いている。

(正直こんなシュールな光景朝から見る俺って……)

そこにさすがにやりすぎたかと思ったのか渉が止めに入った。

「龍斗、朝から攻めてあげるな。さすがに可哀そうだ」

「そうだな、俺も気分が……それより朝っぱらから何のようだ？」

とりあえず話を軽く切り替えて何故来たのかを聞くことにした。

渉は笑いながら

「どうせ龍斗のことだ。めんどくさいか眠たいかでサボるつもりだったんだろ？」

こうして龍斗は2人によって連行されられて今に至る。

そして今、桜が咲くこの道を進みながら俺は

(めんどくせエな学校・・・爆破しねエかなア？殺人事件でも構わねエんだけど)

新入生とは程遠い思考で、校門をくぐる。

・ 2 ・ (前書き)

ちよくちよく文を変えるかもしれません。

現時刻 7:59 ころ

目の前に校門が見えてきたあたりで俺たちは・・・

「にしてもわかってはいたが、今回もサボろうとするとわな」

「俺には老年野郎共の話聞くことに意味があるのか聞きてエよ・・・」

「まあそれでこそ龍斗だよな」。期待を裏切らない！」

そついいながらバカが龍斗に対してサムズアップしてきたので

「お前の期待なんて価値のないものを渡してくるな虫唾が走る」

「無表情でさらっと言わないでくれませんか!?!」

とりあえず右から左へ受け流して捨てていった。

今俺たちの目の前にはそれなりに立派な校舎が見えている。

周りも私立だからが無駄に豪勢で広々としていて、私立としては申し分なかった。女子率はやはり高いが・・・。

(私立なだけはあるな・・・いやだからってこれは)

「広！？何ここ前の中学とは比べ物にならねー!!」

「そつえば二人は体験入学来てなかったな？」

「・・・ああ。近ければなんでもよかったからな」

以前、桜ヶ丘高校の体験入学があったのは知っていたが、俺はめんどくさくて、悠二は集合時間に間に合わず行けなかった。

で、真面目な渉はある程度の高校に体験入学していたのでほとんど受験関連は渉から聞いていたという。

「まさかこんなに綺麗な高校とは思わなかったぜ・・・!!」

「それじゃあ、クラスを確認しに行こうか」

高校にちよつと感心してから自分達のクラスを確認しに行こうとしたとき

「はぁーはぁーはぁー……あれ？時間見間違えた〜!!」

後ろから不審者さながらな女子の息づかいと叫び声が聞こえたので振り向いてみた……
が、ここで振り向いたことが間違いだったと後で後悔するのはまた別の話。

とりあえず現状を理解するため内緒話を開始することに。

（なあ涉？この子は誘ってきてるのk」その思考をどうにかしようか？」・・・ハイ）

（とりあえずよオ？俺は関わりたくないから早く行かねエか？）

（でもなんか事情があるみたいだし少しは聞いてあげないか？）

（お人よしだなオイ。・・・まあ好きにしろ）

（じゃあ聞いてみるよ）

とりあえず内緒話を終えた俺たちはその女子に何故叫んだのか聞いてみることに。

「ねえ君？何でこんな真ん中で叫んでるんだ？何かあったのか？」

「え？・・・あ、あのね！、時間をね、見間違えてね、早く来」とりあえず落ち着いて

から答えようよ」

よっぽど急いだのだろうかかなり疲れているらしく、さっきから途切れ途切れの会話になっている。

(・・・なんかこの女に関わらないほうがいいと勘が)

少し待つと変な女子は息が落ち着いたようで理由を話し始めた。

「実は時間を見間違えてこんなに早く来ちゃったんだよね〜アハハハハ・・・」

「それはまあ・・・ドンマイ」

それしか言えないのはわからなくはねエ。

それよりも早く行かせるよ……。

「あ、せっかくあつたんだし自己紹介しようよ！私の名前は平沢唯だよ！」

「俺は坂本 渉。んで後ろの二人は……」

渉は普通に、

「源 悠二！よろしくな！」

悠二は無駄にテンション高めで、

「……………」

俺は無視した。

「龍斗？」

「……………なんで知らないやつに個人情報与えなきゃならねエ？」

「龍斗？……………じゃあ『りゅうくん』だね！」

この瞬間、俺の思考が5秒ほど止まったように感じた。

(ハ……………？あだ名？初対面で……………何だこいつ？)

そんな思考から少しずつ普通になってくると、後の二人うちのバカが笑っているのが聞こえるが今は放置しよう。

「……………りゅうくん』って何だよ？」

一応少しはわかるが説明を求めることにした。

が、帰ってきた返答は

「え？龍斗だがらりゅうくんなんだよ？」

……………まったく説明になっていなかった。

くそのころの二人く

「龍斗？……………じゃあ『りゅうくん』だね！」

もちろんこの二人にも何かしらの衝撃が来ていたわけで

(よく初対面で龍斗にそんなこと言えるな。この女子結構面白い)

「アヒアアヒハハハアハッハアハはハやべ〜龍斗にあわね〜!!」

龍斗がフリーズ中に彼のことを知っている二人は、そのあだ名とイメージがまったく違うことに片方は平沢を面白く思い、もう片方は何か引つ掛かったのか爆笑している。

だからだろう。姿は変わらずともドス黒いオーラを今にも現実^{リアル}で出せるのではないかというぐらいにイラついている龍斗をすぐに危険視できなかったのは。

【なアオイ?お前は五体不満足になるぐらいの覚悟の上で俺を笑ってるんだよなア?】

「ひっ……!?!りゅ、龍斗、ま・・・待て、な・・・話せばわか

その先が続くことはなくただ、悠二が最後に見えたのは・・・

(あ、何だろう〜これ走馬灯かな?アハハハハ)

記憶のフラッシュバックと目の前にある拳だった。

「じゃあとりあえずクラスを見に行こうか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アア、サツサトカエリテエカラナ」

「あ、私も行く」

「じゃあ一緒に行こうか。もちろん『りゅうくん』もだぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・カエリテエ」

さつき知り合ってしまったこの女子のおかげで、今の俺にはもう体力も精神力ももぬけの殻のようだった。

（行くしかないか・・・・・・・・てかあの・・平沢だったか？あいつ天然かバカか・・いやどっちもだなありゃ）

さつき制裁を加えた元人間ガラクタの体を引きずりながら歩いていく。

・ 3 ・ (前書き)

軽音部までが長い・・・

今俺たちはクラスの確認のためにクラス表を見ているわけだが

「俺の輝く高校生活を始めるに相応しいクラスはどこだ!？」

アホがものすごい希望を持ちながらクラス表を凝視してる。

・・・何故だろう? ツブシタクナル。こうグシャグシャに潰したくなる?

「ありえないから変な創造膨らますな・・・(マジひく)」

「拒否りながらひくなよ!! いいだろ考えるくらい!？」

「そつだよ? 甘いものいっぱい食べたいと思ってもいいんだよ」

「おお、唯ちゃん! 君はわかってくれるんだな?！」

「それは創造ってより願望の間違いだろバカ共・・・」

もちろん同類^{バカ}で意気投合しているからか俺の話の聞いているはずもなく・・・

そんな時に見に行っていた渉がこちらに戻ってきた。

「どうだったよ渉？誰か一緒の奴はいたのか？」

「それがな龍斗？・・・俺らみんないっしょのクラスだったぞ！」

うれしいのか、いつもよりもテンションが上がっているところ悪いが

「・・・なあ？それはまさかあの女もか？」

『俺らみんな』とは平沢も入っているのか聞いてみた。

できれば違うことを願う。

「そりゃ入ってるに決まってるだろ？何言ってるんだよ龍斗？」

・・・何だ？俺だけがあいつ（平沢）が馴染んでる事を変に思うのか？そうなのかオイ？

（教室内）

「まさか俺たちや唯ちゃんもいつしょとはなー……なんか感動！」

「そうだな。俺はみんなといっしょでうれしいよ。なあ龍斗？」

「ハア……騒がしくなりそうだなオイ。」

主に平沢と悠二が合わさると。

「それにしても和ちゃんもいるなんて思わなかったよ！」

「唯？クラス表見てないの？」

「見たはずなんだけど……なんでだろうね？」

「……私が聞きたいくらいよ」

ちなみに平沢はさつき新たに知り合った真鍋とかいう奴と話している。

まあ知ったことではねエか。

そんなことを考えていると予鈴と思われるものが鳴り出し、二つの担任と思われる先生が入ってきた。

「まずは入学式ですので皆さん廊下で番号順に2列で並んでください。8時35分ごろに式場の講堂に移動します」

いきなり入学式かよ……萎える……。

「涉、龍斗、唯ちゃん、和ちゃん。……やられるなよ（睡魔に）

」

「いや悠二こそ寝ないで聞いとけよな？」

「知るかよ……勝手に寝かせてもらう」

「え？高校の入学式って危険なの!？」

「違うから安心しなさい。ようは寝るなってことよ、唯」

案の定、龍斗が堂々と、悠二がやられて寝ていたことをいうまでもないだろう。

ちなみに入学式中、龍斗の両側には涉と唯がいたのだが

「龍斗も仏教面しないでこうやって素直な顔してれば印象もいいんだろっけどな？」

「りゅうくんもう寝てるね．．．今のうちに撮っておこうかな？」

「いやシャッター音でばれるし先生たち来るから．．．」

寝てるときにこんなことがあったとは龍斗は知らない。

- 4 - (前書き)

ぐだぐだですがどうぞ。

後、感想や文について何か書いていただけるとうれしいです。

入学式を終えた俺たちを待っていたのは

「入学おめでとうございませーす！」

「え？ちよー！？」

「ぜひテニス部へ！」

「あ、どう」

「ぜひ柔道部へ！」

「何故つけとらなきゃ・・・！？ポケットに突っ込む」

「ぜひ茶道部へ！」

「ちよっとそんなに詰め寄らな」

「ぜひ書道部へ！」

「「「「「ぜひのぜひー！」「「「「「」

.....

「.....なんかすげーこと起きなかった今？」

「俺なんかポケットに入れられまくったぞオイ？」

「dhvbぢshhcにあんjdjn？」　　まだ脳内整理中

「高校つてすごいね〜.....」

「ええ.....勢いが違うわね」

嵐のように来て嵐のように去っていく、部活勧誘という名の人員争奪戦だった。

〜一週間後〜

「んで〜結局俺はバスケ部に入りましたとさ」

「いやどうでもいい」

「せめて「そうなんだよかったね〜」とか言えねーのかよ!..!」

丁度昼休みでパン等も食べ終わったころ、

俺達は部活をどうするかを教室で話していた。

「そついや渉は今回も生徒会に立候補するのか？」

「今までの生活上やっぱそれが落ち着くんだよ」

さすがは中学連続生徒会。その功績は伊達じゃないな。

「渉も生徒会に立候補するの？」

「そうだけどー・・・もしかして和も」

「ええ。私も立候補しようと思ってるわ」

どうやらこちらにもメガネのせいか合っていると思えてしまつ。

「二人とも生徒会って何だがすごいねー！」

「・・・見た目とイメージ通りだなあ」

とりあえずわかったのは、悠二は新しくできた男子バスケット部に、渉と真鍋は生徒会希望。

残るは俺と天然（平沢）の2名か・・・

「龍斗はどうするんだ？」

「部活はめんどいからなあ・・・パス」

「りゅうくんもまだ決まってるの？じゃあ私と一緒にだね！」

「はあ・・・こうやってニートが出来ていくのね」

天然から同類アピールと同時に何か心にグサツと。

「部活やってないだけでニート!？」

どうやら平沢にもダメージがいったらしい。

にしても・・・

「おいましてこれ（平沢）といっしょにするな侵害だ」

「龍斗にも何か衝撃があっただなあ・・・」

「振り返ってみると、唯って今までなんの部活もやってこなかったものねえ」

(グサツ！)

「龍斗も興味ないだめんどくさいだで何もやってないしな」

(グサツ・・・！)

「「とりあえず早く部活を探しなさい」」

・・・つまりあれか？

部活に入らなければニート扱い、入れば面倒な部活の始まり始まり
くっつかア？

ただひとつ言えることは、

「・・・めんどくせ」

～数日後～

俺はニート扱いされるのだけは願ひ下げなので部活の掲示板を見に

来ていた。

「とりあえず暇になったから来てはみたが、どれもめんどくせえ感じだなオイ……」

正直すべてやる気がしない。

（入部しねえとニートか……いつそバイトで逃げるか？）

そんな思考をしていると知っている声が聞こえた。

「りゅうくんも部活探しに来たの？」

「……平沢か。お前も探しにか」

「うん。せつかく高校生になったんだし何か始めなきゃな〜って。和ちゃんにあんなこと言われちゃったし」

やっぱりあの発言は俺と平沢に深刻なダメージを与えたようだった。とりあえず勧誘ポスターを見ていると

「軽……音楽か〜」

「ああ？」

軽音楽？・・・この軽音部のことか。となりで平沢は何かを考えているようだが・・・

「・・・よし！」

「・・・?????」

訳がわからなかった。

・ 5 ・ (前書き)

一日に2話投稿するのってきつい・・・。

「とりあえず、軽音部ってところに入ってみましたー！」

平沢が真面目な顔に片手を上げて堂々と宣言しだした。

「……お前入ったのかよ」

「で、どんなことするの？」

「さあ？」

天然がちよつと本気をだした瞬間だった。

「ええ！？」

「内容も知らずに入るなんて……唯ちゃん恐ろしい子！」

なんとか天然耐性を持つ真鍋と似たような悠二は反応できたが、俺と渉はすごいような呆れるような……表現できない気持ちに。

「わからないで大丈夫なのか唯？」

「きつと軽い音楽って書くから簡単なことしかやらないよ〜口笛とか」

「何だ」そのやる気のない部活……」

真鍋と渉と悠二の思考が重なった瞬間だった。

にしても今日は天然が絶好調だな……無駄に疲れる。

「……平沢。あの部活はバンドをやるって書いてあったろ？」

「確かに書いてあった……あ、バンドって」

「ギターとかを弾くってことだよアホ」

処理時間およそ3秒。

「……私ギターなんて弾けないよ!？」

それすらわからなかったのかお前……おい見ろ、真鍋すら呆れてるぞ。

「じゃあ何なら弾けるの？」

「うん……うん……カスタネット？」

うんたんうんたんうんたん

(……)

「……すく似合いわ」

「俺も同感するよ」

「俺でもそう思えたぞ!？」

「幼稚園からやり直したほうがいいんじゃない？」

皆それぞれ、思い思いの言葉がでた。

「で、どうするの唯?もう入部届け出したんでしょ?」

「……」

やはり出してしまっただけからか平沢の顔から焦りが出ている。

「てか何で体験入部しなかった？」

「なんていうか勢いって言うか……アハハハ」

「まあ無理な以上、止めにいかないといけないんじゃないか？」

「うう……一人で？」

「私は生徒会の申請とかあるから……」

「右に同じ」

生徒会グループは用事でダメ

「俺は部活があるし……御免な唯ちゃん」

バカも部活でダメ……っておいまさか

「ジーーーーー」

平沢が捨てられた犬のような目で俺を見ってくる。

さながら「助けてください」とでも言わんばかりに。

「……まさか俺が付き添えと？なあ涉」

く3階廊下く

「りゅうくんありがとうね」

「……………アア」

さっきのやり取りの途中、平沢が泣きそうになり仕方なくこうなつた。

(ほかの学生がいるなかで泣かれたら俺がやったみたいになるじゃねえか畜生……………)

「それよりよオ? いい加減離れろよ邪魔くせえ」

「だってここ怖いし……………ダメ?」

「離れろ、と言ったところで無駄か……………勝手にしろ」

「ありがとう〜!」

この廊下はオカルト部やらそういう不気味な部が固まっているのが怖いのか、俺のことなどお構い無しに左腕に抱きついてくる。

なんだこの状況……………。

悠二に見られたら確実に終わるぞこれ？というかこいつはこいつ
ことの意味をわかってるのか？・・・いやわからずにやってるか。

「あら？」

そんな時に知らない女の先生が4階から・・・誰だこいつ？でも
先生の中ではめずらしく美形だな。

「あ、山中先生だ」

「山中？誰だこいつ？」

「あら、山中じゃなくて山中先生でしょ？今後気をつけるように」

「・・・すみません」

「わかってくれればいいわ。それより二人つてもう付き合ってる
の？」

「え？・・・ち、違います先生！」

「ハア・・・」

今俺の腕にくっついてる平沢を見ればそうなるわな。

「さすがだな天然。この状況の意味すらわからずにやっていたとは」

「だ、だってここ怖いのはっかだし・・・」

「というか何であなたは何恥じらいとかないのよ？」

「別に。そういうことに興味がねエ」

「ぱっさり言っわね・・・で、平沢さん。軽音部ならこの上の音楽室よ」

「あ、ありがとうございます」

「ちょっとまって、何であんたが今から行く場所を知ってる？」

何処に行くのか聞いてもいないのに言ってきたので聞いてみた。

「私が平沢さんから入部届けをもらって今渡してきたからよ？平沢さんも今から行くところだったんでしょ？」

「はぁ・・・最悪のタイミングだなオイ」

「？。どういこと？」

お前がやったことが何かを教えてやるよちくしょう。

もうちょい早ければ行かずにすんだのに・・・

「こいつ軽音部がなにかも知らずに入部したんすよ」

「平沢さん。それ本当？」

「はい、つい勢いで入部を・・・それで今から止めてこようよ」

「でももう渡しちゃったし、御免けど頑張ってるね？」

そう言っつて山中とかいう先生は下へ降りていった。

「・・・さつさと行くぞ」

「・・・いろいろと御免ね？」

「別に気にしてねえから謝ってくるな。調子が狂っ」

「うん」

めんどくさいけど行くしかねえか・・・。

・ 6 ・ (前書き)

一
気
に
や
っ
た
の
で
間
違
い
が
あ
る
か
も
し
れ
ま
せ
ん。

〈音楽準備室前〉

「ここか・・・」

「さっさと行って来い。俺は帰る」

「え？もういつちゃうの？」

「ついて来るだけだったはずだろオが・・・違うのか？」

「出来ればもうちょっとお願いします！もしかしたら・・・アワフワフワフワ」

何を考えたのかわからんが天然が「何か」に怯えているらしい。

・・・なんとなく何を考えてるのか想像できるのだが。

「言うておくが厚化粧の奴らはいないからな・・・多分」

まだ怯えているせいか、聞いていないようだ・・・

そんな時に誰かが平沢の肩を掴んだ。

「そついやそつちも入部希望者？」

「いや、こいつに強制的に「わかってるって！入部希望なんだろ！」「ちょ！？オイ人の話を」

俺も強制的に連れて行かれ、

デコ女がドアを勢いよく開け放ち

「みんな〜入部希望者が来たぞ〜！しかももう一人！！」

勝手に決め付けながら言いやがった。

「本当か！？」

「まあ〜」

後の部員なのだろうか、さらに二人の女子がいた。

「ようこそ軽音部へ！……！！」

「歓迎いたしますわあ〜」

何故俺を見て驚く？

「律うーうー……」

「はいはい我慢しましょうね。そんなことよりムギ！お茶の準備だー！」

「ハイ！」

お茶の準備から数分後。

目の前には何か高級感を漂わせるティーカップや洋菓子が……

(甘いのは……ティーがあるからなんとかなるか。しかし平沢もこれを前に戸惑ってるしよお？どうする?)

「どうぞ？召し上がって」

部員3人が何故か集中して見てくる。

何故そこまで前のめりになるんだこいつらは……。

「ズウ……おいしい……！」

さらにケーキに手を伸ばす。

「おいしい〜!」

(こいつ何しに来たんだ?)

相当おいしいのが自分の世界にトリップしてるようだ。

俺も一応食ってるが・・・悪くはないな。

「平沢さんはどんな音楽がやりたいの?」

「え?」

「どんなバンドが好きか?」

「え??」

「好きなギタリストは?」

「ええ・・・とお」

このデコが話を聞かないことはわかった。

平沢も平沢で早く言えよめんどくせエ・・・。

「じっ、じっ、じっ」ジミー・ヘンドリックス？

「おお〜！」

あ・・・チャンスを潰してきやがったこのぱっつん。

「え！？い、いえじっ、じっ、じっ」ジミー・ページ？

「おお〜！〜！」

「違！？ちっ、違「ジェフベック！？」

平沢がなんかもう泣きそうな必死そうな表情で否定しようとするが、ぱっつんによりすべてアーティスト名に変換された。

てか「ジ」で始まるアーティストよくそんなにでるなあ？

「そっかジェフベックかあ〜！」

「どなた？」

「ロックギタリストに二種類しかない、ジェフベックとジェフベック以外だっって言われている常に新しいサウンドに挑戦する挑戦的なギタリスト！」

「まあ〜！」

「さっすが、渋いね〜平沢さん！」

「アハ・・・アハハハハ」

こいつ・・・マジで何しに来たんだ？ぱっつんの熱い説明にやられたか？？」

・・・そろそろ言わないと取り返しつかないだろ。

「平沢さんみたいな人が入ってくれてよかったな〜」

「一週間以内に、あと一人集まらなかつたら廃部になるところだったんです〜」

「ほんつとにありがとう〜！！」

金髪から死刑宣告でちまつたよチクシヨウ・・・

（おい平沢。そろそろ言わないとお前部活決定だぞ？）

（でもますます断りにくい状況になってるよ〜・・・）

（ああもうじれってえなあ・・・言えばいいんだろっがア）

「・・・感動的な場面で言うことじゃないんだが、こいつは入部を止めに来たんだぞ？」

「へ？・・・」

「後俺はこいつの付き添いで入部希望じゃねえ」

「マジで・・・？」

ああ・・・3人も固まっちゃったなア。わかってはいたが。

「ほんとにごめんなさい！私ギターは弾けないし、もっと違う楽器やるんだと思って・・・」

「じゃあ何なら弾けるの？」

来るかカスタネット？

「カスタ・・・！ハ、ハーモニカ！」

「あ、ハーモニカならあるよ吹いてみ」「ごめんなさい弾けません！」

「

さすが天然。予想を右斜めに行くか・・・

そして何故ハーモニカを持つてるデコ女？

「でもうちの部に入ろうって思ったってことは音楽には興味あるってことよね？」

「ほかに入りたい部とかあるの？」

「ううん・・・特には」

そういったとたんに、何故か3人がアイコンタクトをし始める。

大方平沢だけでも取り入れようって考えか・・・俺には関係ねエけど。

「本当にごめんなさい・・・じゃあ」

「あああちよつと待って!!」

「もういっぱいお茶いかが？」

平沢が帰ろうとしたが、逃さない気まんまんの部員達が制してきた。

そして、

「え……でも」

「クッキーとマドレーヌもあるの!」

「うん!」

えずけた。

- 6 - (前書き)

連続投稿です・・・疲れた。

「おいし〜」

結局簡単に引つ掛かった平沢が横でまた食っている。

(アア・・・デジャブ)

「・・・ハ！すいませんこんなにご馳走になるつもりじゃ

「いいのいいのー」

「毎日こうやって一緒にお菓子を食べましょ〜?」

「何か趣旨が違ってきてイッ!!!」

あ、パツツン足踏まれたか?空気を読めと・・・。

「平沢さん。ほかにはどんなことが好き?」

「あゝおいしいものなら何でも」

「・・・うちでは何してるの?」

「じろじろ・・・かな」

平沢が見事な二ト発言をしたおかげでデコ女が呆れかえってるぞ
オイ？

「好きなものとかある？」

「あ！可愛いものが好き、かな」

「ニガテなものは・・・？」

「熱いのも寒いのもニガテなんだ。冬はコタツにこもりっきりだ
し、夏は床の上を転がってばかりいるの」

「・・・お前典型的なダメ人間だな？」

「ガーン!!」

禁句だったかこれ？

「・・・で、どうするんだ平沢？もう行くのか？」

帰りたいので一応は助け舟を出してみるが

「うん・・・あの、じゃあ・・・」

「あ！行かないでお願い！！」ゴロゴロしてるだけでいいからー！！」
やはり制された。

「・・・それは部員として意味があるのか？」

「い、いやそれは・・・！」

「もっとおいしいお菓子持ってきますからー！」

「うう・・・」

(なんか嫌な予感・・・)

平沢の目に涙が溜まってきてるあたりで俺はどうするか考えることに。

「ごめんなさい・・・。軽い気持ちで入部するなんて書いたから」

今にも泣きそうなくらいの涙が溜まっている。

(泣くよこれ絶対泣いちゃうだろめんどくせH・・・)

「期待させるだけさせて・・・なんて謝ったらいいかああああ」

ついに平沢が泣き出し始めた。

(クツソめんどくなくてきちまった・・・。何かねエか・・・?)

「私たちこそごめんなさい・・・」

「無理に引き止めて悪かったな・・・」

(・・・部活・・・軽音部・・・音・・・音楽！)

よし・・・これで落ち着いつけば・・・

(おい軽音部三名。ちよつとじつちい)

(何・・・?)

(おそらくこいつも泣き止んで尚且つ入部するかも知れない方法がある)

(本当か!?)

(一応軽音部だ・・・。演奏ぐらい出来るな?)

(演奏?それで落ち着いてくれるの?)

(やってみなきゃわからねエがやる価値はある)

(オツケー!それならやってみるぜ!)

「ねえ平沢さん。せめて最後に私達の演奏聞いてくれない?」

「・・・え!?演奏してくれるの〜!?!」

さっきまで子供のように泣いていた平沢が演奏すると聞いた瞬間泣き止んだ。

予想以上の反応だったことに俺は

(・・・なんか必死に考えた俺がバカみてえだな)

とりあえずこのまま進めるために軽音部員が演奏の準備をし始める。

平沢は目の前の長いすに。俺は壁に寄りかかっている。

これで入れれば以後俺は苦勞せずすむはず・・・だよなあ？

「じゃあ！」

ドラムのスティックを叩きながら

「1〜2〜3〜4〜！」

流れてきたのは、小学生で1度は聞いたことがある「翼をください」だ。

ボーカルはいないから音だけだし、正直いろいろ抜けてる気がしてぎこちない。

まだそこまで練習していないのだろう。

でも・・・

「はわあ〜」

こいつがいいならそれでいい・・・

入るの俺じゃねえし。

「えへへへ。どうだった？」

「何ていつか、すごく言葉にじりじりしたんだけどー」

「うんー」

「あんまりうまくないですねー！」

「……どうしてか、何をどうして？」

「でも、すっごく楽しそうでした！」

「」「」「え？」「」

「私！この部に入部しますー！」

「」「」「！」「」

デコとぱつつんが頬をつねって確かめ合っている。

「バンザイー！！」

どろぢぢぢまぐいっただよつで。

(ハア・・・もう行ってもいいよな？やっと帰れる・・・)

そう思い、帰ろうとしたが

「ガシッ」

「・・・アア？何だ平沢？」

「りゅうくんも入部しようよ！」

「・・・俺は付いてくるだけだったはず「ガシッ」」

「人数は多いほうがいいからな〜！」

「・・・さっさと帰りたいんだがよお？」

しかし一向に離してくれる気はないようだ。

・・・もうめんどくせえ。言ットケバイイカ・・・。

「なあ？そんな無理やり」

「・・・わかった」

「」「」「え？」「」「」

「入ればいいんだろ？もう反対する気力もねエ・・・好きにしろ」
それから少し間が空き

「やった〜！」

「部員もう一人確保ー！！」

「い、いいのか？こんな無理やりで？」

俺のことがニガテなのかただの心配なのかはわからないが黒髪ぱつ
つんが聞いてくる。

「言っただろ？もう反対する気力もない・・・」

「な、なんかごめんな？」

「・・・・・・・・アア」

そんな時にデコ女がカバンから何かを取り出した

「へへ〜ちよつと失礼〜」

「あ、あたしのカメラ」

「じゃあ軽音部活動開始記念に、はいいくよ〜!」

急に撮られた写真には

デコしか移ってないデコ女、

後の三人は普通に、

俺は無表情で移っていた。

「あ、でも私ぜんぜん楽器できないし・・・マネージャーとかどうかな?」

「いや、運動部じゃねえし」

見事にデコとハモっちまった。

「そつだ。この機会にギターを始めてみたらどうかしら?」

「で、でもギターってすごく難しそうな・・・」

「大丈夫だよ〜! 私たちもわかるところは教えてあげるし〜」

平沢は少し考えてから

「そうだね！さっきの演奏聞いてたら私にも出来るかもって思えてきた！」

「・・・それはよかった」

ある意味爆弾発言をした。

「こいつの一言一言気にしてたら持たねエぞ？」

「お前も苦労してるんだな？」

「・・・アア」

「で、お前は・・・その前に名前は「りゅうくんだよ！」「りゅうくん？」

「平沢黙れ・・・。古川 龍斗だ。呼び方はりゅうくん以外で普通ならなんでもいい・・・。」

「じゃあ龍斗で！私は田井中 律！」

「わ、私は、秋山 澪。よろしく・・・。」

「琴吹 紬です。よろしくお願ひします」

「アア……。だが田井中はデコのほうが呼びやすいんだがなあ……
いいか？」

「よくねー！デコは禁止だー！……で、話がそれたけど龍斗は何
の楽器にするんだ？」

キーボードとドラムはそこまでいらねエよな多分……

じゃあベースかギターのどちらかか。

「人数が多いほうがいいのはどの楽器だ？」

「そうだなー、やっぱりギターは2名ぐらいいると助かるなー。リ
ドギターとサイドギターで分けれると曲も少し変わってくるし」

「じゃあギターで構わねエ」

「決断早！？」

「りゅうくん私と一緒にだー！頑張ろうね？」

「……なんか騒がしくなりそうだなアオイ」

こうして終わって後々「なんで入部しちまったんだよ俺……」と
思つのはまた別の話。

「え！？結局入部したんだ！？」

「しかも龍斗も！？」

「何故に！？」

次の日。

入ってしまったことにより只今尋問中・・・

「へへ〜どうしてもって言われて〜」

「で、俺はその流れで半強制にっつてわけだ・・・」

「「「マジで！？」「」」

「あ、ああ〜マネージャーとして、とかね？」

「人に言われるとなんか悔しい〜ちゃんとメンバーとして入ったんだから！」

「てか軽音部にマネージャーとかいらねェだろ」

「確かに」

「それよりも龍斗が部活だぜ!?!なんか起きるんじゃない?」

「俺は何なんだよ……?」

「べつに俺はいいことだと思っぞ」

「そうね。二人とも初の部活みたいだしいい影響にはなるんじゃない?」

「ソリヤアリガトウゴザイマス」

「うん!ギターも一から教えてくれるって言っし!」

「へえ……ってことは新しくギター買ったりするんだ?」

「……そうだ、ギター買わねえとできねえ。今度行くか……」

「うん……貸してくれないのかな?」

「くれないんじゃない?」

「はっ……!五千円くらいで買えるよね?」

「」「」「」「」「」「」

・ ・ ・ こいつ、大丈夫だろうか？

軽音部に入った後、とりあえず今日は解散することになった。

もう夕方、空はオレンジ色に雲が少しでまさしく帰る時間としてはちょうどいい・・・か。

何かを忘れてるような気もするが、とりあえず今は帰宅中。

といっても

「初めての部活・・・楽しみ〜！」

「あっそ」

「りゅうくんは楽しみじゃないの?」

「・・・さあな」

俺と平沢しかいないのだが。

「つかお前も家こつちなのか?」

「うん。りゅうくんもこつち?」

「……そのりゅうくんはやめる」

「え……やだ」

そのふざけたネームだけは取り消そうとしたが著作者の断固拒否の姿勢から、多分止めてもらうのは無理だろうと確信する。

最近は抵抗もなくなるほどどうでもよくなってきたがな……。

「……もういい。で、俺もこっちなわけ」

「へ。でも中学は違うよね？」

「俺んちは地区の分かれ目みたいな場所だから違ったんだろオヨ」

「そうなんだ。でも道は一緒だし今度から一緒に帰れるね？」

「……俺じゃなく真鍋と帰れ。あまり話すのは好きじゃねエ」

そんな親しい奴のように接してくる平沢に、龍斗は少し表情を曇らせ、拒絶した。

まだそこまで知らない奴からそう言われることにどうしても慣れない、

いや、慣れなくなったからだろうか。

「でも和ちゃんとは部活があるからたまにしか帰れないだろうし・・・。一人で帰るのはつまらないから」

「・・・そうかよ。だったら勝手にしろ」

「え？じゃあ一緒に帰ってもいいの!？」

「いやそういう意味で言ったんじゃない・・・イヤドウゾゴ自由ニ」

違うと言いいかけると平沢が落ち込みだしたので、しかたなく自由性に。

そうして進むこと数分後

「ここ私の家なんだよ」

言われたほうを見ると二階建てのそれなりにキレイな家があった。すでに平沢は玄関前まで移動していて

「今日は部活付いて来てくれてありがとう」

「・・・そりゃどうも」

「じゃあまた明日〜!」

俺に手を振りながら家へと入っていった。

(・・・本当に騒がしい奴だなオイ)

そう思いながら龍斗は自分の家に歩いていく。

歩いて10分弱ほどで龍斗は自分の家に着いた。

いたって普通の2階建て一軒家で、特に変な部分もあるわけではな
いが

「・・・やっぱり、何も変わらないか」

家の中に入り鍵を閉める。

中にあるのは生活するうえでの基本的なものだけなのは普通だとし
ても、人の気配が一切感じれないほどに静かだということが何か不
気味さを感じさせる。

(・・・買い物も忘れたか)

買い物も忘れたため、冷蔵庫の中を探り今日の夜食の材料を探し始める。

(卵と・・・納豆・・・ぐらいしか余ってねえな・・・。米は今日はお米からレトルトでいいか・・・)

そしていつも通りに作っていき、テーブルに乗せてテレビをつけながら食べ始めた。

龍斗『一人』で。

(そついやギター買わねえと・・・。明日銀行に行って・・・念のため50万ぐらいあれば大丈夫だろ。・・・一応健吾さんにも言うておくか)

一応確認をとるために携帯で掛け、電話を繋げてから数秒後に反応がきた。

『もしもし?』

「龍斗つす……すんません電話して」

『いや構わないよ。にしても珍しいね？龍斗君から掛けてくるとは』

普段俺からは掛けないので不思議に思っているようだ。

ちなみに健吾さんは俺の父親である古川 健一の双子の兄にあたる人で、ある日以来からよく助けてもらっている。

「ええ。部活でギターを買う必要があるんで、あの通帳の金を使って良いか確認を……」

『何言ってるんだい。あの通帳は君のなんだからわざわざ僕に聞かなくてもいいんだよ？』

「でもあれは……」

『確かに健一のもあるけど、あの事件は君のせいじゃないんだからそんなに思い詰めちゃいけないよ？』

「……ああ」

『それに部活でいるなら健一も喜んで使わせてくれるぞ』

「父さんがそう思ってくれるだろうか……」

『あいつの兄の僕が言うんだから信用してくれ』

「ああ・・・じゃあそろそろ」

『そつだね。部活頑張れ!』

「わかりました・・・じゃあ」

電話を切ってから、自分の部屋に行って通帳を確認する。

(今の合計金額1409万円・・・50万使うとして1359万円。
食費とか考えても大学2年ぐらいまでは大丈夫か・・・?)

父が残した保険金の計算をしながら、後の使える残金を考えていく。
それが終わってからはいつも通りに風呂に入りまたテレビを見て

(・・・そろそろ寝る時間か・・・筋トレしてから寝る・・・か)

空いた部屋で作ったトレーニング室に似たような場所で、体を少し動かしてから自分の部屋で寝た。

・ 8 ・ (前書き)

やっぱりストーリーが全然進まない・・・ (TAT)

遅くてすみませんm (((m

軽音部に入ってから次の日、

今まさに存在理由と理由と理由が一切不明な学業という名の無駄事が終わり、それぞれが帰ったり部活に行ったりするころ・・・

「龍斗。きょう一緒に帰れるか？」

今日は特に用事が無いらしい涉が俺と帰宅しようと言ってきたが

「・・・まあめんどくせエしサボるく」だめだよりゆうくん！部活いくよ〜！」

「今日はめんどくせエんだだから帰らせる」

「部活があるなら行ってきなよ？・・・ちよつと寂しくなるな」

結局帰れず、中学までほとんど一緒に帰っていたからか涉から寂しいコール。

「・・・わかったよ・・・行きゃいいんだろオ？」

「初めての部活なんだし頑張れよな！」

そこに悠二が応援をしてくる・・・ウゼエ・・・。

「お前はさっさと部活でもゴミ処理場でも好きなところにホールi
nしてろ」

「ではゴミ処理場・・・ってwhy!？」

「You are garbage」

「・・・あなたは・・・what?」

それすらわからないようだ。さすが平沢と意気投合できる数少ない
人げ・・・ゴミ。

「私も一緒に帰れないから何だが寂しいけど、がんばってらっしや
い唯」

「うん！行ってくるよ和ちゃん！」

「ほら龍斗も、行って来い」

「・・・アア」

涉がサムズアップをしながら言ってきたので、めんどくさいながら

行くことだ」。

「りゅうくん早くー！ムギちゃんのおいしいお菓子が待ってるよ」

・・・平沢の天然が今日も活躍しないことを願いながら。

「いんにちは」

「・・・」

その後、普通に何事もなく軽音部についた。

「いんにちは」

「・・・／／／」

とりあえず二人は普通として何故秋山は俺を見て俯く???

・・・めんどくせエな。

「おい秋山」

「な・・・何!？」

「何故俺を見て俯く?俺に何かあるのかよ?」

「・・・・・・・・律うゝ」

「龍斗。漣は男子とかニガテなんだよ」

「・・・・・・・・そうかよ。めんどくせえ奴だな・・・」

そう言いながら秋山を見たら

「ヒッ・・・・・・・・!」

田井中のほうに隠れた。

「睨むなって!」

「いや・・・ただ見たただけなんだけどよぉ・・・?」

「・・・・・・・・よく見て見ると目つきとか鋭いなー?これが普通?」

「・・・悪かったな殺人顔で」

田井中に言われた言葉で昔涉とかに言われたことを思い出した。
わかってはいたさ言われることぐらい。

「いや・・・なんかすまん！」

「そう思っなら最初から言っなデ」

「それこそ言っなー！」

その後軽音部員の「何故その楽器を選んだのコーナー」を終わらせた後、

時間は少々過ぎて行き・・・

「おかわりはいかが？」

「ありがとう〜」

すっかり部活ではなくお茶会になっている中、

「そういえば、ムギちゃんは合唱部に入りたかったんでしょ？」

「ええ。でもめったに出会えない、とっても楽しくて愉快的な人達の仲間になりたかったの〜」

（珍獣ってことですかー・・・）

何故かは知らねえけどなんとなく田井中と秋山の考えてることが・

「そついえば平沢さん。もうギターは買ったの？」

「唯で良いよ」

「へ？」

真面目に言ったのか、話をそらすために言ったのか・・・？

まあどつでもいいが・・・。

「私漫ちゃんのことすでに漫ちゃんって呼んでるし」

「う・・・う・・・ゆ、唯？／＼／」

いくらはずかしがりやだとしても、そこまで恥じて言っつのかいっつは・・・。

「カツハアアア〜・・・か、かわいい／＼」

なんか問題発言でたんじゃね？なあ？

「で、唯ギターは？」

とりあえず空気を変えるためか秋山が話を戻す。

「ギター？・・・ああ！そっか忘れてた〜！私ギターやるんだっけ
！」

「軽音部は喫茶店じゃないぞ？」

「・・・自覚はあったんだな？」

「い、いやまあ・・・」

結構真面目なんだなこいつ。

「ねえ？ギターってどれくらいするの？値段」

「俺も参考には聞いときてH」

「う〜ん・・・安いのは1万円代からあるけど、あんまり安すぎる

のもよくないからな〜・・・5万円くらいがいいと思うよ」

「え！？5万・・・！私のお小遣い十ヶ月分・・・」

「高いのは10万とかもあるよ〜」

「結構するなギターって・・・」

なんとなく平沢を見るとすごく笑顔で、

「部費で落ちませんか？」

「落ちません」

しかし田井中も同等の笑顔でバツサリと平沢の希望を切り落とした。

「うう〜・・・」

「これ、おいしいわよ？」

そこに琴吹が菓子差し出す・・・一番効果があるアイテムだね。

「〜」

「単純だなお前・・・」

「言っつてやるな龍斗。これが唯なんだろう」

「とにかく楽器がないと何も始まらないしな・・・」

「よし！今度の休みにギター見に行こうぜ！」

「」「」「オー！」「」「」

「じゃあ勝手に行つて来「りゅうくんも行く！」拒否権なしかよ・・・」

こうしてギターを見に行くことになってしまったが・・・サボるか？

・ 9 ・ (前書き)

最近リアルが忙しく遅れ気味です・・・すみません。

今日はギターを見に行くことになってる日。

ベットの上で寝ぼけながらもその事を思い出し、

「……………寝るか」
「……………」
「誰だよウザってえなア……………」

再び寝ようとしたが枕元においてある携帯がなりだし二度寝は遮られたので、仕方なくでることに。

しかもその相手が

「……………なんだ平沢？」

天然だということだ。

ちなみに前軽音部員とは一応アドレス交換はしたため平沢などからメールや電話がくるようになった。

『りゆうくん。もう集合場所についてる？』

「めんどくせえからパス」それはダメ！
『……………わあかったよ行きや

「あいいんだろつがよお」

眠いせいで滑舌がうまく回らないが、了承だけはしたため行くことに。

『絶対来てね！じゃあ〜』

ブツッ

「……………しかたねえ。金は一応引き出しといたし行くか」

それから龍斗はベットから立ち上がり大体黒の服装に着替え髪などを適当に整えてから、

特に急ぐこともなくマイペースに目的地へと歩き始め

「なんで他人なんざと行動しなきゃならねえんだよ……………めんどくせえ」

愚痴をいいながら進んでいく……………途中で平沢が走っているのを見たが気にせず。

建物が所狭しと立ち並ぶ住宅街に着いた龍斗は、あたりを見回して
軽音部員らしき奴等を探し始めた。

(たしかここらへんだったよなあ……あれか?)

探し始めてからちょっとすると、とある歩道橋あたりに3人の姿が
見えたので一応進み始める。

するとあちらも気づいたのかこちらに手を振ってきた。

「遅いぞ龍斗ー！早くこっちこーい！」

「うつせエよ……」

とりあえずわたり、そこから気づいたことが

「オイ。肝心の平沢はどうした？」

「それがまだ来てないんだよ」

「あ、唯ちゃん来たわよ」

琴吹がそう言つと歩道の反対側に平沢がいて、こちらに向かいながら

「あ、みんな〜！いてっ！」

まずは通行人にぶつかり

「ほ、ほうほ〜 えへへ〜」

散歩中の犬が目に入るとなで始めた。

「よ〜しよしよしよ〜しよしよしよし」

そしてさらに犬をなで始める。

・・・後1メートルにも満たないのにいつ辿り着けるんだこいつ？

「さっさとしろ平沢。ギター買いに行くぞ」

「あ、まってよ〜」

痺れを切らした俺はさっさと天然を呼び、やっと出発することができた。

「お金は大丈夫だった？」

「大丈夫だよムギちゃん！お母さんに無理言つて5万円前借させてもらったから！これからは計画的に使わなきゃ……………いっけないんだけど〜」

と言つたそばから洋服店へと足を運び始める平沢。

正直もうめんどくなつてきた…………

「今なら買える…………！」

「コラコラ」

「ちょっと見るだけ〜」

「あ……………ちょっとみんな〜」

そうしてぞろぞろと女性人が入っていくので

「どっかで時間でも潰すか・・・」

ため息をつきながら近くにあった本屋に入り時間を潰すことにして、そこからへんにあった本を見ながら龍斗は何故さっさと買いにいけな
いのかでイライラしていた。

(こんなことならやっぱり一人で行くべきだったなア・・・女子ほ
どめんどくせえ者もそうそう無いんじゃないか?)

本を適当に見て1時間ほど経過したころポケットにあるケータイが
鳴りだしたのででることに。

「・・・なんだデコ女？」

『デコ言っなって言ってるだろー！それより今何処にいる？』

「そこらへんの本屋で「仕方なく」時間を潰してるが何か問題でも
あるのかよ？」

『ごめんごめん。とりあえず　　っていう店で休んでるから来てく
れない？』

「・・・わかった」

『じゃあな〜』律・・・ここは本来私達が行くべきじゃ『ブツッ

唯一まともな事が聞こえたが、ここにおいても話が進まないのので田井
中に指定された店に

(あいっら・・・ふざけてんのかア？)

多少？イラつきながらも行くことに。

・ 10 ・ (前書き)

暇なときにできるだけ頑張りたいです。

とある店の中で平沢達は休憩しながら龍斗を待っていた。

「あゝ疲れた〜」

「買った〜」

「楽しかったですね〜」

唯、律、ムギと順番にそれぞれ楽しんだ様子でくつろいでいる。

「なあ？本当にここで古川君を待っていていいのか？遊んでたのは私達なのに」

「だ〜いじょうぶだって！龍斗もわかったって言ってたし」

「いいのかな・・・？」

「そう思えるなら秋山だけはまともだということだなア？」

「「「「いつのまに!?!?」「「「「」

「そんなことは今はどうでもいいんだよ。それよりもなア・・・田井中」

「……何デシヨウカ？」

『目的忘れて遊んで楽しんだ挙句に、待たされた側を呼び出すってのは……どういうことだアア？』

完全に切れる寸前の表情になっており

「」「ビクッ！」「」

それを見た4人はやばいという感情しか出てこなかった。

「……あ、いやその……」さっさと答えろ「動くのがめんどくさくて呼びました！」

今にも誰か殺せるんじゃないかといった龍斗の表情に3人は少し驚き律はなんとかごまかそうとしたがせかされ本音を出した。

「ハア……もういい、それよりギターは買わねエのかよ？」

「あ、忘れてた！」

「お前なあ……」

「じゃあ早く行こうぜー！」

平沢が目的を忘れていたのはスルーするとして、俺もさっさと行って帰りたいので田井中の言葉に従うことにした。

田井中に付いて行くと、「10GIA」とかいう店があり、今はその店内にいる。

エスカレーターで下に下りると様々な楽器やそれに使う部品や誰かは知らないがアーティストのCDなどが売っていて、まさしく楽器専門店と言えるようなところだ。

「すごい！ギターがいっぱい！」

「そりゃ楽器店だしなー」

「ん……ん？」

周りを見ていた平沢の視線に止まったのはダブルネック・ギターと言われる代物だがもちろん素人の龍斗も知るはずも無く

（なんだこのギターとギターが合体した奴……？どうやって弾くんだよ??）

てかこいつは何考えてるんだ？
まあ平沢は普通の発想の斜め上に行く天然だから考えるだけ無駄か
。。。

「唯、どれがいいか決めた？」

「あ、うん。。。何か選ぶ基準とかあるのかな？」

「もちろんあるよ。ギターってネイルはもちろん重さやネックの形や太さもいろいろあるんだ。だから女の子はネックが細いほうが「あ、このギターかわいい」「」

さすが天然。自分から振った話をそのままスルーするとは。。。

てか俺も自分の見てくか。

（にしてもギターってのはこんなにあるのか。。。デザインで決めるか？）

そんなことを考えているうちにあるギターが目に入った。

少し気になったので近くで見てみる。

「「Fender Stratocaster」(フェンダー・ストラトキャスター)?・・・名前は知らねえけどデザインは悪くはねえな。こっちの白色の奴にするか?」

「なあ秋山?別にこれでも問題はないか?」

「あ、ストラトキャスターを選んだんだな」

「・・・これ有名なのか?」

「ジミ・ヘンドリックスや他の有名なギタリストも使用していたタイプと同じ物なんだぞ」

「?・・・まあよくわかんねえけど、これでも良いんだな?」

「値段も悪くないし、古川君がいいと思ったならそれでいいと思うよ。私は今持つてるベースを最初に見たときに、ほしくてずっと悩んで買ったんだ。だから気に入ったのが一番いいと思うよ。」

「楽器ってそういう選び方もありなのか?」

「・・・そうか。てかその古川君ってのなんか子供扱いみたいで嫌なんだけだよお?どうにかならねえ?」

「そ、そうか・・・?じゃあ・・・りゅ・・・龍斗ノノ?」

平沢の時と同様に何故か恥らって言うてくるあたりがなんか・・・
不自然で・・・なんかナア。

「・・・恥らうぐらいなら別に」「いやいやむしろそう呼ぶべきだぞ
遷？龍斗も軽音部の一員なんだし」

「そ、そうか。じゃあ今度からそうする・・・／／」

別にいいと言おうとしたところに田井中が入ってきて逆に進め始めた。

そこから秋山には聞かれない程度に話す。

(田井中・・・お前秋山で遊んでんだろ?)

(面白かったからつい。でも3年間は会うわけだし今のうちに慣れ
させるのもいいかと思ってな?)

(・・・そうかよ。さすがは幼馴染だなあ)

(つか龍斗だけみんなのこと苗字で呼んでるだろ！龍斗も名前で呼
べ！)

(アア？そのうちってことにしとけ・・・)

(逃げるなー！)

「このギターがほしいの？」

「うん・・・」

田井中と話してる時に聞こえてきた声のほうを見ると、さっきのギターから一向に動かない平沢と相談？にのってる琴吹の姿があった。

「あいつどうした？」

「どうしてもあのギターがいらいらしいんだけど25万円もするからなー・・・それで悩んでるんだよ」

俺は決まったのでひとまず平沢達のほうに行くことに。

「あつちに安いのあるぜ？」

「うん・・・ん・・・やっぱりこれがいいな・・・」

相当そのギター、**Gibson Les Paul** (ギブソン・レスポール)とかいうのがほしいのか平沢は買えないのにその場から動こうとしない。

「私も今のベースがほしくて唯と同じ感じだったな〜」

「私も中古のドラムセット値切って値切って」

「店員さん泣いてたぞ」

「どうしてもあのドラムがほしかったんだよぉー」

二人が思い出話に花を咲かせていると

「あの〜「値切る」って？」

平沢を越えるかもしれない質問が出てきた。

（まだ小学生ならわからなくもねえが、高校生で知らねえってこいつ……）

「欲しい物を手に入れるために！努力と根性でまけさせることだよ
「！」

「すごいですね！！なんか憧れます！！」

「……憧れる要素が何処にあるんだよ」

意味を聞いて田井中のテンションに釣られたのか、琴吹も急にハイ

で答えて「値切る」というイメージ的にはババアがやってそうな方法を憶れるでまとめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふと平沢のほうを見ると、未だにレスポールを見続けていた。

そんな時に田井中が

「よし！みんなでバイトしよ！唯の楽器を買うために！」

「え〜！？そんな悪いよ〜・・・」

「これも軽音部の活動の一環だって！」

「りっちゃん・・・」

「私やって見たいです！」

「ムギちゃん・・・」

「よっしゃー！やるぞ〜、オー！」

「オー！」

平沢のギターを買ったためにバイトをすることになったようだが・・・

「・・・なんで俺が他人のために（ボソッ）」

「ん？何かいったか？」

「いや・・・なんでもねえ」

その後、ギターを買うのを忘れたまま帰ってしまい後々後悔したのはまた別の話。

・ 111 ・ (前書き)

今日はオリジナルで行きます。変な感じになるかもしれませんがよろしくです。

後感想など書いていただけるとうれしいです。

あの後俺達は特に用事もなくなったので解散となり、自転車でささと帰ろうとしたが平沢に捕まり結局歩いて帰るはめになったわけ
で・・・

「本当に手伝ってもらっちゃっていいのかな・・・？」

「まあ自分から手伝うって言ったし、お前がギターを買わなきゃ部活としても起動しねえからいいんじゃないか？」

こいつなりに引け目になってるみたいだが相手が勝手に手伝うとかほざいたんだから別に問題はねえだろうよ。
それよりもさつさと帰りてえ・・・ついでに買出ししとくか。

「平沢。お前さきに帰っとけ・・・」

「ほえ？何で？」

「食材の買出しがあるから俺は店行って来るつつわけだから先に帰っとけ」

だが心は子供のこいつが聞くはずもなく

「えゝ私も行くゝ！」

「別に楽しくもねエぞ？だから・・・ああもついい勝手にしろ」

「じゃあお言葉に甘えて」

正直一人で行きてえんだけだよ？

なんか流れにのった方が楽だからいいかこれで？・・・でもやっぱりめんどくせえ。

（店内）

「とりあえず長持ちするカレーでいいか・・・」

「りゅうくんって料理できるの！？」

「つか買出しに行く時点で気づけよニート予備軍。どうせ料理もできねえんだろ？」

「（グサツ！）・・・その言葉は重たいよ」（泣）

（やっぱりできねえのかよこいつ・・・てか逆に何が出来るんだ？）

そんなことを思いながらもカレーに必要な材料をカゴに入れていく。途中平沢が菓子混ぜようとしたがそれは止めた。

「まあこんなもんだろ・・・」

「私も手伝おうか？重たそうだし」

「少なくともお前より俺が持ったほうが速いからパス」

「もってみなきゃわからないっす！」

「・・・じゃあ持ってみるよ？」

「ウツ・・・。お・・・重た・・・い・・・」

今日の食材は2日分の量だったため、女の平沢にはちと重たかったようだ。

こうなるのはなんとなくわかってはいたが・・・。

「ハア・・・さっさと行くぞ」

「了解っす」

平沢が持てない為、結局俺がまた持って会計を済ませるべくレジへと向かう。

「ねえりゅくん！あそこ見に行こうよ！」

「アア？・・・ここ女子が行くところだろオが。何で俺が行かなきゃならねエ？」

「でもかわいいよ？」

「・・・話が噛み合わねエ」

店を出てから少し歩くと女子がよく行きそうな・・・レディースショップっていつのか？
とりあえずそんな感じのところ連れて行かれそうなのだが

「ちょっと買い忘れたものがあつたわあ。平沢、お前先にその店に入ってる」

「うん。わかつた」

・・・さて

「何か用かなア？テメエらのことなんざ記憶にねエんだけど？」

そういいながら、おそらく店をでてから付いてきたであろう不良

らしき人物数名へと顔を振り返る。久しぶりの獲物か？

「違う違う。お前が連れてたあの子いいな〜ってな？」

「そうそう。俺らとちよつと遊ばないかって誘おうとしてたわけ」

「だから貸してくれねえ？ただ「遊ぶ」だけだからさ〜」

久振りにゴミに遭遇するなア・・・アア反吐がでる。

だれが興味本位で平沢みてエなまともな奴に手エだす権利があるんだよ、なア？

「・・・そんなにやりてえなら風俗店にでも遊びに行けばいいかですかねエ？性的欲求なんて生理的欲求すら抑えられないお前らにはお似合いだろオ？あ、生理的欲求が何なのかもわかんねエか」

「はあ？何お前喧嘩売ってんの？」

「こいつ絞めてあの子もらってこつぜ？」

「いいねえ〜合理的じゃねか。ストレス発散にもなるしな」

「じゃあちよつとあつち行こつか〜？」

「・・・いいねエ」

言われるままに付いてくと、ビルとビルの間でほとんど人の気配が無い所に付いた。ちょっとした不良のたまり場かここは？ここは初めて来たからわからねエわ。これなら警察も気づきにくいだろう・・・とりあえず食材の入った袋はここらへんにおいとけばいい。

「じゃあさっさと殺ろうぜー」

「メリケンサックがポケットに入ってたんだけど使うか？」

「おおサンキュー。じゃあその青色の奴貸してくれ」

3人の内二人がメリケンサックを構えてリーダー的な奴は素手でくるようだ。

「じゃあ景品ゲットしますか」

そついいながらメリケンサックを構えた一人が俺に向かって拳を

「ボコッ！」

俺の左頬に当てた。だが顔からちょっと血が出るだけで体全体では倒れてはいない。

(アア……こいつらはハズレか。遊んでから壊すとすつか)

「あれ〜見た目からはまあまあ骨のある奴だと思ったのによ〜」

「ザコ〜！これすぐ終わるっしょ」

「……正当防衛」

「あ……？」

「……アハッ」

その瞬間に俺は、相手の鳩尾に蹴りを軽く本気で入れた。足から相手の肉を凹ませる感触がする。打ち所がよかったのか見事に吐いてくれたようだなによりだ。

「グハッ！？んゲホツゲホツんウええエえ（ボチャボチャ）」

「てめえ何しやg」

次に来た奴は足を払って頭から叩き落とす。やっぱり口だけの雑魚だなこいつら。

しかしそこまでダメージがなかったのか

「いってええなあ！」

「叫ぶなコソ！」

ドゴッ！

なんとか耐え起き上がったので、もう一度倒し一切の躊躇もださずに倒れた不良Bの顎を蹴る。

あまりの痛いのか口元を手で押さえて悶えているがそんなの知ったこっちゃねエんだって……。

そこにさらなる追撃としてわき腹を蹴って蹴って踏み潰して蹴って間接踏み潰して蹴って蹴って蹴って、と繰り返す。

すでに口元からまあまあ出血してるが……

(アア……この感触が面白エんだよ。柔らかいだけじゃなくてたまに小枝を折る爽快感みたいでマジ嬉しい)

「おい！それ以上そいつに攻撃することねえだろ！止めるよ！」

「……社会ノ屑ニ生キル価値ナンテアルノカナア？マジ戯言ナイスレス」

「そ、それだけでそこまでやるのかよ！？もう喋れないぐらいまで弱ってるじゃねえか！！」

「じゃあお前もこうなるか？早く来ないとこいつ……死ぬかもなア？」

「い、いや悪かった！もう今回のことは諦めるから助け「ボキバキ」がああ！？」

最後のリーダーみたいな奴の手の骨を少し砕いて黙らせた。

ふと半殺しにした奴の手元にあったメリケンサックが目に入ったので

「じゃあこれで殴られて声をださずに耐え切ったら見逃してやるよ、いい駆け引きだろオ？」

「な！？そんな何回かわからない駆け引きできるわけ」「お前に決定権はねエって」がはっ！？」

そっからはそいつが動けなる直前まで殴り続けた。

何回かはわからないが何度も何度も・・・手が真っ赤で汚エ。まあこの鉄の匂いは慣れすぎて逆にリラックスするんだけどな。

「お・・・お前。まさか・・・「黒の残虐者」か？」

(ワアオ・・・それまだ残ってたのかよ)

「・・・ずいぶんと懐かしいあだ名だなアオイ。てか厨二病みたいだからやめろ・・・まあそんなことはどうでもいい、先に殴ったのはお前から俺はその正当防衛ってことだ。わかってくれたかなア？」

「わ、わかった・・・もうあの子にも手はださねえから、これ以上は」

アア〜こいつ俺の話聞いちゃいねエなオイ。

「だ・か・ら・さア？お前らゴミに選択肢なんてものないわけわかれよ」

「ぐはっ！？・・・た、頼むこれ以上は・・・」

とりあえずもう一回蹴り倒すと、意識はあるが喋れなくなっただよ
うなので終わったと判断し表へと歩き始める。

一応喋れなくなるまで殴ったが数時間すれば少しは動けるだろ・・・
多分。

置いておいた袋を持つ前に頬の血をハンカチがなかったのでレシー
トでふき取り手に付いた血液もある程度払い落としてから袋を持っ
て平沢がいる店へと移動する。

店に近づくと入り口に平沢が立っていたので声をかけることにした。

「何してんだ平沢？」

「遅いよりゆうくん！ずっと待ってたんだよ！」

「ちよつと目的の物が見つからなくて少し遅くなった。放置して悪
かったな」

「んゝそれなら仕方ないのかな、ってどうしたのその顔の傷！？」

「いや少しこけただけだ。だから気にすんじゃねエ」

「・・・りゆうくんって結構ドジ？」

「お前に言われたかねえよ……」

「……なんとか誤魔化せたか。こいつは知らなくてもいいことだからな。」

「つうか逆に知られるとめんどくせえし。」

「とりあえずさっさと帰るぞ。買出しも終わったしなあ」

「ほい。あ、バイト何になるのかな？」

「少なくとも秋山が出来る……接客とか以外のものじゃねえか？」

「じゃあ澁ちゃんでも出来るバイトを探さない！」

「まあそついつこつたな」

そうして雑談をしながら俺は家へと帰り、買出ししといた食材を冷蔵庫に詰め込みいつも通りトレーニングをしようとしたが

「……今日はトレーニング止めとくか。」

風呂だけ入ってそのまま寝た。

- 12 - (前書き)

アルバイト編です。不自然にならないように出来るだけがんばりま
す。(。(b

俺は今、自分の家にいる。

その表現が正しいのかは不明だ。何故かと言えば目の前の光景は昔のリビングとそこで夕食を食べている小学生の俺と写真のころと変わらない父さんと母さんがいる。そんな光景なのだから。

『龍斗。お前が誰かを助けたり守れるようになったら、困ってる人を助けてあげなさい』

『何で?』

『そうだな。俺はただ困ってる人を見ると放っておけない性格だからだけだな?すべての助けた人というわけじゃないが、きつと何かを自分に返してくれるはずだ。それはお前の助けにも気力にもなると思うから、だな。』

『・・・簡単に言えば困ってたら助け合えってこと?』

『やっぱりお前は頭がいいな。さすが俺の子だ!』

『そうね。この子ならきつと将来はあなたみたいに人の役に立つ仕事をしてくれるかもね?』

『親子一緒に働けたら俺は幸せ者だなー。龍斗も警察官になってみるか?』

『・・・今はよくわかんないけど、父さんと一緒に働きたい』

『それは楽しみだなー!俺は待ってるぞ!』

『ふふっ。こづいづのが幸せって言うのね』

『この恥さらし共。お前ら生き恥さらしてないでさっさと死ねって』

「!?!?・・・夢・・・か」

現時刻6時30分頃。

夢から目を覚ました龍斗は少しシャツが汗で濡れていて息も荒かった。

さきほどの夢がまだ頭の中に染み付いて離れない。目覚めは久しぶりに最悪だった。

「……父さん……母さん……」

ドンツ！とベットに拳を殴りつける……だがこんなことで気が晴れることはなかったし空しさが晴れることもないことはわかってる。

「今日は学校あつたな……行くか……」

そして学校へと行くために準備をして玄関を開ける。

「父さん、母さん……言ってくる」

居るはずもない人へと話しかけるが、もちろん反応はない。それはわかっていたから龍斗もまたずに家を出て行く。

「バイト？」

「うん！ギター買ったために」

「唯ちゃんにバイトが出来るのかな？」

「ひどいよゆうくん！私だってやれば出来るもん！」

「その自信を本番に活用できなさそうだけだな・・・」

「やってみなくちゃわからないぞ龍斗。意外に化けるかもしれないし」

「・・・一理あるって認めてやる」

今はどうでもいい授業が午前は終了し、忌まわしい授業から一時的に開放された生徒が皆自分の友達と弁当やパンを食べている。俺達は机を4個ほどくつつけてイスをそこらへんから借りて座りながら食べている。

「それに軽音部の皆も協力してくれるんだ」

「ええ！？皆を巻き込んで!？」

「うん!」

「さすががしい笑顔でさらっと連行発言か・・・」

「皆つてことは龍斗もやるのかバイト？」

「・・・やりたかねえがな」

「そこも女子とのイベントだと考えて」「お前の髪の毛をライターで炙る」「地味にひどいの止めて!！」

「その発言は下心丸出しの発言としか聞こえないわよ」

「しょうがないだろ和ちゃん!それが男子なんだから!！」

「いつも通りだな」

「ウザってえくらいにな……」

「りゅうくん。女子とのイベントって?」

「……知らなくてもいいぐらいにどつでもいいことだ」

「へっ?」

悠二^{バカ}は今日も通常営業でそれに呆れながらも、さつさと部活に行くために平沢を呼んで部室へと向かう。

……今日も喫茶店だろうか?

〈音楽準備室〉

今日の軽音部は半喫茶店で稼働してたがとりあえずそこはスルー」

龍斗君はコーヒーにする?」・・・できなかったわけで、今は座ってコーヒーをたまに飲みながらバイトを探すためにバイト募集の広告などを調べている。

「何のバイトが良いかな?」

「ティッシュを配るのは?」

ティッシュ配りのバイトの話聞いた秋山が何かを考えているように。

「む・・・無理・・・」

「ファーストフードはどうですか?」

また秋山が考え始め・・・

「駄目・・・かも」

「あ、そっか。漣にはハードル高いかもな」

「・・・怖い人が出てきたらと思うと玄関の窓が押せない、オーダーが聞きにいけない!・・・はう!?!」

「み、漣さん!?!」

恥ずかしさが沸点まで到達したようだ。

そんなに嫌なら何故やるうとするんだこいつ・・・?

「う、ごめんね・・・無理しなくて良いから」

そういいながらも平沢の表情はどんどん曇っていく。

(やる前から無理だとか駄目だとかばかり言ってる。唯のギターを
買ったためなのに！・・・それは、軽音部のためでもあるのに。乗り
越えないと、自分を！)

何を思ったのかは知らないが決心したように立ち上がり

「私！何でもやるよ！！」

どんなことでもやります宣言をしだした。

親友が成長したのが嬉しいのか田井中は嬉しそうな表情をしてやがる。

「・・・あ、」

「な、何！？」

「これなんてどお？」

そう言っただけで見てきた広告には交通量・渋滞調査と書かれていた。
確かにこれなら秋山でも出来るか・・・。

「歩いてる人や車の数を数えるんだよ。カウンターを持って」

「あゝ！野鳥の会！？」

「・・・バードウォッチングじゃねえのか？」

「そうそれ〜！」

「このバイトとはまったく関係ねエけど」

「これなら濡もできるっしょ？」

「ホントですね〜！」

「……うん〜！」

〜次の日〜

今日からゴールデンウィークに突入しほとんどの人は旅行やら海外旅行やらで活発になる三連休。

そんな時に俺は平沢のギターのためにバイト……ハア。

「ほい」

といいながら田井中がカウンターを皆に渡す。

「じゃあ二人ずつ交代って行きたいところだが人数が奇数なので〜」

……オイ。何で俺のほうを向くんだよデコ。

「龍斗は男だし変わらないってことで「ふざけんじゃねえぞデコ女。お前楽しんでえだけだろ……！」デコ言うなー！それにしようがな

いじゃん誰か余っちゃうし〜」

「……この借りはいつか返すハゲ」

「ハゲてねー!!」

そんな言い争いをしている時にカチカチと音が聞こえてきたのでそちらを見ると平沢がカウンターを押して遊んでいた。
・・・それちゃんとリセットしねえと後々めんどくさくなる気が。

カチカチカチカチカチカチカチカチ

「ホッホッホッホッホッホッホッホッ」

「軽快ですね〜」

「えいやー!!」

「変な叫び声だすな……」

「ほ〜うこしやくな〜!!」

それにのせられた田井中もカウンターを押し始めるも

「りっちゃん速〜い!!」

「エへへへへーあ痛っ!!」

アホ面しながら親指を攣ったようで、俺としては大変いい気味だった。

「ざまアねえなツルピカデコさんよオ？」

「う、うるせえー・・・ああ鬱ったー！」

「ムキになるからだ」

「調査開始時間まであとちょっとありますね。とりあえずお茶にしましょ〜」

「わーいピクニック！」

「何だか心配だ・・・」

「・・・ハア」

こいつらバイトする気あるのか？

まあねえならねえで帰れるけどよお。

・ 13 ・ (前書き)

アルバイト編終了です。

さて、結局俺はぶっ通しでバイトをするわけになってしまったので、
昼までずっと座らなきゃいけないと……めんどくせえな。

んで今は琴吹と調査してる。

「龍斗君はどういうお菓子が好き？」カチッ

「……あんまし甘くなければ特に」

「ん〜……じゃあフルーツとかは？」

「自然の甘味は好きなほうだな」カチッ

「じゃあ今度フルーツ系のお菓子をもってくるわね」カチッ

「……お好きなように」

次は田井中と……一緒にやりたくねえ……。

「カチッカチッカチカチカチカチカチカチカチカチ」

「遊ぶなデコ」カチッ

だから一緒にやりたくねえんだこいつと・・・。

「カチカチカチカチ！（デコ言うなー！）」

「・・・お前今カウンターで喋ったか？」

理解できる俺も俺だが・・・

「カチカチカチカチカチカチカチ（慣れれば出来る）」

「お前だけだそんなこと出来るの・・・つかバイトする気ねえだろ
デメエ？」

「いやちゃんとやってるぜい！」カチカチカチ

「それは遊んでる奴が言うことじゃねえよ・・・」カチッ

次は平沢・・・めんどくさそうだなア。

「早くムギちゃんのお菓子が食べたいな」

「オイ、これはお前のギターを買うためのバイトだろオが」カチッ

「そうなんだけど昼まで待ちきれなくて」カチッ

「・・・まあお前らしいと言えばお前らしいがな」

「それに今日は憂のお弁当もあるし」カチッ

「……憂？」

「私の妹だよ」

「お前妹いたのかよ？」カチッ

「自慢の妹です！」

「平沢の妹……あれだな。めんどくさそうだなオイ……」

浮かんだのはこいつと一緒にくだぐだとニート生活している小さい平沢だった。

「？」

最後は秋山か……これが終われば休めるわけだが

「……」カチッ

「……」

オイ、どうすればこの空気から抜け出せるんだよ。
つか本当にこいつめんどくせェ……。

「……オイ秋山」

「な、何・・・？」

「お前そんなに俺のことが嫌なら田井中と変わってくるが、どうする？」カチッ

「あ・・・嫌いとかじゃなくてそ、その・・・」

「俺が男だからか？」

前も言ってたしな。

「うん。やっぱり男の子はニガテで・・・」

「はあ・・・3年間部活で一緒かもしれねえし慣れてはほしいんだがなア」カチッ

じゃねえと後々めんどくせえだろうしな・・・。

「そつだよな・・・私、頑張ってみるよ！」

「・・・つか話せてる時点で慣れてるような気はするんだが？」

「あ、ホントだ。話せてる・・・」

「そりゃよかったな」カチッ

「・・・うん！」

「で、慣れてきてることはいいいけどよぉ。お前カウンター押せよ」

カチッ

「あ、ごめん」

そこまで緊張してたのかよ……。

く昼休みく

ちよつとした草原みたいな広場があったのでそこにシートを敷いて昼食をとっているところだ。

平沢はさっそく弁当と琴吹の菓子を頬張り、琴吹はお茶の準備をし、俺は端らへんで寝転がり、後の二人はある程度食べたからか仰向けで休んでいる。

さっきまで平沢が持ってきた弁当を皆が食べてたり、俺は食べていないのに平沢が無駄に感想を聞いてきてめんどくさかったが……やっとな休めるか。

「ムギちゃん。すつごくおいしいんだけどこんな高そうなお菓子いつも貰っちゃっていいのかな？」

「いいのよ。いつもいろんな方から頂くんだけど、家に置いていても余らしてしまうから」

「いろんな人から余るほどお菓子を貰う家ってどんな家!？」

やっぱり琴吹ってあの琴吹のことか？

「ねえりゅうくん」

「……………」

「ねえって」

そついいながら疲れた体を揺すってくる平沢。

「……………だるいんだ。休ませろ」

「えゝ寝ないでお話しようよ？」

「誰のせいでごうなってると思ってやがる……………」

結局無駄話をしてからまた働き1日目のバイトは夕焼け頃に終了して、今はバス停で立ち止まっている。

「一日目終了」

「じゃあ私は駅へ行くから」

「あたしと遷はバス」

「唯と龍斗は歩いて帰るんだっけ？」

「うん！」

「……………」

「大丈夫か龍斗？」

「そう見えるか秋山？どっかのクソツたれのおかげでだるいんだよ……」

「まあお疲れさん！」

このデコが、ぜってえ返す……

「明日も「うん！お菓子よろしく〜！」頑張りましょって言おうとしたんだけど……」

「コラコラ」

天然は本性が出やすいと……

「でも〜余ってるんだったら〜」

「……………」

欲しそうな顔をしながら物乞い発言をする平沢に田井中が注意をし始めると、何故かコラと共に平沢の指がカウンターを押す動作を始める。

「やっぱり職業病だ……」

「……ごうというのが職業病って言うのか」

それから少し時間が過ぎそろそろお開きというところで、俺と平沢は家へと歩き始める。

「じゃあね〜！」

「おう！」

「バイバイ〜！」

「また明日〜！」

「てか龍斗も別れの挨拶ぐらい言えー！」

「……くたばれデコ女」

「言わした私が馬鹿でしたー！」

そして歩き始めたかと思うと

「あっ
」

「・・・あ？」

「お礼言っの忘れてた〜」

平沢が田井中達のほうに向いて

「みんなあー！。本当にありがとねー！私、ギター買ったら毎日練習するねー！」

それを聞いた田井中からは若干驚きながらも笑っていた。

俺が今のこいつらみたいに笑ったのはいつだったか・・・

「りゅうくんも今日はありがとう！ギター買ったら一緒に練習しようね？」

「・・・勝手にしろ」

やっぱり、無邪気な笑顔はニガテだ。

だけどそんな風に笑えることが少し・・・ほんの少し羨ましいのかも知れねえ。

今日は二日目のバイトだが

「〜つうわけで今日は一日中田井中が昼まで休憩なした。問題はねエよな？」

「何でだー!!」

「昨日は律のせいで龍斗が一日中働いたんだから、今日律が同じ目にあうことに問題はないんじゃないか？」

「そんなあ〜……………」

「じゃあ頑張れおデコ女（笑）」

「お「までつけるなー!!」」

という会話の下、今日は休めるので特に疲れることもなく無事に終了了。

今はバイトの責任者と話しているところだ。

「二日間お疲れ様」

「「「「お世話になりました」「」「」

「……………したー」

めんどくさいので紛れて言った事にした。

交通調査のバイトも今日で終了したので、今日貰った金を渡すこと

に・・・ハア。

「はい」

そう言いながら平沢に今回手に入れた金全員分をわたす

「一日8千円か」

「お母さんに前借りした5万円と合わせても、まだ全然足りないわねえ」

「一日五人分を二日だから2倍しても8万円かよ・・・。平沢の前借金5万と合わせても後12万はあるなア？」

「後何回かバイトするか」

「そうですね」

「ハア・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりこれ、いいよ」

「」「え？」「」

「は？」

まだ金が足りないことで相談していると平沢がさっき渡したバイトで稼いだ金をそれぞれに返してきた。

「バイト代は皆、自分のために使って」

「唯ちゃん……」

「お前はそれでいいのかよ？」

「うん。私、自分で買えるギターを買い」

「唯……」

「一日でも早く練習して、皆と一緒に演奏したいもん。また楽器屋さんにつき合ってもらってもいい？」

「」「」「うん……」

「……」(本当によくわかんねエ奴だな……)

「皆ありがとう。じゃあ帰るね」

「うん」

「また明日」

「じゃあねっ」

「じゃあねみんなっ」

「……」「……」

「……」

最後に田井中にある程度のダメージを与えてから歩きで帰り始めるが、途中平沢が急にエアギターをしだし痛い子だったのでそこはスルーした。
それよりもひとつだけ気になることがある……。

「お前……本当にあのギター買わなくていいのか？」

「うん」

「本当にか？……俺にはお前が無理してるようにしか見えねえがな」

「……本音を言っちゃつとすぐくほしいよ？でも皆に迷惑はかけたくないし、それに早く皆と演奏がしたいんだ」

「……そうかよ」

帰り道でそれ以上話す事はなかった。

↓次の日の放課後↓

平沢達と「10GIA」へ行くついでに、前買い忘れたギターを買いに来た俺は平沢達とともに地下へとエスカレーターで降りていく。

そして楽器店内をうろついてギターが置かれているエリアに来たときだ。

「あ……」

「ん？」

急に聞こえた平沢の声に俺らは全員振り向いてみると平沢はレスポールの前で止まっていて、こちらに気づいた平沢が笑って誤魔化した。

……平沢。お前らしくもねえな。

(父さん。たまにはあんたの言葉にのってやるよ)

「よっぽど欲しいんだな」

「よっしゃ！ やっぱりまたバイトを」

「あ！ ちよつとまってて」

「いやお前こそまって」

「え？ どうしたの龍斗君？」

(間違ってるかもしれないがこの店、お前の父親の会社の系列か何かだろ？)

(何でわかったの!?)

(前ギターを何処で買うかパソコンで調べてるときにここも調べたら琴吹って名前があったからだ。で、何かしらの方法で値段を下げよう。)

(うん。唯ちゃんのためにあのギターを値切るうかなくて！)

(まあわからなくもねえけどよ、自分の父親に迷惑かけるのはどうなんだよ?)

(でもこうでもしないと唯ちゃんがギター買えないし・・・)

(じゃあお前の会社にもデメリットなしで、平沢が損をしないでギターを手に入れられる方法があるとしたら?)

(・・・!そんな方法があるの龍斗君?)

「「「?」「」」

琴吹と内緒話でのサウンド会話を終わらせまず俺がすることはいたって簡単だ・・・後の三名が俺と琴吹が話している内容が聞こえないからか「?」を浮かべているがそんなの知らねえ。

まず自分の買おうとしてた白基調で少し黒色のあるストラトキャスターを取り、次に平沢の前にあるレスポールを取って「え?りゆうくん?」そのままレジへと持っていく。

「このギター二つとも買っんで会計頼みます」

「二つともですか?わかりました。では2系とギターケース2つで合計31万6560円です」

そうして50万円の半分以上を琴吹の会社に貢献し、買ったギターと付いてきたギターケースを持って平沢達のもとに行く。

「なア？これでお前の会社にもデメリットを出さず、平沢も払わずにすむ『方法』ってわけだ」

「でもそれじゃ龍斗君が「別に問題はねエから気にすんじゃねえよ・・・」

「だけど31万って結構高いだろ？いいのか？」

「元々50万持って来てたからなあ。一応予算内だ」

「何でそんなに持つてるんだよ!？」

ある程度質問に答え終わると何故か動揺した平沢が俺のほうに来た・・・かなり遠慮がちで。

「りゅ、りゅくん？その・・・本当に私のも買ってくれたの？」

「何だ？このギターいらねエのか？だったら返してくるが」

人はこうでもしねエと受け取れねエしな。これでいいだろう、父さん。

「ほしいです!でも・・・25万だよ？タダで買ってもらっていい金額じゃないし・・・」

「チツ・・・めんどくせエな。さっさと受け取れ天然」

「うっ」

あまりのじれったさにイラついてきた俺は、めんどくさくなったのでレスポールとギターケースを平沢に押し付ける。

「……ありがとうゆくん！！お金はちゃんと返すから！」

「いやいらねエし。つか返せないだろどうせ……」

「太っ腹だな龍斗〜！（唯のことが好きなのか〜？）」

耳元で田井中がくだらないジョークを放ってきた。

それにしても、「好きなのか」だ？その感情がなくなってる俺に言うのか。

「それはねエよ。ただ、父親のことを思い出ただけだ……」

「父親？」

「いや、お前には関係ねエ……」

「？」

（父さん……。あの金はあるのだし、たまにはこういうことに使っても問題はねエよな？警察にはもうなる気はさらさらねエけど、些細なことならあんたの言葉を守れるかもしれないからよ……

）

「ふん！」

そんな掛け声と共にギターを構える平沢。

「「「おお〜！！」「」」

「へへっ」

ギターを買った次の日。平沢は上機嫌でギターと共に登校して来て、今こうして現在に至るわけだ。

「ギター持つとそれらしく見えるね」

「なんか弾いてみて！！」

「ん・・・」「チャラリ〜ララ　　チャラリララ〜」

田井中と秋山は呆れ顔に、琴吹は苦笑。
まあそうなるわな・・・。

「・・・チャルメラかよ」

「まだ・・・全然練習してないの？」

「いや〜だってギターってキラキラピカピカしてるからなんか触るのが怖くて〜」

「ああ〜わかるわかる！」

「鏡の前でポーズとったり、写真撮ったり、添い寝したりはしたんだけど〜」

「弾けよ」

「それがこいつだ。諦める田井中」

「・・・そうだな」

「そういやギターフィルムも外してないもんね」

それを聞いたとたんに田井中が震えながらも

「トリャー！ー！！」「ビリッ

外した。

「ああ！・・・あ、ああ・・・あ・・・」

何でかフィルムが外されたことにより平沢のテンションが底まで落ちていった。

「なんちゃって〜」「律！謝れ！！」「ゴメーン！！ほんの出来心だっ

「ただゴメンね唯ちゃん!!」

「唯ちゃん。お菓子お菓子」

「そんなもので機嫌が」

「はむはむはむ」

「なおったあ!？」

「菓子がこいつへの最終兵器で決定だな・・・」

そして食べ終えた平沢が田井中の手をとってこう言い放った。

「そうだよな。ギターってやっぱり弾くものだよな。ただ大事にしてるだけじゃ可哀そうだよな・・・!ありがとうっちゃん!私やる気出てきた!!」

その言葉に調子にのった田井中が

「そ、そうか!?!唯が練習するきっかけになればと思って「せいっあ痛!!」」

「・・・ナイスチョップ」

秋山から直接制裁が下った。

「そっぴやりゆうくんのギター姿まだ見てないよ?」

「別に見るものでねエだろ・・・」

「でも見てみたいかも！」

「・・・ハイハイ」

そうして今度は俺がギターを構える・・・田井中はもう復活しているようだ（チツ）

「」「」「おお〜！」「」「」

「なんかスゲー様になってるなー」

「りゅうくん本当のミュージシャンっぽい！」

「本当に様になってる・・・」

「ですね〜！」

なんだこの状況・・・まだギターを構えただけだぞオイ？

「りゅうくんも何か弾いてみて！」

「・・・あんまし弾くもんねエぞ？」

「いつそのことチャルメラでいくか？」

「それは止めとく・・・じゃあ弾くぞ」

〃
〃
〃

「まだそんなに覚えていなかったので昨日少しだけ覚えた「カルマ」でも弾いてみた。」

「でも・・・案外悪い気分じゃない。むしろ楽しいのか?・・・いやねえな。」

「・・・1番しか覚えてねえからこつからさきは弾けねえわ」

「ひ、弾けてる・・・!」

「何で弾けるんだ・・・!?!」

「帰ってから一応コードだけは全部覚えたからなあ。暇になったんで少し曲で練習してただけだ」

「早っ!?!」

「すごいな・・・こんな早く覚えるなんて」

「驚きました・・・」

「りゅうくんすごい!」

「・・・もう終わったんだがらさっさと練習でもしろよ」

「あ、そうだな!じゃあ練習するか」

「ねえねえ?ライブみたいな音出すのはどうしたらいいのかな?」

「ええ〜!?!」

「デコの中身はお花畑か・・・」

「夢に溢れてると言え!」

『チャラリ〜ララ　チャラリララ〜』

そんなときに平沢がアンプに繋いだままチャルメラを弾いたため全員のテンションが低下した。

「ごめん。まだこれしか弾けない。アンプで音を鳴らすのはもう少ししてからだね〜?」

そういいながら平沢がアンプに繋がっているコードを抜いた瞬間

「は!あ、危ない!!」

「へ?」ブチッ

『キイイイイイイイイイイイン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

アンプから凄まじい金属音が音楽室内に響きわたり全員が耳を塞ぐ。

「アンプのボリューム下げの前には抜くとそうなっちゃうんだよぉ・・・」

「は、早く言って・・・」

「・・・耳が痛エ」

こんなんで武道館ライブなんて出来ねエぞぜってエ・・・。

・・・先が思いやられる。

- 13 - (後書き)

龍斗は記憶力がいいだけなので完全記憶能力というわけではありません。後ギターの腕もまだ一般レベルです。そのうち上がるかもしれません。

タイトルの形を変えてみることにしました。後平日はリアルに忙しいため更新率が低下してしまいます・・・すみませんm()m()

「ギターの弦って怖いよね。細くて硬いから指切っちゃいそう」
「ミヨ〜ン」

平沢が弦をいじりながら田井中に話す。

「そつだぜ〜気をつけないと指が切れて血がドバァっと！」「キヤア
アー!!!」

「うつせえ……」

田井中の言葉を聞いた秋山が、何故かは不明だが急に叫び声をだした。

結果として本日2度目の耳へのダメージとなっちまったか……イ
テエ

「遷ちゃんが悲鳴を？」

「い、痛い話は駄目なんだあ〜(TT)」

「こいつビビリか……」

「……痛い話「も」の間違いだろオが」

「そつだけどあ〜……」

「大丈夫だよ澁ちゃん。ほんとに血が出てるわけじゃないから」
未だにしゃがみ込んで聞きません姿勢を保っている秋山を落ち着かせるべく、
平沢が本当に血が出てないことを手を見せて証明していた。

「あ、・・・おほん！まあ練習してるうちに指の先が固くなるから血が出たりすることはないよ。ほら」

そう言っただけは自分の手を平沢に見せる・・・てか明らかに誤魔化したよなこいつ？

んで平沢は差し出された手の指の先が本当に固くなってるか確かめるためかは知らないが触り始めた。

「うはあゝ 本当だゝ！プニプニゝ」

5秒経過

「プニプニゝ」

15秒経過

「プニプニゝ！」

「あの・・・もういいかな？／＼／」

「も、もうちょっとだけ！！」

本当に練習する気あるのかこいつら？

その後も結局まともな練習をせずに解散となった。

〜次の日〜

「龍斗〜！一緒に帰ろうぜー！」

「パス」

「ししないでくださいよ〜！？」

放課後になり今日は部活がなかった気がするが、悠二と帰ると疲れるので丁重にお断りさせていただいた。

「…………お前今日部活は？」

「今日は休みで特になにもないんだよ…………だから、な！」

それで俺と帰ろうと…………ハア。

「へぶしっ!」

イラツときたので横腹にジャブを突っ込んだ。

「さ、さすが龍斗……キレが違う……ぜ」

うずくまってゴミが感想を言ってきたくれるが正直どうでもいい。

「つかよオ?こんなめんどくせえ時に涉は何処行ってんだ?」

「すうーはあ……何でも中間テストの勉強だとか言ってたぞ?」

「……ああ。そっぴやそんなこと行ってたな」

『 』

話していると携帯が電話の音のほうで鳴り出したので画面を見てみる。

「平沢?何か用かあいつ?」

「ん、唯ちゃんからか!いいよな、龍斗は女子にモテて……畜生
」!

「ハア?……まあ出ておくか」 『 P.i 』

さっきの話は後で聞くとして、めんどくさいが携帯の通話ボタンを押し、顔の右へと携帯を寄せる。

「何だ平沢?」

『あ、りゆうくん今何処にいるの?』

「何処つて今帰つてるところだが・・・?」

『ええ!?!今日部活あるよ!?!』

「……………今日は休む」

『え?ちよつとまつ』』 P.i』

これ以上追求されるとせつかく家の近くまで来ているのに戻される気がしたため、強制的に通話を切った。

「で、唯ちゃんからは何だつて?」

「今日部活あつたつてよ・・・めんどくせエからサボることにしたかな」

「おいおい・・・せつかく唯ちゃんが呼んでくれたのにそりゃないぜベイベー」

「黙れ後語尾にベイベーとか付けんなキモイ」

「そんな一気に言わないでくれませんか!?!」

暇つぶしに悠二にダメージを与えたところでさっきの疑問を聞いてみることにした。

「で?俺がモテるってどういうことかなア?

ふざけて言ってるなら即テメエの股にぶら下げてるウィンナーとミートボール潰してやるから正直に言いやがれ」

「あれです！龍斗って結構クラスで人気高いんです！！言ったからそんな男限定の死刑宣告やめたげて！！」

「ハア・・・？ふざけてんのか？」

「マジだつて！女子と話した時だけどさ」

俺が知り合つたクラスの女子と話しているときのことだ。

「ねえねえ悠二君。古川君ってどんな人？」

「私も気になる〜！普段は怖い感じだけど授業中寝てる時の顔みたらキヤー！つてなつちやつたの！」

「私はクールなところが好きなのよね〜」

「「「で、どうなの悠二君！？」」「」」

「は〜・・・龍斗って結構人気なんだな〜」

「・・・てわけです〜。元女子高だからかわからないけどうちの高校かわいい子多いしな！俺もモテてー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？・・・どした？」

「・・・・・・・・いや、そういうことにはどう反応したらいいのかわかんねエだけだ」

違う。忘れてだけ・・・・・・・・これも違う・・・・・・・・

「俺だつたら喜ぶZE」「キラッ

「下心満載のコメントアリガトウ」

・・・・・・・・出来なくなったのか。

「おかしい・・・・・・・・！こんな時いつもなら俺に致命傷を負わす筈！何故だ！？」

「お前に触りたくねエだけだ」

「それはそれで傷つく・・・・・・・・」

駄目だ、吐き気が・・・・・・・・。

「あ、もう着いちゃったのかよ〜つまんねえ〜」

話しているうちに俺の家の近くまで来ていて、さらに5分ほどした場所に悠二の家があるためここからは悠二一人で帰らなければならぬ。

「……………じゃあな」

「おお、また明日な〜！」

そう言いながら俺は家へと入っていった。

- s i d e - 源 悠二

俺は龍斗と別れて一人で自分の家へと帰宅している。

今日は部活もないのでなんとも暇な日だが……ひとつやっちゃいけない事をしてしまったようだ

(やっぱり好かれてるだのそういう感情系の話は駄目だったか)

あの時、確かにわかったことがある。

(あの話をした後、いつもなら殴ってくるのにしなかったし……
なによりあいつの顔が一瞬だけ『あの頃』に戻った)

やっぱり、まだ残ってるのか……？

- s i d e - 平沢 唯

「で、龍斗は何だった?」

「今日は部活休むって……」

今日部活に行こうとした時にりゆうくんがいなかったから（先に部室に行ったのかな?）と思い部室に行ってみてもいなかったのだからさっき電話してみたら……ということだった。

「龍斗今日は来ないのか?」

「どうせサボりだろー（笑）」

「りゆうくんにギター教えて欲しかったのに」

「じゃあこれ使う?」

「さるでもわかるギターコード……なんかバカにされてる気がするよ澁ちゃん?」

「だ、題名はあれだけど内容はわかりやすいから」

これでわからなかったら私ってサル以下なのかな?……なんかやだな。

「そつえば龍斗君のお菓子どうしようかしら?」

「私が食べる!」

「食い意地張りすぎ……」

「中間テスト日」

今は教室でテスト中・・・

（ハア・・・めんどくせエ）

確かに大学までは学力という武器になるので一応覚えてはいるが、正直大学以降ほとんど役に立たない知識を試したところで何になるのだろうか？と思いつつも答案用紙に書き込んでいく。

そうして3日間の中間テストが終わり、今はいつものクラスメンバーで話している。

「テストの感触はどんな感じだった？」

涉が俺と真鍋のほうに向けて聞いてきた。

「いつも通りで特に何もねエな」

「そういいながらも理数系はほとんど100点いつてるんだろっ?」

「あれは基礎さえ覚えてれば考えようでどつとでもなるしなア」

「龍斗ってそんなに頭いいの?」

「ああ、昔からテストで20位以内だったぞ」

「案外龍斗ってすごいよね。・・・それよりも」

「ああ、・・・あの二名?」

「あいつらテストでミスったか?」

そう言っつて平沢と悠二のほうを見る。

二人とも同じ空気を漂わせながら「どうだった唯ちゃん・・・?」

「真つ白です・・・」「・・・ミスったではすまされないことを話し合っていた。

「唯、悠二・・・テストどうだったの?」

「・・・全然」

「それ笑顔で言うことじゃないだろ」

「・・・似たもの同士はテストも似てると」

こいつら追試とかあったりしてな・・・いやさすがにない・・・
とは言えねえか。

・ 1 5 ・ (前書き)

中間テスト編中間です。後感想や指摘など書いていただけるとうれ
しいです。

- 音楽準備室 -

テストも先週で終わり答案が返された日の部活。

「んん〜！やあっとテストから開放されたー！」

そついいながら体を伸ばしてリラックスする田井中

「高校になってから急に難しくなって大変だったわ」

中学と違って難しかったと言う琴吹

「そうだな。そして・・・」

「あっはっはっはっ・・・」

「もっと大変そうな奴がここに」

秋山の言葉でさっきから魂の抜けたような笑い声のほうを顔だけ向けると、自分の答案用紙を持ちながら「あっはっはっは・・・」言い続けてる平沢が。

「そんなにテスト悪かったのか？」

「ふっふっふ・・・クラスでただ一人、追試だそうです」

「そうそう。ちょっと頑張れば追試なんてよゆーよゆー！」

「うんうん！」

「勉強はまったくしてなかったけど」

ああ・・・空気が凍ったぞオイ。田井中と琴吹の応援は無駄になっ
たなア？

「・・・励ましの言葉返せこのヤロー！！！！！」

「無理だろ・・・」

だいたいどうやって返すんだよ？

それから菓子を食べ数分たった。

「なんで勉強しなかったのさー？」

当然の疑問を田井中が平沢に聞く。

「いや〜しようと思ったんだけど。なんか試験勉強中ってさ、
勉強以外のことに集中できたりしない？」

「あ〜それはあるな〜。部屋の掃除はかどったりなあ」

「でしょ〜。勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなっ
ちゃって。結局全然勉強できなかったの〜」

「テスト勉強ほったらかして練習したんならそれなりには覚えただよなア？」

それで対して覚えてなかったら赤点とつた意味もねえしな・・・

「うん！おかげでコードいっぱい弾けるようになったよ！」

自信があるのかピースしながらの宣言。だが赤点付きだからか決まらねエなア・・・

「その集中力を少しでも勉強に回せば・・・」

「そついうりっちゃんはどつだったのさ〜！」

「あ、私？」

鞆から数学？の答案用紙を取り出し

「余裕ですよこのとおりー！！」

89点を平沢に見せ付ける。

「こんなの・・・りっちゃんのキャラじゃないよ・・・」

「・・・それには激しく同意する」

「ホッホッホッホッ！私ぐらいの人間になると何でもそつなくこなしちゃうのよ」

「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに……」

「ホッホッホッホッホ」テストの前日に泣きついてきたのは何処の誰だっけ? 「うおちよ! ?ばらすなよ! !」

結局人に頼っていたことがばれると、平沢が同情するかのよう田井中の肩に手を置き

「それでこそ、りっちゃんだよ」

「赤点取った奴に言われたくねー! !」

「お前……哀れだな」

「りゅうくんまでそんなこと言わないで……」

逆に励ましたが田井中のほうが正論なので平沢が本当に哀れに見える。

「澁ちゃんとムギちゃんは何点だったの?」

「はい」

「どござ」

そう言われると秋山と琴吹は答案用紙を平沢に渡す。

(共ほとんどの教科が90点代後半か。さすがってところか……)

「ほえ」

「……！ま、まあそんなもんだよなー！私ポカミスしちゃったからさーハハツハハツ……頼むから何か言ってくれ〜(TT)」
答案用紙と田井中を見比べて何も言わずに頷いたのが気になったのか返信を求めている。

「りゅうくんも見せて〜」

「めんどいから勝手に鞆からだせ……」

「ほ〜い………おお〜半分ぐらい満点だよっちゃん
「！」

「何ー！」

そうやって俺の答案用紙を田井中達にも見せ始め……勝手に触らせるんじゃないかなア

「……マジで満点あるし」

「理数系が全部満点だな。得意なのか？」

「まあ基本的にな……」

「すごいですね〜」

「でも英語は平均ぐらいだなー」

「英語はめんどいから勉強してねエんだよ」

「それで平均までとれる龍斗もどうかと・・・」

今日は中間テストで疲れているからか練習は特になく部活は終了した。

・・・つか最近練習とかまともにしてなくねエか？楽だから別にいいんだけどよオ。

- 次の日 - 音楽準備室内

テストの件について職員室に呼ばれていた平沢が戻ってきた。

「あ、今日は羊羹」

軽快な感じで席に座り食べ始め

「は〜む〜モグモグ・・・追試の人は合格点取るまで部活動禁止だつて」

「」「ええ!?!」「」

「・・・あつそ」

「あつそで収まることじゃないだろ!」

和やかな空気を一瞬で破壊した。

「結構厳しいな〜・・・」

「そしたらここにいるのもまずいんじゃないよ。大丈夫だよ。お菓子食べに来てるだけだし」そっかーそれなら安心だー・・・ってなんでやねん！！」

「ギブギブギブギブギブ」

平沢の発言にキレた田井中が首に腕を引っ掛けて絞めたことにより平沢からギブが連続で発せられている。

「あ、でも龍斗はいるから部活が廃部することは避けられるんじゃないか？」

「そこはいいとしても、また勉強しないで追試をやり続けられたら文化祭でアウトだろ」

「そこまで続かないと思うけど練習する時間は確かに減るな・・・」

「逆にそこまで続くことのほうが奇跡だと思うんだけどよオ？」

「「「だな」」」

「唯ちゃん。追試はいつあるの？」

「ここでやっと平沢が首絞めから開放された。」

「一週間後にだって」

「一週間後か〜・・・」

「それだけあれば毎日ここに来て大丈夫だよ〜」

「・・・・・・はい？」

「だぁもう！そんだけしかないの！！」

「お前だけギター弾けなくてもいいのかよ？」

「うっ、それはやだよ〜」

「じゃあ追試に備えて一週間は勉強しろ・・・」

「うん。頑張つて勉強する！」

また勉強しねエとかねエよな・・・？

- side - 平沢 唯 PM9:23 自宅内

「ちと〜、ち〜るん〜」

追試を終わらせてムギちゃんのお菓・・・みんなと部活をするため

にがんばるぞ！っていきこんでみたのはいいけど部屋は散らかって
るし机の上は漫画とかお菓子のゴミとかでいっぱい。。。

「なんでこう散らかってるかな？」

このままではできないので漫画や本を本棚に入れて教科書とかを整
理していると前に湊ちゃんから貰った「さるでもわかるギター」
ド」の本が・・・

「あ・・・」

いや勉強勉強！でもまだ6日あるしちょっとくらいなら・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

「」

結局唯はギターのほうに集中してしまい、気づいたころには午前1時を過ぎていた。

「あ、もうこんな時間・・・！お風呂入って寝なきゃ！」

まだ入っていないから、ギターをベツトに置いて風呂場に行くことにしたけど・・・何か忘れてる気がするんだよね。まあいいか 気にしたら負けだね！

- side out -

- 音楽準備室 -

追試まで後6日を切った。といってもまだ一日だけしか経過しては
いないが。

「はむ・・・なんか唯がないと張り合いが無いな」

「その割にはよく食ってるな？」

「デコも光ってるなア？」

「へへーそれとこれとは話が違いますわん・・・つかデコ言うな
って言ってるだろー！」

その言葉通り未だに今日の菓子っていうよりデザートプリンママモードを普通に食べている。

「唯・・・ちゃんと勉強してるかな？」

「ん〜大丈夫なんじゃない？」

「・・・あいつのことだから予想は通じねエぞ？」

「なんか尚更心配になってきた・・・」

そしてなんだかんだで追試前日。

「とうわけで澁ちゃん助けて〜!!」

「え!?!勉強してきたんじゃないの!?!」

「できなかつたあ〜!(TTT)」

「ええー!?!」

軽くマジ泣きで秋山に頼み込む平沢が今目の前にいる・・・

「・・・ハア。なんとなくわかってはいたがなア」

「ぢぢしぢぢし・・・(TTT)」

「うん……よし！今晚特訓だ！」

「本当！？ありがと澪ちゃん！！」

「澪に教えてもらえば確実に合格点取れるぞー！」

「いや／＼」

褒められたのがうれしいのかテレ笑いをしている

「うまいんだぜー？一夜漬け教えるの！」

「うおおい！？普通に教えるよ／＼！」

……一日でこいつの頭に知識が吸収されるかが心配なんだが。

- 16 - (前書き)

中間テスト編なんか終わりそうです。後半分ぐらいオリジナルになってしまったので間違ってる部分があるかも・・・。

P M 5 : 3 6 住宅街道路

あの後、勉強できなかった平沢のために平沢家で勉強を教えることになり今向かっている。

ギターを買ったときはまだそこまで暑くなかったためブレザーを着てても問題はなかったが、今は6月中旬。

だんだん気温も上がり尚且つ湿気も高いため非常にイライラする季節だ。

田井中は冬服でも対して変わらなかったが制服を着崩して、平沢らは普通に着て、俺は中にシャツを入れたくないので田井中同様シャツ出しという着こなしで歩いている。

192

「今日はお父さんが出張でね、お母さんも付き添いでいないから気兼ねしなくてもいいよ〜」

「あれ？妹がいるって言ってなかった？」

「うん。妹は帰ってきてると思う」

「それだと迷惑にならないかしら〜」

「『唯ちゃんの妹か〜』……………」

平沢がもう一人いる感じだと最初は俺も思ったが、バイトの時弁当

を作った憂とかいう奴のことだとすると平沢とは違うか・・・？

「げんぜん大丈夫なんじゃない？」

「そうかもな」

「ですね」

それぞれ考えが同じだったのだろうか？人とも笑って馴染めそうだ
と思っっているようだ。

そんな話をしていると平沢の家が見えてきたので、俺は帰ることに
した。

「・・・じゃあな」

「」「」「え？」「」「」

「え？じゃねえよ・・・。俺は行くとは一度も言っただろ？」

「じゃあ何でここまで来たんだよー？」

「俺の家がこの先にあるからとしか言い様がねえんだが・・・」

「そういえば龍斗もこっちだったな」

「そういつことだ」

理由は言い切ったと思い自分の家へと歩き始めようとする

「え〜りゅうくんも軽音部なんだし入ろうよ〜！」

「そつだそつだー！部長命令だぞ！」

軽音部という理由をつけて俺を引き戻そうとしてきた・・・

「帰っているいろやらなきやならねエからパスだ」

「いろいろって？」

「・・・夜食の準備とかそんなところだ」

実際は家事全般だけだな

「親に任せればいいじゃん」

・・・それが出来ねエからやってるんだっつこの「デ」が

「親は今出張でいねエんだよ」

「じゃあうちで作ればいいんじゃないかな〜？」

「お前の妹に迷惑だろオが・・・」

「私から言うから大丈夫だよ。だから、ね？」

「・・・なら別に断る理由はねエけど」

「りっちゃん隊員！りゅうくんを確保しました！」

「よしでかした平沢君！さ、それをさっさと入れてしまえ！」

「人を物扱いすんじゃない」「了解！」オイ自分で歩けるから押すなっつもの！」

また丸め込まれたっていうのかこれ・・・ハア

「さすが唯と律」

「ですね〜」

そんな会話が後ろでされていたことは、龍斗には聞こえなかった。

「はい上がって上がって〜」

「「おじやましま〜す」「」

平沢の家に入り秋山と琴吹は礼儀正しく挨拶をし、残り二名は

「いい加減に押すのを止める」

「「え〜」「」

「じゃねエよクソ共・・・」

「まあ！乙女にクソだなんて・・・！」

「デコの間違いだろ？」

「何をー!!」

そんな言い争いをしてしているとリビングのほうからだと思うが知らない奴が出て来た。

・・・こいつが憂か？

「あ、お姉ちゃんお帰り〜。あれ？お友達？」

「うん」

「始めまして、妹の憂です。姉がお世話になってます」

そう言うってから靴箱に近づき、中から俺達の分のスリッパを取り出し前に並べて置いていく。

「スリッパをどうぞ」

（（出来た子だ〜・・・!!））

そこからスリッパを履いて二階の平沢の部屋へと上がっていった。

今思ったが男が俺だけって何か意心地悪いな・・・

- 平沢の部屋内 -

女子四人は机にそれぞれ座り、俺は壁によりながら座っている。

「いや〜姉妹でこころも違うもんかね〜?」

「何が〜?」

「妹さんに、唯のいいところ全部吸い取られたんじゃないの〜?」

「ひっど〜い!それはあんまりだよりっちゃん!」

「ひひっ」

そんな会話をしているとドアを軽くたたたく音が聞こえた後、平沢妹が入ってきてお茶などを持ってきた。

「あの〜皆さんよかったですらお茶どうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど」

()() (本当に出来た子だー・・・!) ()()

そして机にお茶と菓子を置いていく。

「憂ちゃんは今年生?」

「中3年です」

「おおー、ひとつ違いじゃん」

「受験生ですね〜」

「はー」

「何処受けるかもう決めてる？」

「うん・・・出来れば桜ヶ丘高校に行きたいんですけど、私の学力で受かるかどうか」

「お姉ちゃんでも受かったんだから大丈夫だよ」

「逆に何で平沢が受かったのか聞きたいがな・・・」

「受験の時はちゃんと勉強したんだよ！」

「お姉ちゃんに勉強教えてもらったらいんじゃない？」

そう秋山が言った後、平沢も頷くが

「え！？それは・・・自分で出来るから」

妹のほうは一緒に暮らしているからだろう。自分の姉がどっいう奴かわかっている故に遠慮がちに拒否した。

「アハハハッ！断られたぞー！」

「ええ！？何で何でー！？」

断られた理由が思い当たらないようだ。

「赤点とったからじゃねエのか？」

「ガン・・・！」

「それを言っただけでやるなって」

バツサリと思いが当たる節を言ってみると平沢はショックを受け田井中に止められた。

「でも！お姉ちゃんはやるときにはやる人です！」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

「えへへへ／＼／＼」

そこに妹が姉の尊厳を守るためかフォローを入れてきた・・・この子本当に平沢の妹か？

「つか平沢。台所借りていいのかよくないのかどっちだ？」

「あ、憂。りゅうくんが夜ご飯作るのに貸してほしいんだって。いいかな？」

「そうなんですか？それなら別にかまいませんよ。食材とか用意しときましようか？」

「それは自分で買うから問題はねえ。貸してもらっただけで十分だ」

「わかりました。じゃあ私は台所を整理しておきますね」

そう言っただけで平沢妹は部屋を出て行った。

「・・・出来すぎだろ」

「確かになー」

今俺は食材を買ったために平沢家を後にしてスーパーへと入っていく。

後、食材を買いに行こうと下に降りたときに平沢妹から食材が足りないから買ってきてくれませんか？とかなり遠慮気味で言われたため（台所借りる身でもあるため）断れず一緒に買うことに。

（つかそもそもあの時帰っていれば買いに来る必要もなかったんだけどなア・・・）

そう思いながらも今日の夜食の食材と平沢妹に頼まれた食材をカゴに入れていく。

（・・・一人分だけ作って終わりつつのもなんか悪イし、やっぱり何か振舞ったほうがいいか？）

ふと思いついたのでもう一度食材売り場まで戻り2、3人分ほど余分に買ってレジで集計し、スーパーから出て平沢家に向かう。

ガチャッ

玄関を開けてリビングにある台所へ向かう。

「平沢妹。お前に言われた食材買って来たぞ・・・」

「あ、龍斗さん。ありがとうございます」

そう言つて机に食材の入った袋を置いて台所に向かう。

「龍斗さんは何を作るんですか？」

「アア・・・今日は魚が食いたい気分だったから魚の身を切つて刺身にでもするつもりだが」

「じゃあ醤油とか机に出しときますね」

（何だこのサポート万全っ子は・・・？）

んで袋から買つてきた鮪やサーモンなどの身をパッケージから出してまな板に置き、包丁で一口サイズに切っていく。

後は刺身を盛り付ける皿に刺身自体を買うときによく一緒に入っている千切りにした大根をのせ、その上に切つた刺身がある程度考え置いていき青じそなどをのせていく。

「妹。刺身食えるか？」

「え？食べれますけど」

「・・・そうか。一応お前らの分も作っておくから食べたかったら食べていいし、いらなかつたら捨てておけ」

「いいんですか頂いちゃっても？」

「台所貸してもらったし一応感謝も込めてってことだ・・・」

「ありがとうございます。じゃあ後でお姉ちゃん達と一緒に食べさせてもらいますね」

「・・・そうか」

それから数分後・・・

「まあ久しぶりに作ったにしては上出来か？」

「店に出せそうなくらいにキレイですね」

「そりゃありがとうございます・・・」

出来た刺身を乗せた皿を机に置いて、それを見た平沢妹が店で売られているのと同じようだと叫んだ。

作った側としては悪い気分じゃねえな・・・。

んで自分の分を食べ始めると平沢妹が話しかけてきた。

「龍斗さん。お姉ちゃんって学校ではどうですか？」

「・・・赤点、天然、ドジ、時々意味不明な行動をする」

「うう・・・でもお姉ちゃんにもいいところはあるんですよ？」

「ああ。悪い奴ではないのはわかるがな」

「はい。お姉ちゃんは確かにちょっと抜けてるところはありますけど、心の優しい人です。それにお姉ちゃんって見ると癒されるんですよ。・・・龍斗さんって、もしかしてあの中の誰かと付き合ったりしてるんですか？」

少しシスコンな部分が見えた気がしたが変な質問によってその思考は吹っ飛んだ。

「は？・・・いや付き合っちゃいねえけど何でそんなことを聞いてくる？」

「その、最初見たときに（この男の人誰なんだろう？・・・まさかこの中の誰かの彼氏！？）って思ったので聞いてみたんです。不快にさせたならすいません・・・」

そういうと平沢妹は俺をイラつかせたと思ったのか徐々にしょんぼりしていく・・・めんどくせえな。

つかそういうところは姉妹一緒か・・・。

「だから謝るなよ。気にしねえから・・・一応言っておくが俺が来たのはお前の姉とデコに強制連行されたからだ。だから変な誤解すんじゃないね」

「え？お姉ちゃんと律さんが？」

「部活が一緒ってだけで行く気はなかったがこの通りだ・・・」

「アハハハッ・・・」

「つまり俺はあいつらとは部活が一緒なだけで特別な関係は一切ねエってことだ、わかったか？」

「はい。いろいろ誤解しててすみません。でも龍斗さんってイメージと違って結構優しいですよね？」

「・・・どうしてそう思う？俺が優しい奴には見えねエだろ普通」

「でも頼んだ食材を買ってきてくれたり、私達の分の料理も作ってくれたり、お姉ちゃんのこと悪いところもいいところもわかっていてくれたり・・・十分優しいじゃないですか」

俺が・・・優しい？

「・・・」

「・・・？龍斗さん、どうかしましたか？」

「・・・ありえねエ。」

俺は他人を平気で半殺しにしたりするような狂った人間だ。それが優しい・・・？

「・・・アリエナイ。」

ソナモノ、アノトキニホンシンカラストエタンダ

「・・・もう7時だな。そろそろ夜食にしたほうがいいんじゃないか？」

「あ、そうですね。じゃあお姉ちゃん達呼んできますね」

そう言っつて平沢妹は勉強しているであろう平沢達を呼びに行った。

その後は平沢妹が作った料理と俺が作ったさっきの刺身を、平沢達と途中にサンドイッチを差し入れに持ってきた真鍋なども一緒に食べながら話し始めた。

途中俺の作った刺身を見て……

「憂。この刺身っつてそのまま買ってきたの？」

「ううん。龍斗さんが作ったんだよ」

「マジで！？店とかで普通に売っつてそんな感じじゃん！」

「まあ真似て盛ったようなもんだしなア。刺身自体は市販のものだから味は普通だろうと思っつてよオ？見前だけはまともにした」

「龍斗っつて意外と家庭的なのね？知らなかったわ」

「家事はだいたいやっつてるしな……」

「なんか龍斗っつて何でも出来るよな」

「家事っつて何だか懂れますね〜！」

「慣れると疲れるだけだぞ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・とこんな会話があったわけだ。

で、俺も夜食を作り終わったので上に行きほとんどは秋山だが疲れたときに数学はできるので変わりに教えたりして9時を過ぎたころに追試の内容はすべて終了した。

そして帰ろうとして下に行くとは何時からかはあまり覚えていないが田井中が平沢妹とテレビゲームをやっていた。

「また負けたー！」とか言ってるあたり連敗か・・・てか連勝してる平沢妹のほうもどうかと。

そして田井中を引き連れて「お邪魔しました」「・・・した」といってそれぞれ帰っていった。

・ 追試当日 音楽準備室内 ・

軽音部内では

秋山が落ち着きなくつろつろ歩き

田井中はいつもと変わらず菓子を頬張り

琴吹は湯のみにお茶を注いだまま固まっております……って

「お茶零れまくってるぞオイ」

「え……あ!!」

……琴吹までこれか。

「唯……大丈夫かな？」

「大丈夫なんじゃないの？」

菓子を頬張りながら気楽に言う田井中に

「もっと心配しろ!!」

「ひっ!？」

秋山がキレる。

なんつうか……カオスだ。

- 数日後、追試返却日 音楽準備室内 -

「今日返却だよね……?合格点取れてるかな唯……」

「あれだけ勉強したから大丈夫なはず・・・」

秋山と琴吹が心配していると音楽準備室の扉が開き「真っ白になった」という比喻があいそうな平沢が入ってきた・・・

「ど、どうだった!？」

「・・・どうしよう澪ちゃん」

「え?・・・また駄目だった?」

そう秋山が言うと平沢は答案用紙を前に出し

「ひゃ、百点取っちゃった!!!」

「極端な子!!!」

平沢が満点を取った記念にと写真を撮った。
答案用紙を持ちながらピースする平沢が写る。

「でもよかつた〜!とりあえずこれでひと段落だな!」

「そうだね〜!」

「みんなのおかげだよ〜 本当にありがと〜!」

「いや〜それほどでも」お前は何もしていない!〜!〜!」

これで平沢が遅れることはなくなったか・・・
まあいいほうへと進んだつつうことか。

「じゃあ早速練習しましょー!」

「今日はまともやるんだな・・・」

「いつもまともだぞー」

「いつも喫茶店の間違いだろオが」

「試験勉強中にも練習したみたいだし、どれだけ弾けるか弾いてみてよ」

「へへ〜ばつちりだから。XでもYでも何でもござれ」

「「「「?」」」」

全員が?になった瞬間だった。

そして秋山がまず琴吹にアイコンタクトするが琴吹は首を横に振り

次に俺にアイコンタクトするが俺も意味がわからないので首を横に振る。

最後に田井中にもアイコンタクトを交わすがもちろん田井中も首を横に振る。

とりあえず聞かなかったことにしたのか秋山が通常稼働を始める。

「じゃあ『C』『Am7』『Bm7』『G7』って弾いてみて
「ほいほい。……………」

平沢が弾こうとギターを構えるが急に止まり

「……………どうしたの？」

「……………忘れた」

「「「なあああ〜!!」「」

全員倒れた。

「ずっとXとかYとか勉強してたから〜」

「またーから〜!?!」「えへへへ〜……………」

……………笑いで誤魔化したなこいつ。

「え〜とこれがXだっけ?」

「ちよ、そんなコード見たこと無いぞ?」

その会話を聞きながら田井中と琴吹は笑いあっている。
いつもの軽音部に戻ったのがうれしいのだろうか……………

「ああ違っところだ〜!」

そしてまた見たことない弾き方をする。

「澪ちゃん！これがXだよ！」

「だからそんなの無いってばー!!！」

「ええ〜！……」チャラリ〜ララ、チャラリララ〜」

「それは弾けるんかい！」

まあ、いつも通りのグダグダな部活で俺は楽だがな……。

- 17 - (前書き)

ただ今テスト習慣で書く時間があまり無く遅れてしまいました。4
話の前半です。

「合宿をします!」

いきなりだ。本当にいきなりで、秋山が勢いよくドアを開け俺たちに指をさし堂々と宣言した。

音楽準備室に平沢と着いてみると中に田井中だけがいて琴吹はまだいないためか、それまで練習しとこうということになり――

「あつゝ指いゝ!」

「本当に忘れたんだな・・・」

「・・・赤点の意味なかったじゃねエか」

平沢が前の追試の勉強で覚えていたコードをすべて忘れてしまったため練習しているが・・・まあ変に弾こうとして指を攣り若干涙目になっているわけだ。

「えへへ〜おばあちゃんによく褒められたんだ〜。」「唯はほかの事

とりあえず合宿の計画を立てるために秋山が皆を机に座らせて話し始める。

「夏休みが終わったらもうすぐ学園祭でしょ！」

「学園祭……」

「そう。桜高祭での軽音部って言えば昔は結構有名だったんだぞ？
それなの……に」

また秋山の話の聞かずに学園祭に真っ先に反応した二名は

「学園祭……！」

「高校の学園祭ってすごいんでしょう？」

「模擬店！」

「焼きそば！」

「たこ焼き！」

「わあ〜！」

すでに軽音部の演奏のことなど忘れ学園祭を楽しむことが優先事項になっていた。

テンションが上がったのか勢いよく手を挙げ発言し始める。

「はいはい！私、メイド喫茶がやりたい！」

「え〜！お化け屋敷がいいよ〜！」

そして秋山を間に言い争いを始める平沢と田井中。

「メイド喫茶！」

「お化け屋敷！」

・・・イラつくな。

「メイド喫茶！！」

「お化け屋敷！！」

・・・イラッ

「ほー！絶対メイド喫茶のほうが」「うるさい（セ）」「！」「ドムッ」

イラついたので秋山が田井中を、俺が平沢を黙らせる。

「うう・・・痛いよりゆうくん（ト）」「

「澪はいつも通りで痛い・・・（ト）」「

「子供みてエに言い争いするテメエらに問題があるんだよ」

「私たちは軽音部でしょ！ライブやるの！」

ガチャッ

ふとドアが開いた音がしたのでそちらを見てみると琴吹が来た

「ごめんなさい。遅れちゃって。・・・ん？」

今の現状

仁王立ちに腕を組んでさっきまでアホ二名を叱ってた俺と秋山。

その下で正座しながら頭をさすっている平沢と田井中。

・・・この現状から大体を察したのか

「マドレーヌ・・・食べる？」

今の空気を菓子で変えようとした。

そして机の上に紅茶とマドレーヌを置いて皆落ち着き始める。

「まあ〜」

「ムギはどっと思っっ？」

さっきまでいなかった琴吹に理由を話し意見を求める秋山。

「いくら慌てずやっついていっっっって言ってももう二ヶ月にもなるの

に一度も合わせたことないなんて」

「まあまあまあまあ」

「6回……」

琴吹のまあと言った数を何故か数えていた平沢……意味ねえな

「……行きましょ〜ぜひ！みんなでお泊りするの夢だったの〜！」

「そうなんだあ〜！」

「じゃあ海にする？それともー」だから！バンドの強化合宿って言うてるだろ〜！」

秋山がいいかげんこのやり取りに嫌気がさしたのか最後あたりが裏声になるくらい高く否定する。

「っひひひ……」

それに押された田井中は苦笑。

「あ、でもいくら位掛かるのかな？」

「そつだぞー？きつくないか？」

「そ……それは……」

どうやらさきほどの秋山は勢いだけだったようだ。そんな時に何を思ったのか琴吹のほうを向き

「ム、ムギ？」

「はい？」

「別荘・・・とか「ありますよ」

「」「あるんかい！」「」

「さすがお嬢様。軽く言えるあたりがすげエ・・・」

琴吹の会社って結構大きいんじゃないか？

次の日の登校時。

いつも通り涉、悠二と登校中・・・

「じゃあ夏休みに軽音部の皆で合宿に行くのか」

「・・・不本意だな」

「それより軽音部って龍斗以外全員女子じゃないか！？羨ましい・・・」

「黙れ下心の化身が」

「そんなこと言ってる！龍斗だって本心ではピ　とかピ　など
したいと思っているはずだー！！」

「・・・まあ男だしそれはあるだろうな」

「ちょ！？そこは拒否るとこじゃねえの！？」

「お前と違って認めることはちゃんと認めんだよ」

そこがお前との違いだ存在理由0野郎

「それよりもこんな大通りでそんな話しないでくれ・・・」

渉が言うとおり、ここはそれなり的大通りで少なからずとも俺たちと同じく登校中の生徒もいる。

そんな所で自分の知り合いがさっきの話し合いなどしてればそう思うのも頷けるが

「何だア渉？お前この歳になってもまだ下ネタ等に抵抗があるのかよ？」

「・・・ああ。やっぱり慣れなくてな」

「真面目だな。さすが永遠の委員長。今年も委員長&生徒会だしな」

入学式から数日後、クラスの係りを決める時に委員長立候補者がい

なかったので推薦となり最初は真鍋と渉と後は知らない女子が拳が
つたが、近差で真鍋に渉が勝つてしまい今年も委員長になった。

そして生徒会選挙でもまだ一年生なので会計という手頃な役割で立
候補し、当選したというわけだ。

「なんであの時和じゃなくて俺が勝ってしまったんだ・・・」

「見た目とか性格からだろーよ」

「見た目と性格ついたら渉そのものだろオが・・・」

「この話しはやめよう、何だか疲れるんだ。それより龍斗はその合
宿に賛成したのか？とても龍斗が賛成したとは思えないんだが」

「ご名答・・・俺は行かねエつつたらいつもの流れで強制的にテイ
クアウトだ。しかも海があるから水着までもってこいと」

「というか何であいつらは男の俺が行くことに不満がないんだ？秋山
も前と違い軽音部だから来なさい！って感じだったしよ・・・」

「龍斗って案外女の子に弱かったり？」

「・・・さあな」

話している内に高校に着いたので昇降口まで歩いていく。

つか俺ってマジで女子には弱えのか・・・？

・夏休み 合宿当日1日目・

家から自転車で普通にこいで行く。

待ち合わせの駅に着くとすでに田井中、秋山、琴吹はいたが平沢の姿が見えなかった・・・もう集合時間は過ぎていているというのに未だに来ないらしい。

「なあ漣・・・?」

「うん。ちょっと電話してみる」

P r i r i r i r i r i

十秒ぐらいして平沢に繋がる。

『・・・もしもし』

「・・・おはよう」

『・・・・・・・・・・・・・・・・おはようございます』

少し間が空き・・・

『ごめんさあああああい！！』

完全に寝坊していたようだ。

「それより早く準備して来て！！駅に間に合わないからー！！」

平沢は確か自転車を持っていないつつうことはここまで歩いてくるのに最低でも15〜20分。

後10分ほどで列車が来やがる・・・！

『でも時間がー！！』

また目的地行きの列車をまつとかめんどくせえんだよ・・・

「携帯貸せ」

そう秋山に言ってすばやく貸してもらおう。

「今から自転車ですっち行くからお前はできる限りこっちにこい」

『え！？うん！わかった！』

そして秋山に携帯を返して

「つつわけだから俺と平沢の分の券も買っつけ、金は後で返す」

「ああ。頼むぜー！」

自転車に乗り平沢のほうへと走り始める。

残り6分・・・駅から後半辺りの場所に平沢を見つけた。

「早く走れ平沢ア！」

「荷物があつて、しんど・・・い・・・」

そんな事じゃねエかと思つたよ・・・めんどくせエな

「俺の自転車を使え。シヨルダーバックは俺が持つからお前はギタ
ーを背負つてさっさとさきに駅に行け」

「りゆうくんはどつするの!?!」

「俺は走つて行くから早くしろ！」

自転車のイスの高さをある程度低めにして平沢にわたす。

「わかつた！」

そう言つて平沢は自転車でさきに走つていく。

・・・俺も行かねエとやべえな。シヨルダーバックは肩で担げばな
んとかなるだろ。

その後ギリギリで駅に間に合い今は列車の中でしゃべり始めている。

「はあ〜！何とか間に合った〜！」

「あれだけ寝坊しないように言ったのに」

「へへっ、ごめんりっちゃん。ワクワクしてうまく眠れなくて〜」

「まったく小学生か〜」

「いや、そうでもないみたいだよ？」

今寝ているのはムギと龍斗の二名。

ムギは平沢達と、龍斗は一人で後ろの空いていた席に寝ている。

「ムギちゃん・・・夢だって言ってたもんね」

「っふふ」

「「「ん？」」」

「ふふふふふ、ゲル状がいいの・・・」

（ゲル！？）

そこに疑問を持つのは秋山だけのようだ。

「どんな夢見てるんだろ〜」

「よし！写真に収めとっせー！」

「よしなよ〜可哀想だよ〜」

そう言う割には平沢も楽しんでいる。

「思い出思い出ー！」カシャッ！

そして機械音とフラッシュと共にムギの寝顔をデジカメに収める。

「……………んん……………あ、ごめんなさい」

べつちやら機械音で目を覚ましてしまったようだ。

「ほら起きちゃった〜！」

「へへ、悪い悪い〜！」

「そついえば龍斗は？」

「あ、龍斗〜？」

呼びながら後ろの席のほうを見ると

「……………」

「どしたのりっちゃん？」

「いや……………」瞬別の人かと思ってビックリしたぜー」

「え？・・・あ、りゅうくんも寝てる」

さつき走った疲れで寝てしまったようだ。

「人の寝顔って素直だな」

「うん。あ、りゅうくんのも撮ろうよ」

「お、いいなー！では・・・」カシャッ！

「おい。何してるん・・・龍斗か」

「龍斗君も楽しみにしてたのかしら？」

「いやさつき走って疲れただけだと思う・・・」

俺が寝てる間にこんなことがあったのを知るのは後ほどだった。

・ 1 8 ・ (前書き)

来週でテスト週間が終わる・・・(TT)更新遅れ気味です
いません。

合宿編中間です。感想、指摘あったりするとうれしいですm
―― m (――)

「りゅうくん。着いたよ」

声から平沢だと眠たいながらも認識しつつ、揺らされる事に少しイヤつく・・・寝てたのか

「揺らすな・・・」

「あ、やっと起きた」

どつやら目的地の駅まで着いたため平沢が起こしてきたようだ。

「龍斗早くしろー」

目を擦りながら声のほうを見るとすでに列車の降りている田井中達が見えた。

「・・・ハア。めんどくせエ」

睡眠不足ながらも横に置いてあった荷物の入っている鞆とギターを持って電車を出る。

そして歩くこと数分・・・

「でっけー！」

「おお〜！」

目の前には一軒家5〜6個分ほどの建物が・・・別荘だからか？
としても大きすぎるだろ・・・。

「本当はもっと広いところに泊まりたかったんだけど、一番小さい所
しか借りられなかったの」

「一番小さい？・・・これで？」

「金銭感覚狂ってやがる・・・」

「一番小さいと言うのにそうとはまったく思えない別荘とこの別荘を
一番小さいと言う琴吹に驚きながらも中へと入っていく。

「おおー！すげー！」

「ほわあ〜！広〜い！」

多分6人ぐらいいても窮屈と思わせないほど広いリビングに天然&
デコは大はしゃぎ。

「ん？あれは・・・」

「・・・高級そうなフルーツだな」

秋山の目線にはテーブルに置かれた数々のフルーツが綺麗に置かれ

ていた。

「あ、ごめんなさい。何もしておかなくていいって言うておいたんだけど……」

どうやらこれらは琴吹の召使いとかそういうのがやってくれたようだ。と理解していると急にはんっ！と扉を開ける音がしたのでそっちを見てみる。

「ここは何だー！ー！」

「おお〜！お姫様ベット〜！」

まさしくお姫様ベットというのがふさわしいベットが置いてあった。

次は冷蔵庫を開ける。

「えいやっ！ー！」

開いた先にはおそらく黒毛和牛と思われる肉の塊がこれまた綺麗に飾られている……。一度は手をつけてみるのもありか？

「うまそ〜！ー！」

「〜／／／！ー！」

平沢は声もでないのかただ感動している。

「ごめんなさい(TT)」

「……泣くなよ」

「私は普通のお泊りがしたいのに……」

「あいつらは楽しんでるんだから別にいいんじゃないかねエのか？」

「そっかしら(TT)？」

「いや……だから泣くなっつの」

金持ちの考えはよくわかんねエな……。

そしてここに来た本来の目的である軽音部の練習する場所へと移動する。

何故か平沢と田井中の姿がないため、後の俺と秋山と琴吹で移動している。

「いつもなるべく普通にしたいって言ってるんだけど、なかなかわかってもらえなくて……」

あれで普通だと思ってるんだから召使い共に琴吹の普通が理解できるはずもねエわな。

「どうぞ。しばらく使っていないからちゃんと動くか心配だけど」

「……うん！大丈夫そう！」

部屋に入り秋山がアンプ等の確認をして安心する。

つつか使ってなかったって言う割には綺麗だな・・・結構広いシアンプ等の傷も埃もほとんどねェし。

「あれ？唯と律は？」

「・・・さつき別の部屋に走っていったが」

「はあゝ。しようがないな・・・」

そう言いながら秋山が鞆から赤色を基調とした四角型のラジカセを取り出す。

「なにに？それ？」

「ああ、これ？」

そして秋山がラジカセの再生ボタンを押すと

『 ー！ ー！！』

ライブなどでありそうな激しい音とボーカルの声が流れ始める。つかボーカルが完全に発狂してるんだが？

「・・・昔の軽音部の学園祭でのライブ。この前部屋で見つけたんだ」

「上手・・・」

確かに俺らみたいなの初心者と比べると正直比にならねェ。・・・それより

「これっていわゆるへビメタって奴じゃねエのか？」

昔の軽音部ってへビメタ系だったのかよ……。

「確かにそうだけど……私達より相当うまい」

「うん」

「なんか……聞いてたら、負けたくないなって思って……」

「それで合宿って言い出したのね」

「うん……」

つまりこれを聞いて今のままではいけないと思い合宿をしようとしたわけか……正直どうでもいい。

「……負けないと思う」

「……！」

(……ただのひ弱なお嬢様じゃねエみたいだな?)

「私達なら」

静かに、だが力強く琴吹がそう言う。

「……………ムギ」よおーし!!あつそぶぞー!!」

「Oh!!Yeeeei!!」

「って早!?練習は!?!」

シリアスな空気を一瞬で崩したのはいつの間にか水着に着替えて勢いよくドアを開けた平沢と田井中。……つかデコ、その手に持つてるオモチャの銚は何だ?

「先行ってるから、3人とも急いでね〜!」

そしてアホ2名は海のほうへと移動していった。

「……………これでも?」

「え、ええまあ……………」

「ハア……………」

「おーい!!」

「早く〜!!」

呆れ返っているとまだいたのか平沢と田井中がさっさとこいとコール。つか誰のおかげで軽く放心状態になってると思ってるやがる……。

「ちょっと待ってて〜!。漣ちゃん、龍斗君。行くっ?」

「ええ！？ムギ行くつもり！？」

「せっかくだし、少しぐらいなら。ね？」

「え？・・・でも、私は「ムギー！行くぞー！」

「はい！じゃあ待ってるから。澁ちゃんも龍斗君も早くね」

そして琴吹は平沢達のほうへと走っていった。

「龍斗はどつする・・・？」

「ハア・・・。俺達だけでやっても意味がねエし」

そう言っつて俺も琴吹の後を追う。

そして部屋を出るとすぐそばに平沢達が隠れていた・・・？

「・・・何やってんだよ？」

「いいから見てろっつて！多分もうそろそろ・・・」

田井中の視線の先を見ると半泣き状態の秋山が。

「ううう・・・ううううう！私も行くうう！(TTT)」

「よっ」

「いやよしじゃねエだろこれ・・・」

「ついでに軽音部の初合宿1日目は遊ぶことになった。

俺は今、岩場の上で寝転がっている。

この別荘は全体的に整理されてるからかはわからないが岩場が比較的平らだったのでこの上で休むことにしたのだ。

最初は平沢と田井中に

――

「りゅうくん！今から面白い遊びやるから一緒にやるつよ〜！」

「・・・何の遊びだ？」

「この誰もいない貸切状態でこそできる無人島ごっこだー！」

「というわけでよろろつよりゅうくん！」勝手にやっつけアホ「え〜
なんで〜!?!?」

ぶうぶう言ってくるが知ったことじゃねえ。

「今なら探索隊長に任命してもいいぞー！どうだー！」

「クソどうでもいい・・・」

.....
の岩場で休んでるわけだ。

（大体練習するっていうから一応軽音部として来ただけなのに何で遊んでんだよ・・・）

「ハア・・・考えるだけめんどくせエ」

ふと海岸側を見ると、田井中が水着姿の秋山を見たとたんにビーチボールを秋山の顔面に投げつけていた。

（・・・アア。ビキニつつうか水着で胸が見えやすくなってるから自分の胸と比べた結果あれか。アホらしい）

ちなみに田井中は黄色とオレンジを基調とした水着で、平沢はピンク色でひらひらが付いてる水着、秋山は黒、琴吹は白のビキニの水着だ。

俺は黒と赤がところどころにあるトランクスタイルの水着だが、どうでもいいか・・・。

（泳ぐ気にならねエな・・・泳いだのは何時だ・・・？）

確か・・・中1の夏休みに家族一緒に.....

目の前には普通の海水浴場。午前10時ぐらいに着いたため来客数も結構いる。

「よし！泳ぐぞ龍斗！海と塩が俺らを待っている！」

パラソルとシートと水筒やいろいろ担ぎながらも俺を掴む。

「塩は最初から海に入ってるってちょ！？引つ張んなよ父さん！」

「あまり無茶させないでよ健一さん！」

「わかってるってー！さあ行くぞー！」

「だから引つ張るなつつうのー！」

.....
さんと泳ぎで競争したり、カレーをどちらが先に食い終わるかとかしたり、途中で父さんが弱めのクラゲに刺されて（特に問題はなかった）母さんが無駄に心配してたりしてて案外楽しんだのは今でも覚えてる。

（二人とも何処か出かけることが好きだったのかよく一緒に遊んだな.....）

本当に、あのころは楽しかったんだろう。

.....今ではその感情すら思い出せねえ、楽しかったという記憶はあるのに。

(・・・俺って今生きてるんだよなア。なのに・・・生きてる気がしねエ)

多分、今誰も信じてないんだろオな。

涉も、悠二も、平沢達も、それらの高校で知り合った奴らも含め誰も、誰一人として心から信頼してないのだろう。

(この人間の社会で生きる以上、表面だけは普通にしていて本心ではいつ裏切られても大丈夫な態勢・・・結局は信じてねエのか)

・・・『あの時』を境に俺は普通はあるはずの感情が欠けてる・・・

・・・
・・・
・・・
・・・

・・・
・・・
・・・
・・・

・・・
・・・
・・・
・・・

・・・
・・・
・・・
・・・

.....

.....アア、死んどけばよかつたんだ。

「.....チツ」

いつも一人になると考えてしまうことに対してイラつきながら舌打ちをする。

(俺は.....)

ふと昔を思い出していると、下のあたりで一気に走る音がしたのでそちらを見るとしゃがみこんで耳を塞ぎながら震えてる秋山がいた。どうやら岩の壁に張り付いてたフジツボが原因のようだ。

(どんだけ怖がりなんだよ・・・お化け屋敷とか行ったら失神すんじゃないねエ?)

そして近くにいたのか田井中が秋山の耳元で何かを呟いている。

「うわああああー!!」

何を聞いたのかは不明だが秋山が叫ぶ。つつかつつせエんだよ・・・

「お、りゅーくん発見！何で急にいなくなるのさ？」

一緒に来てたのが平沢と琴吹も来ていたようで、下の騒ぎを見ていた俺に気づいたようだ。

「……別にいいだろオが」

「一緒に遊ばない？」

「……俺が入ってもつまらねエだろうから止めとけ」

つか女子は女子で遊んだほうが楽しいだろ……。

「そんなことないと思うわよ？ほら、せっかく来たんだし行こ」

(……!?)

そう言っつて琴吹は俺を引っ張る。意外に力があることにも多少驚いたが

(……デジャブだな)

「あれ？りゅうくんが反対してこない？」

「……」

「龍斗君？」

「……アア。考え事をしてただけだ。……行くならさっさと行け」

「じゃあ行く〜」

「今日の龍斗君は素直ね〜」

「・・・そりゃ悪かったな」

こうしてこの後海岸あたりまで戻ってきて海で競争させられたりビーチボール投げしてたり、無駄にクオリティの高い砂の城があったので「何だよこれ？」と聞いてみると琴吹が作った物らしいと判明したりとまあいろいろあった。

俺はそこまで遊んじやいねエがな・・・。

「あ〜海水飲んだ〜！」

「たどり着いたぞ！黄金の島ジパング！！」

今はもう夕日が昇り空がオレンジ色に染まっている。
そして意味不明なことを言いながら田井中と平沢が砂浜で大の字に寝転がる。

「まだまだ〜！」

「あ〜」

「おお、いつのまに〜！」

そこにここに来た目的も忘れていたのであろう秋山がスイカ丸々一個を持ってきた。

スイカ割りでもするつもりか・・・？

「せっかく海に来たんだから思う存分遊ばないところまで来た意味が・・・」

「「？」」

「・・・」

秋山と俺は立っていて、後3名は砂浜に座りながら秋山を見る。

しばらくの沈黙の後・・・

「あ——————！！！！練習！！！！」

「忘れてたのかよ」

田井中もちよいあきれ気味に呟く。

「マ、マツタク・・・律ガ遊ボウトカ言ウカラダゾ」

言い返せないことがわかっているのか、言い逃れにしか聞こえない棒読みの戯言を吐く秋山。

「一番楽しそうに遊んだのは誰だ・・・！！」

「ツーン」

もう言うこともなくなったのか初めて聞く効果音らしき音をだす。

この合宿の主催者お前だろオが秋山・・・。

・ 19 ・ (前書き)

合宿編中間あたりです。

- 別荘内 リビング -

とりあえず本来の目的を思い出した秋山により練習することになったが、それぞれ海が楽しかったのか遊び終わったとたんに食欲がきた為食事をする事になった。

「・・・で、誰が飯作るよ？」

水着から着替えた俺達は夕飯をどうするかを決めることに。

「私がやるっ！」

勢いよく手を上げ宣言してきたのは田井中。

「お前料理できるのかよ・・・」

「家ではそれなりに作ってるからな」。普通ぐらいには出来るぜ

「あっそ

「反応薄・・・」

そもそも他人に興味がねエし。

「りっちゃんすげいねっ！」

「そろそろそろこの待つてたんだよ！さすが唯！」

「えへへ／＼／」

照れる要素が何処にある……

「じゃあ作りますか」

「おお〜！」

「……肉は俺にやらせろ」

「お、龍斗が乗り気とはめずらしい」

「見た時に手をつけてみようと思ったただけだ」

……料理は俺の、唯一の趣味みたいなものらしい。

料理をしていると俺は何故か落ち着くみてエだ。理由は本当にわからねエがな……。

「じゃあ料理人もやる気みたいだし作るぞー！」

「」「」
「お〜！」

「……誰が料理人だオイ」

だが気にするだけ馬鹿みたいなのでさっさと作ることにした。

・別荘内 練習場のスタジオ室・

「あーお腹いっぱい」

「床が冷たくて気持ちいい／＼。こっちは目を開けると、なんか波に流されてるみたいな感じするよね？」

「あ、ほんとだ／＼」

「お休みなさい／＼」

「お休み／＼」

「始めるぞー！」

「二人とも起きて！」

「ZZZZ」

夜食も食い終わり練習するはずだったが、食べて満腹になり眠気と海で遊んだ疲れが襲ってきたためだろっ平沢&田井中が床で寝転が

り始め寝る始末。

「ああ・・・」

「ムギ。ちょっとどいてて」

すると秋山はベースに繋げてあるアンプを平沢達の前に置くと、ベースを構え

『・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！』

ベース特有の低い音ながらもアンプを通して大音量で流す。

「「うう・・・」」

一応離れている俺と琴吹にはそこまでダメージはないが、至近距離で流された平沢らが目覚めるぐらいのダメージはあったようだ。

・・・練習すんならさっさとやってほしいんだがな。

強制的に起こされた平沢と田井中もそれぞれの位置に着き、秋山がベースの調整をしていると

「なー？今日はもう止めにしようぜー」

「練習が目的でここに来たの！」

「その本人が一番楽しそうに遊んでたんじゃねエのか？」

「ふ、普通に遊んでたぞ！」

「私よりも楽しんでたのにか？」

田井中が俺の言葉に乗ってくるようにニヤつきながら秋山に問う。

「それはそれ！とにかく練習するの！」

問題をつやむやにして目的を押し通す秋山に、呆れつつギターの調整をする。

「ちえー」

「・・・！」

ふと秋山が何かを閃いたような顔をして

「そついえは律々？最近太ったんじゃないか？」

「えっ？」

「特に〜お腹の辺りとか〜」

「ええ！？」

田井中が叫びながら自分の腹を確かめ始めた。

「最近ドラム叩いてないからかな？」

「!!!!!!」

その言葉を聞いた瞬間、田井中が「オギャー!!!」とか叫びながらとにかくドラムを叩き始め、その様子を見て秋山が計画通りといわんばかりの顔をしていた。

こいつ・・・幼馴染だけあるのか田井中の操作方法知ってやがる。

「もう、ギター持てない」

「ええ!?!」

そう言つてギターをスタンドに置き、またもや床に座り込む平沢。田井中は何とかできたが平沢の対処はできなかったようだ。

「だってこのギター重いんだもん」

「だから軽いやつにしておけつていったのに」

「誰だ〜! コノギター買ウツテ言ツタノハ!」

「お前だ!?!」

「ハア・・・。買っんじゃなかったな・・・」

金が無駄になつたじゃねエか

「そこはちゃんと感謝してるから大丈夫だよゆうくん!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・言う言葉がねエ。

その後の事は正直予想できるだろオが一応話そう。

平沢がダウン。田井中も釣られてダウン。練習ができない。そこから何故か学園祭の話に移行。田井中による「秋山がメイド服を着るとどれだけ似合うか」討論がおこなわれ、その話で自分のメイド姿でも想像したのだろう秋山が田井中の頭へ渾身のクリティカルアタック（拳骨）。練習不可能？となり息抜きに外へ。

そして今へと至るわけだ。

外は暗く夜空がよく見える時間に

「終わったら練習するからな」

「・・・お前何時スイカ切りやがった」

別荘の広場で俺とスイカを食っている秋山は座り、田井中と琴吹はいつの間にか並べた大型の花火の左右でしゃがみながら待機。

「わあかってるって」

田井中は琴吹へアイコンタクトを送り

「うん！」

琴吹も返事をしてから

「？」

「予算がなー」

「いつかまたやりましょ？」

「そうだな。武道館公演で、ババババーン！！と！」

「武道館？」

唯、私達の目標忘れちゃってるし。

でも唯らしいかな？

「おいおい……。目標はそこだって決めただろ……。な？」

「え？」

急に律が私に話を振ってきたことで

(そついえば軽音部が結成された時に、ホワイトボードに「めざせ！武道館！！」って書いて律と私で盛り上がったたっけ)

それがなんだか楽しくて楽しくて

(まあ、龍斗はあんまり興味なさそうだったけど。唯はお菓子に夢中だったし)

こつちを思い出すと少し苦笑してしまう……。そうだ。

「じゃあ〜その時はピンクがいい！」

「アハハ、小学生かよ……」

「だって〜可愛くない？」

「ガキっばいだろ」

「つつかこいつは完全にガキとかわんねエ」

「私もピンクはちょっと……」

「え〜そうかな〜？……ってりゅ〜くんそれはひどいよ!？」

「……そう思うなら一度自分を見直せアホ」

私は横に置いておいたラジカセの再生ボタンを押して、昔の軽音部の演奏を流す。

『――！――！――！』

音に気づいたのか唯達がこちらを向く。

「武道館目指すなら、まずこれくらいできないとな？」

「へーうまいなー」

「あれ？でもこの曲……」

『――！――！――！――！……お前らがくるのをまっていたあ……』

」

え・・・？

『シャラー——————！！！！！！！！！！』

- side out -

急に大音量の叫び声がラジカセから流れたため条件反応で耳を塞ぐ。

田井中らも耳を塞いでいてあちらはダメージは少ないだろうが、俺はすぐ横で流されたので

(・・・うっせエ)

「ガチャッ」

「あ、これって」

「テープがB面に変わったのね」

ラジカセのことはよくわからねエがCDでいうトラックが変わったようだ。

「なんだぁ・・・ん」

「やっと気づいたのか幼馴染・・・これどうにかしろ」

それを聞いて安心したのか秋山が顔を上げ始める。ここまでではよかったが

「・・・ほんとお／＼／？」

泣いているのか我慢しているのか・・・まあ男に見せればゴキブリホイホイと同じ効果でもありそうな顔をしているようだ

「「萌え萌え〜キュン」」

秋山に胸あたりで腕を交差して一度両手を大きく回し、もう一度胸辺りに腕を戻しつつハートマークを手で作りながら意味不明な言葉を放つ平沢と田井中。

（女子にキュンとさせる効果があるなら威力？は大きいんだろオナ・
・あのバカ（悠二）がうまく引っかけってくれる気がする）

・・・それを見てもなんとも思えない俺も俺なのかもしれねエが
な。

・20・(前書き)

最近遅れ気味です・・・少し休憩してちゃんと書くべきでしょうか？間違いありました指摘お願いします。

合宿編後半です。どうぞ／

「うう……(TT)」

「じめんなー溇」

「ぶう」

「ああ……」

今はある程度回復した秋山を回収しスタジオへと戻ってきて、田井中が子供のようにすねる秋山をなだめようと頑張るが、未だに機嫌が治る様子がない状況にある。

主催者。今日は再起不能かこれ……？

俺と平沢と琴吹は一応スタンバイしているんだからさっさとしてほしいがな。

「唯ちゃん。でもほんとにさっきの曲……」

「うん！ちよっとまってね」

「……さっきの曲？」

どうやら琴吹は知っているようなので聞いてみることにする。

「琴吹。何の話だ？」

「唯ちゃん、さっき溇ちゃんが流した曲覚えてるって」

「覚えてる・・・まさか弾けるのかよ？」

ありえねエ。今日始めて聞いたはずだぞ？まさか完全記憶能力・・・赤点だったか。

「ムギちゃ〜ん。準備できたからちゃんと見ててね〜？え〜と・・・

」

そっいいながらギターを構え

『 ー！ ー！

さっき聞いた昔の軽音部の曲のギターパートをほぼ完璧に弾き始めた。

それを聞いた俺や琴吹、田井中と秋山もただ驚く。最初は嘘だと思っただが・・・マジで弾けるのかよ。

ー！
〜

〜！』・・・はい！どお！？」

「す〜い、完璧！」

拍手をしながら感想を伝える琴吹、それに対して平沢がVサインをしながら照れる。

「でも、ミヨ〜んってところがわからなくて〜」

「ミヨ〜ん？」

「それってチョーキングのことじゃないか？」

そういえば一応練習用に買ったギターの基本が書いてある本にそんなのがあったな・・・たしか

「チョーキング？」

「うう」

「違う」

田井中がそう言って平沢に軽めなプロセスのほうのチョーキングをしだした。軽めでも首は絞められているようで平沢からはうめき声が発せられる。

「チョーキングって言うのは、音を出しながら弦を引っ張ること。龍斗ってチョーキングできる？」

一応ギターだし覚えてはいるが・・・振ってくんなよめんどくせエな

「・・・覚えてはいるけどよ」

「じゃあちよつとやってみて」

めんどくさいながらも、ギターを構えて最初に弦を弾いて音を出す。

そして弾いた弦を上へ押し引つ張るとギターの音で「ミヨ〜ン」と鳴る。確かこれでよかつたはずだ。

「わあ〜。これがチョーキングなんだね〜」

「わかったならお前もやってみる」

「ほい」

次に平沢がギターを構えると、俺がやった時と同じようにギターを弾く。

「これで・・・お？」

そして弾いた弦を引つ張ると、さっきと同じくチョーキングの音が出た。

「そうそう!」

「ププッ」

「へ？」

秋山が寝めた後、理由はわからないが平沢が笑い始める。秋山も急に笑い始めたことについていけず間抜けな声を出した。

そんな俺達の心境など関係無しに平沢がギターを弾きチョーキングを繰り返す。

・・・ついに壊れたか天然？

「アハハハハッ！あゝこれなんかへいん！」

「え？変って・・・」

「ツボだったみたいだなー」

「フジツボ!？」

どうやらチョーキングの音にツボっただけのようだ・・・最初精神障害にでもなったのかと思ったがな。

田井中の発言によってそんな疑問が解決したと同時に、今度はツボと言うキーワードからフジツボを想像した秋山がしゃがんで耳を塞ぎ震えてしまった。

わざわざめんどい状態にさせんじゃねエよ幼馴染・・・。

- 別荘内 入浴場 -

あ後はしばらくして秋山も再起動し、ある程度普通に出来たため今日の練習は無事終わった。

そして練習が終わると、まだ風呂に入っていなかったため俺達は

「ムギ!ここに露天風呂があるのは本当か!？」

「ええ」

「早く行こうよりっちゃん!」

「わかってるって！・・・そついや龍斗はどつする？混浴は無理だしなー」

そう言いながら田井中は秋山のほうを見る。

「こゝ、混浴／＼！？」

「いや一緒に入るわけねエから落ち着け・・・後田井中、テメエ俺使つて秋山を弄るな」

「わるいわるい」

秋山のめんどくさい性格には毎回呆れさせられる。

（つつか俺が女と一緒に入るとかねエし。それよりもここの中で待つこと自体が危険すぎる。ここの別荘の造りは窓が多い、つまりあいつらの入浴姿は少し窓際に視線を送れば見えてしまう状態にあるわけだから・・・そんなことでHENTAIという汚名をもらうのはまっぴら御免だ）

なので問題解決のため琴吹に聞く。

「琴吹、別荘内にも風呂は「ありますよ」・・・そうか」

そんな不安は一瞬で解消されてしまった、よかったにはよかったがな。

「よし！じゃあ私達は露天風呂に行くぞー！」

浴槽に入りながらも眠気が襲ってくる。

最初は普通の風呂場かと思ったが、室内はコンビニ並みの広さ、シャワーは温泉と同じぐらい設置され、浴槽も普通に温泉でありそうな広さであることからその場で一人というのはかなり静けさを感じさせる。

まあ・・・これぐらいのほろが落ち着くがな。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

・・・・・・・・・・眠いからか何も浮かばない？浮かべない？

・・・そんなことももうどうでもよくなった。

手を動かそうとすると動かせる、じゃあこの手が千切れたらどうなるんだろう

・・・手首から血液が流れでるだけだ。

だったら神経だけ引き抜いたら人間はただの肉とカルシウムで形がある存在になるんだろうか？

そもそも何で人間には感情という不可確定要素が備わっているのか、

・・・・・・・・考えるだけ疲れる。

わかるはずもないのだから。

(・・・その答えはいつも出ない。すべて曖昧で終わる)

俺は、とつくに考えることも止めたのかもしれない・・・何かを追求するとかしなくなってる。

・・・すべてにおいて興味がなくなったのだろうか？

(今興味があると思えるのはせいぜい・・・料理ぐらいか)

1つでもあればいいほうか。人間は何かやりたいことがなければ生きる希望もなくなるからなア・・・

そんなことを考えているうちに10分ほど経っていたので

「・・・出るか」

入り口あたりにある更衣室で、持ってきていた黒色と少し白の混ざったデザインがそれなりのNIKEのジャージを着てリビングへと歩く。

もともと運動用に冬に買った物なので、長袖長ズボンという今の季節である夏には正直きつい。なのでズボンはジャージ、上はちよい派手な絵柄の黒色の半そでシャツを着ていくことにした。

・リビング P M 9 : 4 3 ・

さすがは金持ちといえる大型の薄型液晶テレビで、暇つぶしにニュースを見ながらソファで寝転がる。

さっきの風呂で眠気が飛んでしまったので、今こうして眠くなるのを待っているというわけだ。

平沢達はすでに寝る用意をしていて、さすがに一緒にねるわけにはいかない。俺はリビングのソファで寝ることにした。リビングには俺一人というところもあるのか軽く放心状態に近い状態でテレビを見ている。

「りゅうくん寝ないの?」

(・・・毎回ニュースを見て思うが、何で殺人事件とかはいつも流されるんだろか?)

「？。お〜い」

（こんだけ頻繁だと気づかれていない殺人事件なんていくらかでもありそオだな・・・数年後とかに掘り返される事件などもあるし）

「りゅうくん？」

（後はレイプ系の事件も絶対にあるはずだが、それが個人のプライバシーにより放送されないのも含めると、相当あると考えられる・・・世の中残酷だな）

「りゅうくんってば〜！」

「・・・ア？」

考え込んでいると急に大きな音がしたことで意識を戻す。前には平沢がいた為

「邪魔だ。テレビが見えねエ」

「りゅうくんが無視するのがいけないんだよ。さっきから目の前で手振ってたのに」

どけようとしたが、俺のせいにされ否決となった。やっぱりこいつめんどくせエ・・・後ぶうぶうっせエ。

寝転がりながら話すのは首が辛いので上半身だけ起こして平沢のほうを向く。

「そりゃ悪かったな。で、何のようだ？」

「りゅうくんは寝ないの？って聞いたんだよ？なのに無視するから」

「さっき風呂入ったおかげで眠気が飛んじまったんだよ・・・」

「あ、じゃありゅうくんも枕投げする？」

「・・・今は布団敷いてるんじゃないのか？」

「そうなんだけど、途中で枕投げやるうってりっちゃんに言われて」

ある程度は準備したが、枕を見た田井中が好奇心に負けたと・・・
どうでもいい。

「それでちょっと休憩にお茶を飲みに来たんだ」

「あつそ・・・じゃあ飲んだらさっさと戻って寝とけ」

「え〜！せつかくのお泊り会なんだからまだまだ遊ばないと！」

「ここにきた本来の目的は？」「海！」「・・・ハア」

やっぱり遊ぶことしか頭になかったかこいつは・・・。合宿とか言う割には初めて演奏を合わせた事以外では部室でも練習できるし、ほとんど遊びが目的になつてこたるな合宿

それから平沢がコップにお茶を入れて俺の隣に座ってきた。俺は特に話す気もないのでさっさと行けよとか思いつつ黙っていると、平

沢が問いかけてきた。

「ねえ？りゅうくんは楽しい？」

「何がだ？」

「みんなとこうして遊んだり演奏したりすること」

「……さあな」

正直どうなのかわからねえんだよ……楽しくないのか、楽しいと感じれないのか。多分後者だろうけどよオ。

「私は楽しいよ。海も楽しかったけど、さっきの練習でみんなと合わせた時はもっと楽しかった」

「そりゃよかったな……」

「うん。だから、りゅうくんもちゃんと楽しもう、ね？」

「……そうだな」

平沢に言われるとわ……こいつ、ただの天然バカじゃねエのかもな。

お茶を飲み干した平沢がソファから立ち上がり

「……あ、後りゅうくんって胸が大きい子が好きなの？」

「……八？」

唐突に話が持つていかれたため一瞬思考が停止^{フリーズ}。そもそもそういうことと鈍感そうなお前が聞いてくるとは思わなかったし……。

「だって温泉入る前に貧乳なんて覗かないって言ってたよね？」

「アア、そのことかよ……つうか」

「……何でそんなこと聞いてきやがる」

あれは田井中に皮肉として言った事だぞ……それをなんでこいつが。

「男の子ってやっぱり胸あったほうがいいのかな？って思ったら……その〜／／／」

俯きながら自分の胸元を見始める平沢……アア、そういつことか。

「胸が小さいから悲しくなったのかよ」

「つう……やっぱり私も小さいかな／／？」

「まあ秋山とかと比べたら小さいんじゃないか」

「つう……」

真実を言つたたびにどんどん落ち込んでいく平沢。地雷だったか？別にすごく小さいとかじゃないと思うが……。さすがにこつなると後処理がめんどくさそうなので、今のうちに治す事に。

「言っではおくが、俺は別に大ききなんて興味ねエ。勘違いすんな」
「・・・本当？」

「田井中に言ったのは皮肉で言った事だ。本気で言ったことじゃねエし。それに男が全員巨乳が好きってわけでもねエからそんなに気にすんじゃないよ・・・。つつか高一で気にすることもねエだろ」
「そっか。それならよかつた・・・」

回復したのか平沢がホツと胸を撫で下ろす。確かにそんなに大きくはないだろうが田井中よりはあるだろ。というかお前ぐらいが普通じゃないのか？

まあ何でそんなことを聞いてきたのかもわかったので少しは俺もスツキリしたかな。

「じゃあ私は枕投げに再戦してきます！りゅうくん。もし生きて帰ってきたら・・・おいしい料理を作ってくださいえ」

「死亡フラグ確定したぞお前・・・」

「ん？死亡フラグってなに？」

「・・・知らねエなら気にするだけ無駄だ」

「うゝんそうなのかな？あ、気にしたら負けだね！」

「・・・いや、何だよそれ」

「気にしたら負けは気にしたら負けなんだよ。じゃあ一応、おやすみ」

そう言っつて平沢は田井中たちがいる部屋へと戻っていった。

その後、俺も話して疲れたのか眠気が戻ってきたのかは知らないが、体がだるくなってきたのでリビングの明かりとテレビを消して、ソファに寝転がり寝ることにした。

二日目も遊んだり練習したりとそれぞれ楽しんだようで、帰りの新幹線の中では女子はみんな寝てしまっていた。

途中、田井中が撮っていたデジカメが窓側に置いてあったので（少しばかり気になったため）ファイルを見ていると、合宿に行く際に乗った行きの新幹線で寝ていた俺の寝顔と、昨日リビングで寝ていた朝方と思われる俺の画像データがあったため消去したのはまた別の話。

後、これ秋山が見たら怒るのでは？と思う画像があったがどうでもよかったので消してはいない。

- 21 - (前書き)

最近精神的にスランプ？状態で・・・。1月にはマイパソ買えるはずなので、書く時間も増えてくれることをと期待しております（自分）。

顧問編前半です。

夏休みも終了し、今はまだ暑さが抜けない9月上旬。

冬とは違い、いくら脱いでも暑さを遮断できないこの季節にイライラしながらもなんとか平常心であろうと我慢はしたが

「・・・・・・・・・・」

さっきの時間に体育があつたおかげで、今は机にうつ伏せになりながら休憩。

各教室に設置されているクーラーのおかげでこの中だけは涼しく、今の時間は日差しも当たらない為休憩にはちょうどいい。

「龍斗？寝てるのか？？」

「・・・・・・・・・・」

上辺りから悠二の声が聞こえるが反応する気もせず無視した。

「んゝ寝てるのか？…！これは今までのお返しをするチャンスじゃないか！？」

「アア？」

「聞こえてんだよクソ野郎オ」

「ヒツ・・・！いきなり声だすなよ・・・」

「黙れ話しかけるなイラつく」

「おお…そこまで否定するのかい龍斗や」

「ジジイ口調になってもウザさは変わんねェし黙れつつってんだろオが」

「〇h〜こりゃ完全にイラついてるな。やっぱこの暑さか？」

「……わかってんな最初から黙ってるよ」

「まあまあ〜」

部活をやつてこなかった俺には地味に来るこの暑さは不快以外の何者でもない。

こいつは部活で慣れてるのかピンピンしてるしよオ。

「つか何だ？俺になんか用でもあんのか？……気まぐれとか言ったら殺す」

「そのテンションのせいか「殺す」がマジに聞こえるんだが」。

「凶星かよ」

実際に殺す気はねェしそもそも労働力の無駄だ。後処理もめんどくせェし。

「ま、まあもうそろそろ先生も来るし帰りの準備しようぜ！」

「アア、そついやもつこんな時間か・・・涉はどうした？」

「今係りの仕事で提出物の回収中だぞ。何だかんだ言っても仕事はしつかりやるからな」

「さすが・・・」

(やっぱり根元から委員長キャラか、あいつは)
そう思いながらも机の取っ手に掛けてある鞆をとり、帰りの準備をする。

いいか)

金を入れてボタンを押し、ガコンっと自販機から音がしてからしゃがんでサイダーを掴む。

「お、古川じゃん。お前もなんか買いに来たのか？」

「アア？・・・桐生か」

たしか同じクラスで、最近はずっと話すぐらいにはなってるな。ほとんどこいつから話しかけてくるけど。

「桐生ですよ。こんだけ暑いと俺の財布から金がなくなりそうだし」

「だったら水筒でも持ってきてくりゃいいだろオが」

「一応部活用にはあるんだけどやっぱり炭酸がよくてさ。大人で言うビールみたいなもんだって」

「そうかよ・・・」

やっぱり話すと疲れてくる...そろそろ行くか。

「じゃあな。部活があるんですよ」

「軽音部だっけ？行ってら〜」

缶ジュースを飲みつつ俺に言ってきたが反応するのめんどいんでそのまま歩いていった。

それから数秒、龍斗が視界から消えると

「やっぱり不思議な奴だなあいつ。笑ったところ見たことないし…
一回は見てみたいってか」

そんなことを桐生が呟いて、また缶ジュースを飲む。

- 音楽準備室 -

手元に飲みかけのサイダーを持ちながら4階の音楽準備室前（部室前）まで来て見ると「あー！ドラム叩きすぎて手の肉刺潰れちゃった！」と田井中の声が聞こえて来て、何事かと思いつながらも扉を開けてみる。

「ほれほれ」

「ヒツ…!!」

よくわからないが田井中が無理やり秋山に手を見せていて、それを見たくないのかいつももの姿勢でしゃがみこんで耳を塞ぎひたすら見ないようになっている秋山。

もう一方を見ると長イスにギターを掛けながら人差し指の折り曲げを繰り返す平沢の姿がそこにあった。

「遅いぞ龍斗」

「龍斗…た、助けて（TTT）」

「・・・その性格を直せ」

関わりたくないので無視して棚の下辺りに鞆とギターケースを置く。おそらく肉刺が潰れたということに秋山がいつもの怖がりな性格が発動でもしたのだろう。後ろからまた田井中のはしゃぎ声と秋山の悲鳴が聞こえるがどうでもいい。

「で、お前のその指はどうした？」

さつきから少し血が出ている人差し指を見ながら聞いてみる。

「ギターの練習してたら切っちゃって。りゅうくん絆創膏持ってない？」

「いや持ってねエ…保健室にでも行って来い」

「ん〜そうする〜」

「ガチャッ」

突然音楽室に繋がるドアから、たしか山中さわ子とか言う名前だったと思われる教師が入ってきた。

「ごめんね〜」

「ん？」

平沢も今気づいたようで山中のほうを振り向く。

「譜面台を借りにきたんだけど…あら？」

平沢の指の傷を見た山中さわ子は

「絆創膏、いる？」

そう言った。

山中が「でも絆創膏は私の机にあるから…平沢さんもいっしょにくる？」と言ったため平沢も付いて行った。

今この音楽準備室にいるのは、俺と目の前で未だに同じことを繰り返している田井中と秋山…正直関わりたくねエ。

「……………」

すでに秋山が無言で泣きながら殻に閉じこもっているところを見ると、後々再起不能になるのではないかと思った。まあそれもどうでもよく。

そんなことを思っていると、田井中がやることはやっただみたいな顔をしながら机に座る。

まだ琴吹は来ていない為お茶などは置かれていない。自分で入れようと思えばセットは部屋にあるので入れられるがな。

「ムギはまだかー」

「秋山放置かよ・・・」

「そのうち直るから大丈夫だって」

「そうかよ。つつか練習はしねエのか？」

「さっきまでしてたんだけどなー。遷があんな感じだし」

「そうさせたのはお前じゃね？」

「違っつて。唯の指が切れたのを見た時からこんな感じだったし」

「それをさらに悪化させたよ」

「おおむねあってますわん」

「こいつ本当に部長か…？」

まあ考えるだけ無駄と思いき買ったサイダーを飲む。

「あー！私にもジュース頂戴！」

「ねエよ自分で買いに行け」

「部長の私にジュースを買ってこないなんてありえない！」

その考えがありえエし。

「どっいつ思考してるんだお前…」

「しかたないだろーこんだけ暑いと喉が渴くんだー！」

「だったら自分で買って来い」

「だがあえて断る!」

「…ハア」

やっぱりこいつめんどくせエな…。

.....

「部として認められてないだって!？」

それから数分後、平沢と琴吹も一緒に入ってきた。

多分部室に戻る途中にでも合流したのだろうと解釈していると、琴吹が学園祭のステージを借りるために申請をしに行ったが軽音部は部として認められおらず断られたことを俺達に伝えて今に至る。

「うん、そうみたい…」

「部員が四人集まったら大丈夫じゃなかったの？」

「そのはずなんだけどなー」

理由が思い当たらないようでそれぞれ思い悩んでいる表情をする。俺としては正直何でもいいが。

「ていうか、クラブって認められてなかったのに音楽室好き放題使ってたのかな？」

当然のように置かれている元々あったガラス張りの棚に置かれた琴吹持参の高級そうなカップや皿の数々。

部として認められていないのに好き放題に演奏し、好き放題にティ―タイムをしている存在しない軽音部とその部員。

「あっ…」

「うっ…い、今まで何も言われなかったから、大丈夫だよー！…きつと」

「俺がここの教師だったら間違いなく追い出すなこの状況」

「そんなぐりゆうくん先生それだけは！」

「悪乗りしてくるな…」

「それより、どういう理由なのか聞きにいかないとなあ」

「そっね」

とりあえず、やるべきことは決まったただけマシか。

「あれ？そっぴや漣は？」

「あ、漣ちゃんならあそこで」

平沢がそう言いながら未だに回復していない秋山を指す。

まだ怯えている「」

「帰って来ーい!！」

「加害者が言うのかオイ」

その後秋山を強制起動させて、何故軽音部が部として認められていないのか知るべく生徒会室へと向かうことに。

てか生徒会ってことは渉と真鍋がいるんじゃないかね？

オリキャラ紹介

桐生 徹 きりゆう わたる

身長：170cm

顔は上の下？ぐらいで、髪の毛は少し長めでストレート。だがワックスを使用しているのか癖毛のようなふんわりになっている。

龍斗のクラスと同じ同級生。

今年からできたサッカー部に所属。

性格は普通な感じでそこまで特徴はないが、誰に対しても平等に話す世間的にいい奴。

それゆえにクラスの誰とでも話せて、龍斗とは体育でのチーム戦で話すようになった。

ちまちまとオリジナルは増えるかもしれませんが、だいたいモブキャラですが。

・ 2 2 ・ (前書き)

最近ギルティクラウンにはまってしまっていてサボっていました、
、 1 1 1)

そのうちギルティクラウンの二次作品も作ってみようかと検討中だ
ったり。

もちろんこの小説も止める気はないのでこれからも書かせていただ
きたいです | | 。 () 止める場合ははっきり書きますので () ()
() 。 ; 。 () () () ()

顧問編中間です。

- 生徒会室 -

あの後、何故軽音部が部として認められてないのかを知るべく生徒会室に来てみたところまでは普通だったが

「たのも〜!」

「部長は私!!」

平沢と田井中が訳のわからんポーズをしながら生徒会室に突っ込んでいく様を見て、自分はこんなやつらと一緒に部員なのか、と見られると思うと恥ずかしくなる。

「あら、唯?それに龍斗も?」

「え?和ちゃん?」

「どうしたんだ龍斗。ここに何か用でもあるのか?」

「いろいろとな・・・めんどくせえが」

「渉君も!?」

思っていたとおり真鍋と渉がいたか・・・。
まだ2年などは来ていないのか中にいたのは真鍋と渉だけだ。

「和ちゃんと渉君が何でここに？」

「何でって生徒会だからだけど？」

「えっ！？すごいね〜さすが和ちゃんと渉君だよ！」

本当に初めて知ったような顔をしながらの賞賛。
記憶能力が乏しいのかこいつは……。

「お前らほんとに幼馴染か？」

「いつもどおりだな唯は」

田井中は苦笑しながら、渉はいつもどおりだと思ったようだ。

「そっぴやそこの男子は誰？龍斗の知り合いみたいだけど」

「ん？俺は坂本 渉。君達は？」

「私は田井中 律。よろしくな！」

「琴吹 紬です。よろしくね」

自己紹介とかどうでもいいからさっさと

「ああ、よろしく。で、龍斗達は何でここに来たんだ？」

・・・お前が知的でよかった。

とりあえず本題に移行するか。

「うん……やっぱり、リストにはないわね」

「こっちのほうにも軽音部はないな……」

先ほど来た理由を説明し真鍋と渉に部活のリストファイル調べてもらったが、やはり軽音部の書類は存在しないと云う。

「そんな〜……」

それを聞いた平沢が落胆しながら嘆き、田井中が考えるポーズをしながら険しい顔になると

「もしかして……」

「りっちゃん……！何か心当たりか？」

そこにマジか悪乗りかは不明だが平沢も険しい顔をして田井中に問う。

琴吹も雰囲気に呑まれたのか無駄にシリアスな感じになってるしよオ
・・アホばっかだ。

「おそらくこれは、

・・・・・

「弱小部を

・・・・・

「廃部に追い込むための！

・・・・・

「生徒会の陰り真鍋、なんか思い当たることはねエか？」

「話の途中だぞー！！」

「そうだよりゆうくん！せっかくりっちゃんがかっこよく決めよう
としたのに〜！」

「そんな小芝居、部室でやってる。・・・で、どうだ？」

後半で、聞くだけ無駄と思ったので小芝居を強制終了させ話を本題
に戻す。

さっさと進めてエのにいちいち邪魔されては拉致があかねエしな。

「そうね・・・部活申請紙が出てないんじゃないかしら」

・・・多分人で言う身分証明書みてエなもんだよな？
部活なんかまともに入ったの現在の軽音部だけだからよくわかんね
エけどよオ。

そついうのは大抵4月に渡されると思うが・・・

「部活申請用紙？」

どうやら琴吹は知らないらしい・・・渡されているなら知っている
はずだが。

「渡されてねエのか？」

「ええ・・・。りっちゃんは何か知らない？」

「そんな話は聞いたことが『聞・い・て・る・だろ！！！！』」

ドスの利いた声が聞こえた方を見ると、生徒会室の入り口で真つ黒
なオーラを纏っている（ように見える？）先程まで再起不能という
ことで軽音部で待機していたはずの秋山が田井中を睨んでいた。

そして考えること約10秒。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あつ、机の中に入れたままだ」

「やっぱりお前のせいかあああああああああ！！！！！！」

「イタイイタイイタイー！！」

「漣ちゃん。りっちゃんにも悪気があったわけじゃないし」

「ムギは甘いんだ!!」

「まあまあまあまあ」

田井中が洩らした発言により秋山が頬を思いっきり引つ張り制裁が開始し、そしてそれを宥めようとする琴吹。

つうかも部長から下りるお前^{デコ}。

「なんていうか、軽音部って唯にびったりだと思っわ」

「ほえ?」

「俺もそう思った」

「俺のことじゃねえよな?」

この天然と^{アホ}一緒なんて最大の屈辱だつづつの……。

「唯のことに決まってるだろ。だけど」

「だけど……?」

「……楽しそうだな。いいところに入ったんじゃないか?」

「うん、軽音部楽しいよ。ねりゆうくん?」

「楽しそう……か。」

確かに平沢達には楽しいんだろよ。

「……うるせエだけだろ」

「またまた〜楽しいくせに〜」

俺が恥ずかしがって紛らわしてるだけに聞こえたのか、満面の笑みでまた聞いてくる平沢。

・・・そう思えば、この人生も何か変わってたかもな。

「ソウデスネ」

「龍斗・・・棒読みになってるぞ」

「気にするだけ無駄だ。それより今回の件、何とかならなねエのか？」

「そうだな〜確か部活申請紙の余りがまだあったと思うから・・・
どうにかできるんじゃないか？」

「そうね。問題はないと思うわ」

「「「「ホント!?!?」「」「」」」

さっきまで制裁をおこなっていたほうも真鍋と渉の会話が聞こえたのが驚いてこちらに詰め寄ってくる。

まあ何とかなるならこの件は解決・・・か。

真鍋がファイルから部活申請用紙を取り出し必要事項を記入している。

「軽・・・音部つと」

鉛筆と机が書くことでぶつかり「カッカッ」と乾いた音をだしながら順調に記入していく。

「部員は・・・5人」

これで終わったと思った、その後に

「で、顧問は？」

「・・・八？」

灯台下暗しとも言える盲点に気づく羽目になったわけだ。

さっきまでこんなことにも気づかなかった俺に「平沢達に毒されすぎだ」と言っつてやりたくなる。

つつかよく顧問も決めずに勝手に部活やれてたな・・・軽音部。

「」「」「顧問？」「」「」

後の四名は理解ができないのか、はたまた完全に忘れていいのか問い返す。

「あんだ達・・・」

真鍋は完全に呆れながらそう言った。

「まさか・・・龍斗も忘れてたのか・・・？」

「・・・そのまさかだ。・・・ハア」

この後顧問がいない以上部は成り立たないため、顧問が決まり次第また来る事になった。

- 学校内廊下 e t c -

『山中 さわ子。』

我が校の音楽教師である。

その綺麗な顔立ちとやわらかな物腰で、生徒だけでなく教師の間でも人気が高い』

ただいま絶賛尾行中

「・・・・・・・・・・」

今変な思考が流れてきたが・・・電波？まあ現状としてはあつてはいるが。

俺は変人に思われる気はさらさらないので3メートルほど距離を置きながら自然に歩く。

『さらに、楽器の腕前や歌声もすばらしく・・・』

「・・・・・・・・・・あの・・・」

ファンクラブが存在するほど人気がある」

田井中によるナレーターが終了。

「さつきから何を言ってるの？（・・・）」

山中はこの状況が理解できないようで困りながら聞いてくる。

逆にこんな状況で困惑せずに普通に話せる奴のほづが少ないだろう。

「」「」「先生！」「」

「は、はい！？」

「軽音部の顧問になってください！！」

「・・・まだ、顧問いなかったんだあ」

そりゃ吹奏楽部の隣で普通に部として稼働しているのを見ているわけだから、顧問がいると思うのが普通だよな。

「先生しか頼める人がいないんです」

「お願いします」

秋山と琴吹が真面目に説得を開始。

「……………ごめんなさい。なってあげたいのは山々だけど、私吹奏楽部の顧問しているから掛け持ちはちょっと……………」

「そんな……………」

「ほんと、ごめんなさいね」

平沢はそれ聞いてガツカリしているが、田井中らはこの程度で引く奴らではないだろう。

つつか引き止めることに関しては強いからな軽音部委員（俺を除く）。

『今まで声を掛けてきた男は数知れず』

「だ、だから煽っても無理です!？」

「時間ならとらせません!」

「練習も、自分達でやりますから!」

「ここに名前書いて判子を押すだけ!ね簡単でしょー!？」

もはや顧問として存在するだけでいいとするか・・・平沢の時と似てるなオイ。

田井中に限ってはもはやタメ口になっていて、敬うなどという気遣いは本能により排除させられたようだ。

そもそも部活申請用紙を押し付けてさっさと書け書け言ってるあたりから終わってる。

「ちよつと!?!?そんな一気に・・・ん?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺ならイラつきそうなの状況の中でも何とか平常心で対応している山中が、さっきからずっと自分のことを見ていた平沢に今気づい

たようだ。

「先生つてここの卒業生ですよね？」

「え、ええそうだけど・・・」

「さっき、昔の軽音部のアルバム見てたんですけど・・・」

「っえ!？」

・・・アルバム？

何かいけないことでもあるのか、平沢がその事を話した瞬間に山中の顔がどどん青ざめ始め

「ア、アルバムは何処にあるの？」

「へ？部室ですけど」

「そう・・・」

そして部室のほうへと歩き始め

「?・・・先生？」

そう平沢が言った瞬間

ダッ!!

と、かの有名なウサイン・ボルト顔負けのダッシュで、おそろく軽音部へと走り始めた。

「先生!？」

「……練習になりそうだ」

あれを抜ければそれなりだろうと思った俺も後を追う。

「え?……りゅうくんも!？」

久しぶりにいい運動にはなりそうだ。

何とか3、4メートルほどまで近づけたが

(フルスピードから無駄のない動きで一瞬速度を止め、すぐさまスピードを戻して階段を駆け上がるだア!?)

ほんとに音楽教師かよこいつ……!

(階段じゃこいつを抜くのはキツイ……次の2階廊下で距離を縮めるか)

そう思ったが山中の目の前には、ほかの教師が辞書などを収納するケースを廊下に出して通れなくなっていた。

(……何であいつ止まらねエんだ?ぶつかるともりか?)

そう思つて少しスピードを緩めたのが間違ひだった。
次の瞬間

「うあああああ！！」

その130メートルはあるのではと思われるケースをハードル跳びで飛び越した。

しかも着地も一瞬にして、また同じ速度で走り出す。

急に人が飛び越えていったことに運んでいた教師は驚いて尻餅をついてしまっている・・・が

（これは使える）

俺は運んでいた教師を軽く飛び越えて左側の壁を蹴ってさっきの速度を取り戻す。

（よし・・・うまくいった。ってオイ・・・）

今度は運び屋が折りたたみ式の長机を運び出していた。

このあたりは今整備中なのだろうか？

「「おお！？」」

だが山中はそれにも止まらずに今度は机の下に転がり、さらに受身に繋げてまた走り出す。

運んでいた業者の二名は急な出来事に呆気にとられていた。

もう音楽教師から体育教師に変われよ・・・。

（俺じゃあ、転がれば間違いなくスピードが落ちる・・・賭けだ）

今度は右側にいくつもあるブロック型の開いている窓の骨組み部分に乗り、足に力を入れ一気に前へと飛ぶ。

「おわっ！？今度は高校生!？」

(つつ・・・)

着地際に高く飛んだためか足に少しながら痛みが走る。

(1メートルほど離れやがった・・・またかよ)

またも邪魔するかのごとく、目の前にはフラフープを纏めているジヤージ姿の女子二名が立ちはだかる。

「きゃああああ!！」

そこも山中は簡単にフラフープの間を体を回転させながらすり抜け綺麗に着地し3階へと上がっていく。

・・・あいつどれだけアルバム見られたくないんだよ。それよりも

(クソッ！フラフープ落としやがった・・・!)

今の事で驚いたのか持っていたフラフープを手放し、目の前で5個ほどのフラフープが縦に転がりながら跳ねる。

「ツチ・・・」

結局突破口が見つからず足止めを食らう事になり、山中の姿も見えなくなつた・・・。

「な、何だったの今・・・？」

「山中先生？・・・だったみたいだけど」

目の前で若干驚いている女子がそんなことを話しながらふと俺のほうを見た。

この時に、さつさと行けばよかった・・・。

「あ、すみません」

一人は問題はなかった。

「！？・・・古・川・・・」

問題があるのはもう片方だ。こいつは

「・・・中島か」

確か中学3年で同じクラスだった奴だ。

「あ、あんたもここにいたの？」

「・・・お前には関係ねエだろ」

正直話したくもないし話す価値もないので、すでに倒れているフラフープを歩きながらまたいで軽音部へと移動する。

気分が悪イ・・・。

.....

「ねえ？あの人と知り合いなの？何かあったぽいけど」

「ちょっとね・・・直接ではないんだけど」

「でもかっこよくないあの・・・古川だっけ？私細マッチョ好きなのよね」

「え、ええ・・・そうね」

- 22 - (後書き)

今回出た中島という元同級生は脇役みたいなものなので紹介は
ないか・・・?と思います。

・ 2 3 ・ (前書き)

最近一週間更新になってますねはい・・・(TAT)
こんなんでも見てくれる人に感謝します(´・`)

顧問編後一回で終われそうです。

足止めを食らい山中に追いつくのは諦め、今は音楽準備室へと階段を上がっていく。

(そこらへんの平和ボケした奴らよりは鍛えてはいるんだけどよ・
・火事場の馬鹿力と似たようなものか。山中には素直に賞賛しよう)

3階の階段を上り、さきほど俺のことを知っている奴と会った事について

(・・・まあ、中学校からはそれなりには近いし同じ中学の奴がいることぐらいはわかつてはいたが、やっぱり見ると一度半殺しにしたくなる)

と考えながら次の四階を上がりきった時に

『!?!』

(・・・何だア?まさか山中?)

音楽準備室からギターによる速弾きが聞こえてきたので、疑問を抱えながらもドアを開ける。

「オメエラア!!!音楽室好きに使い過ぎなんだよオ!!!!!!」

「「「「「ごめんなさい!!!」」」」

目の前に広がる視界には眼鏡を外しギターを構える目つきと性格がいつもとはまるで違う山中、それに怯えながら秒単位で土下座する平沢達。

・・・関わりたくねエ。

「だいたいなア!!!・・・!!」

その調子で何かを言おうとした山中がスイッチをオフにしたかのようになり黙りこむ・・・というよりは我に返っているようだ。

おそらくこの姿が見られなくなかった事と見て問題はなさそうだ。その証拠に山中の顔がどんどん事態を把握し始めているのか少しずつ青ざめていく。

「・・・今見た？」

冷静になった山中が発した言葉は、「ばらされたくない」という意味にも聞こえる自身への死刑宣告。

そしてその自爆発言に頷く俺を除く軽音部員。

その結果は崩れていく山中のorzポーズで幕を閉じた。

「先生のおしとやかキャラで通すって決めてたのに・・・!!」

「先生・・・」

何故かシリアスな空気に変わり田井中が山中に心配そうに呼びかける。

その空気を読んだのかは不明だが

「あれはもう、8年も前のこと」

いきなりの語りだして、話は過去へと持っていかれることとなる。

聞いたことを要約すると、こうだ。

山中は高校生の時に好きになった男へと告白した。

しかしその男にワイルドな女子が好きだと言われ結果的に振られた。当時の山中は今のおしとやかキャラのようなおとなしい性格だったらしい。

山中はと言うと、恋愛には純情だったのか、それともその男が忘れられなかったのか、男に振り向いてもらうためワイルドな女になるうと決心しへビメタへと走ることになったそうだ。

男に振り向いてもらうために、よりワイルドな女になると、どんどんへビメタへと打ち込んでいくにつれて服装と髪色の変化から厚化粧、果てには化け物染みたマントに仮面……

と最終的に見た目では誰だか不明な域まで達したため、もう一度男に告白した際に言われたことがこれだった。

「さわ子……やりすぎ」

こうして山中 さわ子の高校での恋愛は幕を閉じた。

「ふふっ。所詮、そんなものよね……」

（所詮そんなものだったな、そりゃ……）

そんなことを地面に座り込み遠い目をしながら話す現教師……正直シニールとしか言い様がない。

軽音部メンバーもそれぞれ呆れたり困ったり一名理解できていなかったりと反応はさまざまだ。

「先生……」

「いいの。慰めの言葉なんて」

座り込み少し涙目になっている山中に、田井中が優しく肩に手を置く。

「先生。顔を上げて」

「りっちゃん……」

そして次の瞬間、山中の両肩を掴み

「みんなにばらされなくなったら顧問やってください」

弱みを握った人間がやれる脅迫（またの名を命令）で顧問を回収した。

「今の高校時代の話もすべてこのボイスレコーダーで録音したから、拒否するなら放送で流されると思って顧問やれよ山中ア」

そこに手に収まるサイズの小型ボイスレコーダーを見せつけ脅しに参加する。

さきほど弱みになると思い、いつも他人の弱みになるものを探して採取するのに使うボイスレコーダーを使ったので本当に保存はしてある。

しかもこいつには専用のUSBケーブルもあるのでパソコン等にMP3データとしていくらでもバックアップが可能という代物だ。

……最近の器具は人をおとしめるのに有効なのが多くて助かる。

「顧問やるからそれだけは止めて!!ね!？」

正直、こんなことにこれを使うのはやりすぎたか。

まあ放送で流され学校中に一瞬で広められるなんて言われればこうなってくれる。

「二人ともたくましい子!!ってりゆうくん何時の間に？」

「山中がキャラチェンした辺りにここに来た」

あの場面を見て最初に出た感情が「巻き込まれたくない」だったしな。

こっそり入って正解だったはずだ。

「それより気になるんだけど、何で龍斗はそんな物持ってるんだ？」

「平沢の言葉を借りて言ってる。気にしたら負けだ」

案外この言葉は使える気がした。といった後に思ってしまった俺は何だ・・・？アホか？

「気にしたら負けとかの問題じゃなくて明らかに犯罪だと思っただけど・・・」

やや呆れながら俺に正論を言ってくる秋山。まあ正論だと言う事は認めるが、俺みたいなのは弱みを握るとかないとめんどいことになることもあんだよ。

「ん？ムギちゃん？」

不意に平沢が、先程から2冊の本を双眼鏡代わりにして、山中と山中の肩を掴んでいる田井中を見ている琴吹に声をかけるが周りが入ってこないのか反応がない。

「どっした？」

秋山もその様子が気になったのか平沢に聞いてみる。

「ん〜ムギちゃんが・・・」

「ムギ？」

琴吹に対して今度は強めに言ってみると

「わっ！？」

やっと声が意識できたのか一瞬驚いてこちらを見てくる。

・・・何故頬が赤くなってるんだこいつ？

「大丈夫？なんかボ〜としてるよ。風邪？」

「えっ？あ、ううん・・・」

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・

何だったんだ？熱か？・・・・・・・・まさかそっちのほつとかはねエわな。

『~~~~~』

その後、山中にはさっそく顧問として俺達の演奏を聞いてもらった。今弾いたのは秋山が考えてきた「ふわふわ時間^{タイム}」とか言うタイトル曲で、まだ歌詞はできていないのでメロディーだけの演奏となった。

「って感じのオリジナルなんですけど、どうですか？」

秋山が山中へと演奏の感想を求める。

「うん・・・前ノリ後ノリとか、リズムセクションがバラバラとか・・・いろいろ気になることはあるけど

長イスに座りながら演奏を聴いていた山中は、やはり不満があるのか考えるように呟き

まず、ボーカルはないの？」

学園祭まで残り1ヶ月を切ったというのに、未だに決まっていないところを的確に吐いてきた。

そもそも歌詞すら決まっていらないのだからボーカルをどうする、な

どと言つ話が出でこなかったはずで

「「「「「……あっ！」「」「」

この瞬間にその事実を知った平沢達はキョトンとした表情から思い出したような顔をするわけだ。

ボーカルのことはなんとなく認知はしていたが、どうでもよかつたので言つてはいない。

「じゃあ、まさか歌詞もまだ……とか？」

「え、え〜と〜……」

言い訳が見つからないため頭を掻きながらはぐらかす平沢。

この言葉にだんだんイラついてきたのか山中はこめかみあたりがピクピクしている。

はぐらかす以外にいい言い逃れ方法はお前の頭では模索できなかつたのかよ……。

「……それでよく学園祭に出ようなんて考えたわねえ？」

「すみません……」

そして我慢できずに立ち上がり山中は噴火した。

「音楽室占領して今まで何やってたの！！ここはお茶を飲む場所じゃないのよ！！」

「「「うう、怒られた……」

「だいたいねえ!!」

平沢は半泣き、田井中は後ずさり秋山は震えながらもしっかりしゃがんで耐えている。

そんなに怖・・・くもないと俺は思うが先程のへびメタ時の顔になっているためかこのような状況になっているようだ、と思考している

「先生!!」

「アア!？」

この混乱の中、琴吹という一人の勇敢な者が鬼形相で振り向く山中に耐えながら

「ケーキ・・・いかがですか？」

「・・・ええっ!？」

おずおずとしながらもピンク色のケーキの入った箱を差し出す。そして数秒の沈黙をつくった山中の答えは単純に

「頂きます!!」

「・・・頂くんかい!？」

「・・・」

ケーキという欲望に負けた。

・・・女ってそんなに甘いのが好きなのかよ？

- 24 - (前書き)

軽く一ヶ月放置してしまいました・・・。テストやら部活やらでやつとひと段落してさあ書こうと思って書いていたらオリジナルが書きたくなりかなり投稿が遅れました。顧問編後編は次にしたいと思います。

ノ こんな小説を見ていただいている人には感謝です(; _ ;)

- 自宅内 -

琴吹のケーキを食べた山中はさきほどのことなど忘れたかのごとく
機嫌が直り「じゃあ歌詞が出来たら見せてね」などと言って音
楽準備室を去っていったため、どうするか考えた結果ふわふわ時間タイム
の作曲者である秋山が歌詞を作ることとなった。その後練習をそこ
そこやって今日は解散というわけだ。

「初めてりゅうくんの家に来た〜！」

週に3、4回程度はお世話になっているのであるう近くのスーパーマ
ーケットに寄り食材を買って帰ってきた。

「前来た時とあんまり変わってないぞ。もう少し置物とか買ったら
いいと思うんだけどな〜」

「龍斗らしいと言えば龍斗らしいわね。というより、親まで龍斗に
似てるのかしら?」

「俺もそこまではわからないな」

.....まではいつも通りだったんだが

「いや〜やつぱは広々としてるな〜。この必要必需品以外あまりない
という爽快感がいいぜ!」

爽やかにサムズアップしてくるコイツに、キッチンにあるナイフを刺したくなつたが抑える。

「やっぱとか言うならさっさと巢に帰れゴキブリ」

「てかゴキブリに巢とかあるのか？」

「ゴミ箱、ヘドロが拡散した場所等が代表と思われるが？」

「ああ同類だからゴミに埋もれるっつうことで」

「理解が早くて助かる」

「いやギャグ的に言ったんだけどねえ！？」

同類扱いされたことがそこまでショックなのか、体操座りになり姿勢部屋の隅で「ゴキブリ君。今度見かけたら殺したりしないから友達から仲良くやっていこうね・・・フフフフ」などとほざくゴキブリもどきM。

「・・・ふざけてるだけだよな？じゃなければただの脳障害者になるぞこいつ。」

そもそも何でこうなったのか・・・自分に問いたくなるぐらいだ。食材等を買って帰るとこまではいつも通りだったのに途中で後ろから渋と真鍋と悠二に声を掛けられ、さらにさきほど買いに行く際に先に帰らせた平沢が自分の家の前で立ち往生。

平沢もこちらに気づいたのか近づいてきたので理由を聞いたところ
：鍵を家の中に忘れた、

・平沢妹は学校の都合で遅れる

・親は絶賛旅行中

・時刻は17:26ごろ

・・・そこに通った俺が不運だったのか平沢から「助けて」と目で訴えかけられ、無視して帰ろうとすると後の三名から助けてやれと視線で言われ・・・つまり言い争うのがめんどろになりこうなっただというわけだ。

「夕食作るからお前らそこらへんで座ってる・・・つか帰れマジで愚痴りつつも夕飯の材料を持ちながらキッチンに向かう。

「本音が出てるぞ龍斗。まあ帰るのはテキトくなタイミングでよろしく」

「私は憂が帰ってくるまでいさせてもらいます!」

・・・こいつらに他人の心境を尊重するという意味は1ミクロ単位もないようだな。

現に平沢達はソファに座ったりうろつろしたりと自由気ままにくつろいでやがるし。

「・・・あそこ付近のご飯っておいしいよね・・・やっぱりそう思う?・・・あの味がいいんだよな・・・」

「大丈夫なのあれ・・・?」

「まあ放置しとけばいいと思かと」

「・・・慣れてるわね」

未だに悠二はGとの会話に勤しんでいるが、そんなのはどうでもいいので無視して夕食を作り始める。

ちなみに自分の分しか作る気はないのでこいつらに食わせる気はない。というか今日は俺一人分しか買っていないので作ることもできないが。

(・・・そういや食う気失せた肉をパツクのまま冷凍室に入れたな。どうでもいいけどよオ)

side - 坂本 渉

(龍斗も少しは唯への警戒は解けたんだな。・・・もしかしたら軽音部のおかげで回復しているのかもしれない。もしかしたら、昔の龍斗に戻ってくれるかも・・・な)

龍斗が調理をしている間、白色の3人ぐらいは座れる長さのソファに座りながら唯達のことを考える。

実は夏休みにも来ていてこのようにのんびりしたり龍斗と軽く会話はする程度だが、それが俺達の当たり前だ。あの事件以来からのつてことだけだ・・・。

たまに悠二が暴走して変な感じになることはしばしばあるんだけどそれはいいこと？もあるからいいと思っっている。

「そっつえばりゅうくんのお母さんは何処にいるのかな？」

「確かにまだ見てないわね・・・龍斗に聞いてみようかしら？」

とりあえずごまかしておかないといけないか。龍斗も黙ってるあたり俺か悠二のどちらかがはぶらかしてくれとわかっているのだから。

「龍斗の母さんは看護師だから帰りが遅いんだよ」

「それでこの時間でもないわけね。病院とかの仕事は結構遅いよ。うだし納得だわ」

矛盾が出来ると嫌だろうし、後でこの設定のことは龍斗に言うところ。

「それでりゅうくんはいつも料理作ってるんだね。なんだか憂に似てるかも」

憂って確か唯の妹のことだよな。前に聞いたから一応知ってはいるけど見たことはないからどんな子なのかはわからないけど、

「そうね。家事全般ができるあたりが似てるわ」

「いい妹だな。それで唯は毎日ごろごろしてられるというわけか」

「えへへ／＼／」

「いや、今の褒めたわけじゃないんだけど・・・」

褒められたと思ったのか唯は照れくさそうな仕草をする・・・意味

は逆なんだけど。

「将来はいいお嫁さんかぁ。いいね、俺が貰いたいくらいだよ！」

「うお！？急に出てくるなよ！？」

話している途中、俺の座っている横から急に顔を出してきた悠二に驚く。悠二らしいけど心臓に悪いから普通に来てほしい。
まあ・・・悠二にそんなことは無理だろうけど。

「例えゆうくんでも、うちの憂はやれん！」

「そこを何とか！俺は本気なんです平沢とっつぁん！！」

いきなり唯が父親役で悠二が彼氏役という設定で話し始めたよこの二人。しかも土下座までしてるし、唯も立ち上がって仁王立ちでの宣言しだしたし・・・。

「本人（憂）のいないところで取り合いつてのは何だかシユールね・・・」

一方のソファで座りながらそれを見ている俺は、隣で座っている真鍋からでた呟きに近い感想に心の中で確かにと思った。

「まあ気にしないほうがいいだろ。それより来週の生徒会の集まりって

リビングのほうが騒がしい。そのことがいつも調理する音だけが響く家と違い違和感を感じるが、それは気にせずについた目の前の料理は魚のポツシユ。

と言つものらしい。

何故主体性でないかと言えば、知ったのは今日で、作ろうと思ったのも今日が初だからだ。家庭科の授業が暇すぎてテキストに教科書を読み漁っている時に見つけたページにあっただけつてのが作るうかと思つた理由だつたりする。

ちなみに、料理はまだ鍋の中でぐつぐつと煮込まれている状態である。

(最近魚類ばつか食つてる気がするな・・・だが脂っこいのは今は食う気しねエしこれでいいだろ。それにまあ・・・何とか教科書通りに出来たことをよしとしよう)

と思つていると制服ズボンのポケットに入れていた携帯が振動しているのを龍斗は気づき、開いてメールの内容を確認めると、送信相手欄には平沢 憂と表示されていた。

(・・・妹から?・・・平沢が知らせといたのか)

ご丁寧に『御迷惑をかけてすいません。姉のことをよろしくお願いします』・・・か。

一応わかったと返信してから携帯を閉じてふと前を見ると、俺の夕

食をじくと見つめる悠二の姿があった。

「お、出来たのか・・・ちよいと一口「帰って食べ」イエーイ即答だぜ畜生！！」

腕を振り上げ騒音を騒ぎ立てる目の前の生物をどうしようかと考えるが、考えるのも面倒になってきたので止める。

「りゅうくん・・・私も味見したい！」

仕舞いにはこちらも食欲に負けたのか食べようとする状態・・・。

「お前も帰って家で食べ」

「味見くらいいいじゃんケチ」

むうううなどと餓鬼の様な表情をしても俺にはなんの精神的苦痛が起こるわけがなかった。

「ケチもクソもあるかよ・・・」

大体今日は俺一人分しかないのだからやれるはずもないが、そんなことは言っただけではないためか遠慮無しに食べようとする目の前の二名に呆れる。

「龍斗！。もう料理できたのかー？」

「ああ、一応・・・」

「んーじゃあそろそろ帰りますか」

「それじゃ唯のことよろしくね。迷惑かけないようには言ってるから」

「アア・・・わかった」

「じゃあまた明日な」

「また明日ね」

目の前には涉と真鍋と引きずられる悠二、俺の隣に笑顔で手を振り返事をする平沢・・・。
ドアが完全に閉まってから改めてこの状況を把握して、

「・・・遅エ」

さっさと妹帰って来いよと思いつつながら呟く。

「ほえ？何が遅いの？」

「独り言だ。それより妹からは何か連絡はねエのか？」

「さっきメールが来て『委員会で遅くなっちゃうけど、6時ぐらいには終わるから待っててねお姉ちゃん！』だった」

・・・姉のくせにここまでふわふわしてれば心配にもなるか。それで軽くシスコン化したんだろうかあの妹は？

「今は5時・・・47分か。後もう少しだな」

「じゃありゅくん部屋の見に行っていない？」

「唐突だなオイ。つうか何の権利があつてそんなこと言いやがる」

「りゅうくんは私の部屋見たことあるのに、りゅうくんだけ見ちゃだめなんてずるいよ？」

「あれは強制的にお前らが入れたんだろオが。……まあ、好きにしろ」

特に何も置いていないし悠二のように稀にエロ本が置いてあつて必死に誤魔化す、なんてこともない。なので入れても問題はないだろう。それで時間も潰れてこいつも帰ってくれば万々歳だ。

「やった〜 さすがだねりゅうくん！」

「何で上から目線なんだよ……。……ハア……。とりあえず上に俺の部屋があるから付いて来い」

「ほ〜い」

平沢の返事を返事を聞いてから2階へと上がっていく。後ろからついて来る平沢の足音と俺の足音が聞こえる。

何が気になったのか自分でもわからないが少し平沢のほづを見る。

「ほえ？」

「いや、何でもねエ……。…」

なんか、不思議な感覚だ……。何が理由かははっきりとはしないが、ふとそんな気持ちになった。

(何だったんだ・・・今の)

2階まで上がると部屋が3つあり右辺りに俺の部屋が、左には二つドアがあり手前が元物置部屋で今は運動するための部屋にしてある。奥のほうは・・・両親の部屋だ。

「行つてはおくが珍しいものは何もねエぞ？」

「いいよ。早く早く！」

言われるままに自分の部屋を開ける。普通のデスクにノートパソコン、横長型のデジタル時計、本棚や普通のベットに床に敷いてある黒色のカーペット。壁は白色とかなり普通な感じだ。

「わあ、りゅうくんらしい部屋だね」

「何処かはあえて聞かないがそりやどオモ」

平沢は部屋へと入っていきそんな感想を述べる。こいつは俺にどういう印象を持つてるんだよ？と思いつながら俺も部屋に入る。

・・・ドアは開けっ放しにして。よくよく考えてみるとこのシチュエーションでドアを閉めたらいけないだろうと思つた。俺も平沢もそんなことは微塵も思つてはいないだろうが、悠二がそんなことをぐだぐだ聞いてくるとを考え、今になってこの危険性を感じたからだ。

「これってりゅうくんのお父さんとお母さん？・・・あ、りゅうくんも・・・かわいい」

「ああ……って聞いちゃいねえし」

そういう平沢の目線には、デスクの上に置いてある父親と母親、その間に小学5年ごろの俺が写っている写真があった。つつかかわいいは余計だ。

「人間成長すると変わっちゃうんだね……」

今度は写真と俺を見比べ始めてそんなことを平沢が言う。しかもガツカリした様子で言うてくるので余計に気になったため

「……何だ？」

「りゅうくんにはこのまま成長してほしかったよ」

そんなことをギャグで言ってるのかマジで言ってるの。一瞬迷って、後者だとすぐに判断する。

「……お前も俺の顔が犯罪者だと言ってるのか？それとも童顔のまま成長してほしかったのか？てか何でそんなこと言うてくる？」

言われたことが何か侮辱されたような気分になりいろいと放ってしまった。自分らしくないとも思いながら平沢の返事を待つと

「だってこんなにかわいいんだよ？かわいいは正義なんだよりゆうくん！」

「……」

そんなことを軽く真顔で語ってくる平沢を前に、龍斗は言い返す気

も同意する気も・・・というか言葉を発する気そのものがなくなっていた。言葉が出てこない、とはこんなことを思った奴が作った言葉なのか？という思考が回っていたりいなかったりする。

(かわいいは正義ってどういう・・・?)

「え？あれ？何か変なこと言ったかな？」

「おれの頭じゃ理解できなかった」

「うう、私の熱意が・・・」

平沢はしょんぼりしながらももう一度写真を見て

「ねえ、りゅうくん」

「頼むからこれ以上変なことは言うなよ・・・」

そのことに心配になり顔を手で支えてしまう。

「言わないよお、というか言っていないよ？」

「ハツ・・・？」

今までのを考えずに言っていた事を知り、改めてこいつのことを本物の天然だと思い知らされる。

「・・・まあいいか。で、どうした？」

「この写真。3人とも笑っててすごく楽しそうだねって思ってる」

ゆうくんもとっても楽しそうだもん」

「・・・ああ。楽しかった」

（思ってもいない言葉を吐くのは嫌になる時がある。・・・父さんの影響だろうか？）

俺の感情が欠けた時に見た写真で、一番心にきたような感覚が強かった写真だった。だから俺が最も笑った時の奴なのだろう。何故曖昧なのかと言えば「笑った記憶」はあっても「笑った時の気持ちが出せない」からだ。

（滑稽だな・・・一番楽しかったことすら、消えるなんて）

「いつもこんなふうに笑ってくれと和むと思うよ」

「和むか？つうかもうそのころと顔が違エから和めエねよ絶対。逆に引かれるっつうの」

この殺人顔で笑ったらそれはもう笑顔じゃなく狂喜の表情だ。それ以前に笑うことなんてもう無理なのだろう。

「えゝ、笑えばみんな幸せ気分だよ　？りゆうくんが笑ってくれたら私はうれしいなあゝ」

龍斗はそう言われたとき、

その顔には何の恥じらいもなく、ただ純粹に思っている。

そういう感情だと思っほどに優しい笑顔があつて、それが龍斗の心に何かドロドロとしたものを感じさせた。だが、龍斗はそれをそこまで自覚はしていない、あくまで少し感じた程度の何かだった。

「……よくそんなこと恥じらいもなく言えるな。逆にスゲーわ」
「ほえ？」

(悠二が聞けば……勢いで抱きつくんじゃない？「そんな空気でした」とか言つて誤魔化するのだから。まあそうする前に涉とかが止めるとは思っけどよオ。)

『 』

「あ、……憂からだよ」

突然平沢の携帯から着信音が鳴り始めた。それに気づいた平沢が制服から携帯を出して画面を確認すると、龍斗に誰なのかを伝えてくる。

「とりあえず出るよ」

「ほいッス」

平沢は軽い返事をしてから通話ボタンを押して妹と話し始めた。

(ハア……。やっと何時も通りになるのか。無駄に長かったな……)

・
)

side - 平沢 唯

電話で憂がそろそろ家に着くという連絡を聞いた平沢は

「おなかすいた〜・・・」

空腹と少々戦いながら歩道を歩いてきた。おそらく周りから見ればぐったりしていると見てとれるだろう。だいたい今もっているのが学生鞆だけならそこまできつくもないが、家に入れなかったのがギターを置けるはずもなくまだ背負っている。

今も軽く空腹状態のせいかな慣れていた重さにぐらついてしまっていた。

「うう〜、ギー太〜・・・少しは痩せてよお〜」

今の平沢には背負っているギターが重く感じたのか無理な願い事を言う。が、それが届くはずもなく平沢本人も（まあギー太が痩せれるわけないか〜）と思う。

その時にさっきのことを少し思い出す。

（りゅうくん・・・あの写真を見たとき、一瞬だけど悲しそうな顔をしてた）

高校で知り合ってから龍斗の笑った顔を平沢は見たことがなかった。というよりそれは高校から知り合った奴全員に当てはまることだ。それが龍斗の普通だと思っていたからこそ、平沢はさっき龍斗の部屋に飾られていた写真の龍斗の表情に本当は驚いていた。

（でも親もちやんといるし・・・はっ！まさか両親が離婚しちゃったとか！・・・ないよね。お父さんは単身赴任でお母さんは仕事があるけどちゃんと帰ってきてるみたいだし）

「・・・・・・・・・・・・・・・・あゝわかんないよ〜！」

いくら考えても明確な答えがでなくて頭の中でもややもやする。それを考えているとぐうぐうとお腹がなっ

「早く憂のご飯が食べた〜い！」

と叫んで自宅へと歩いていった。

- 次の日 -

「なあなあ龍斗！もう卒業しとつてヤバス！！マジヤバス！！」

「今日は本気で殺す・・・まともに帰れると思うなよ」

悠二の一言から龍斗は予想していたことが起こったことにイラつきリアル鬼ごっこが始まった。が数秒で鬼に捕まった悠二は「やだー！！まだ・・・まだ俺は死にたくn」という言葉を最後に龍斗にフルボッコにされている。

その様子を見ていたクラス一同は

「おお、今日の龍斗は黒いな〜ってあれ悠二ヤバイんじゃない？」

「多分持ち前の再生力でどうにかなるんじゃない？いつも復活してるし」

「古川×源・・・悪くないかも／／」

「おいその危ない思考は消せつて。お前も龍斗にやられるぞ？」

「えっ？・・・それはそれで／／」

まともな思考者と自分の妄想をすり込ませる者その他もろもろで盛り上がっていた。一方平沢達は

「えっ？りゅうくん卒業しちゃったの！？そんなのやだよ！」

「落ち着きなさい唯、そういう卒業じゃないから。ただ悠二が変態なだけだから」

「本当にすまない。なんか自分の友達としてどうかと思ってくるよ・・・」

別の意味で騒いでいたりする。

そしてこの騒ぎに立たされた龍斗は

(ハア・・・今日は軽音部行かずに帰って休みてエ)

と行けばまた疲れるだろオと予測した龍斗は、痙攣しているような悠二を踏みつけながらそう考えていた。

・ 2 4 ・ (後書き)

文字の修正や感想あったらよろしくお願いします」。

・ 25 ・ (前書き)

顧問編後半終了です。

後けいおん！の映画見に行ったのですが、あれはけいおんファンなら絶対見に行くべきです！久々に感動しました！！

まだやってると思うのでファンならぜひ！いった方は感想くねると嬉しいです）（

- 部室 -

授業が終わりいつも通りに軽音部に来させられた龍斗は、隣でニコニコしている山中と目の前の状況をとりあえず見ている。何でも秋山がふわふわ時間タイムの歌詞を完成させたのでそれを聞いた平沢達はこの様子。

「出来た〜!?!?」

「あ、ああ」

いきなりテンションの上だった平沢達に押し寄せられ、自分が作った歌詞の書かれた紙を持った秋山は戸惑っている。

「見せて見せて〜!」

「えっ!?!?もう!?!?」

「いやもうって」

「私も見たいな〜」

「でも〜やっぱり恥ずかしい・・・」

「大丈夫だよ〜！笑ったりしないし〜」

「そうそう」

「でも・・・ああ！待って！！」

「待てない！！」

その一言から軽く争奪戦が始まった。本当に軽い（くだらない）争奪戦が。

「持ってきたってことは見せる、ってことだろー」

「澪ちゃんお願い」

「ちょ、ちょこ〜っとだけ。こそ〜っと私に」

「あ、ずりい。見せるなら私が先だろー」

「えっ！何で〜！？」

「何故なら！私が部長だから！」

「むっ、ならば、私は澪ちゃんの心の友だから！」

「じゃあ私は、澪ちゃんの心の友その二だから」

「こしゃくなー！私なんか澪の心の故郷だぞー！！」

「何時からそうなった？」

（さっさと見ればいいだろオが。つつか隣の教師様の表情がだんだんイラついてきてるし・・・）

「あゝ田舎のお祖母ちゃん元気かな？」

平沢は話が飽きてきたのか、それともいつもの天然かはわからないが話を急転換させた。

「いや、今関係ねえから」

「あ、去年年賀状出したっけ」

それに乗じて秋山も歌詞をまだ見せる勇気がないのか変えようとする。

「話をそらすな！」

（アア、突っ込んだ。・・・山中は我慢できなかつたか）

「早くせんかアアアアアイ！！！！！！」

「ああ・・・！！」

「どれどれ・・・」

山中が待てずに強引に歌詞の書かれた紙を奪うまでの一部始終を見

ていた龍斗は、とりあえず歌詞を取った山中の隣に移動し中身を見る。さつきまで山中に押されたのか腰を上げながら床に突っ伏していた田井中もこちらに移動しルーズリーフを見る。

書かれていた内容は以下

☐

君を見てるといつもハート

D O K I D O K I

揺れる思いは マシユマロみたいに

ふわ ふわ（ハート）

いつも頑張る 君の

まだ下にも歌詞はデコレーションされながら書かれていたが、龍斗にはここまでしか読めなかった。

「かつ痒い……！！背中が痒い！！」

「なんてメルヘンチックなの！！私も背中が！！」

最後まで読んだ田井中、山中の二人はその内容からよる痒さに侵されていた。そして龍斗は

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン！

「メルヘン通りこしてクソ甘妄想爆発してんじゃねエかアアアアアアア！！！」

「止めて龍斗君！馬鹿になっちゃうわよ！？」

「りゅ、りゅうくんが……りゅうくんが壊れた！！！」

もはや痒みでは収まらず体中から吐き気がし、どうしようもなくなった結果壁に頭を打ちつけこの感覚を消すことに没頭していた。逆に痛みは増すがのだがそんなことを気にする余裕もない。

「私としてはいい感じにかけたと思うんだけど……やっぱり駄目……かな？」

自分の歌詞を見たものの感想を目で見てしまったためか、照れているのかガンといったような半々な表情をしているのを田井中と山中は見てしまい（間違いなく次何か心にくることを言ってしまうえば泣く）と直感的に感じた二名は秋山のメンタルを回復させようとする。

「だっ、駄目っていうかぁ、オリジナリティっていうかぁ」

「アア・・・頭痛つてエ」

「自行自得だろ。止めるの大変だったんだからな」

「しゃあねエだろオが・・・見たらああなつてたんだよ」

「逆にあそこまで取り乱したお前もすげえよマジで」

「りゅうくんは何かを凌駕したんだよきつと！」

「凌駕したものが何かと聞きたいが、どうせまともじゃないんだろオから止める」

というか天然から聞いたところで通常の思考では理解不可能な暗号が音声で流れるだけ、だと思って投げやりになった。

あの後、龍斗は平沢と琴吹に抑えられ（ほとんど抑えたのは琴吹）何とか冷静さを取り戻し、秋山のほうは途中からこちらに来て歌詞を見た平沢の熱烈な感想を聞いて何とかメンタル回復を果たした。今は琴吹、秋山、平沢が長イスに座り、田井中や俺、山中は立って

いる状態だ。

「それじゃ、もうこの歌詞で行くか」

「わーい」

田井中が渋々ながらもこの歌詞で行くと決定し、平沢と琴吹がパチパチと拍手をしながら喜ぶ。

「よかったねー澪ちゃん！」

「う、うん／＼」

「じゃあ澪がボーカルってことで」

「ふえ！？」

急にボーカルに指名された秋山が何かがいけなかったのか田井中のほうへと移動し抗議し始める。

「わ、私は無理だよお！？」

「何で？」

「だって……！だ、だって……」

「だって？」

「こんな恥ずかしい歌詞なんか歌えないよお！！／＼」

「オイ、作者!!」

(恥ずかしいと思うなら何でそんな歌詞を書いた作者・・・)

結果的に秋山はボーカル担当を拒否したということになった。ということはほかの「誰か」がこのメルヘン×10では収まらない歌詞を歌わなければならないと言っことになる。

「困ったわねえ・・・」

「うーん、漣が駄目となると・・・」

と言って前の軽音部員(秋山を除く)を見ると、ワクワクした表情で田井中を見つめる平沢と、どうするか考えていたのか今の状況がまだ掴めていない様子の琴吹が。

「ムギ。やってみる?」

「えっ、私はキーボードで精一杯だし・・・」

「そっか・・・じゃあ」

琴吹は駄目だったので次の可能性を探すべく周りの部員を見る。

今度は私歌います!と言っつかのような眼差しを田井中に送る平沢と、さっさと終われよと思っっているためか不機嫌面の龍斗が横で突っ立っている。

「龍斗。やってみ「死ね」ひどっ!?!」

全生徒の前で恥をかけという死刑宣告がされたため龍斗は速攻で拒絶した。

「何でそんな甘々な歌詞を男の声で歌わなきゃならねエ・・・死ぬと言っのと同じだ」

「ごめんごめん・・・でもさ」

ある方向へと俺にしか見えないように指を指す。

「んん、んんっ。あ、あゝ」

そこにはオペラ歌手の声の出し方を真似した平沢の姿があった。その行動でこいつがそこまでやりたいという事は理解したので

「やりたいならやらせればいいだろオが？」

「いや、なんか唯にしちゃいけない気が・・・」

「おい・・・今の」

「・・・・・・あ」

二人とも平沢のほうを見ると

「う、ううゝ・・・」

ピンク色のハンカチを口に噛み締めて悲しいよとアピールをする平沢。半泣きなところが演技なのかマジなのかは不明だ。

これにはさすがに可哀想になったのか

「唯……やってみる？」

「えっ！！私いっ！」

田井中が聞いてみた途端に、口に銜えていたハンカチを離して今聞きました感全開の顔で答える。そして恥ずかしそうに指をモジモジさせ始め

「でも〜歌そんなにうまくないし〜私で務まるかどうかかわかんないっていうか〜／＼／＼」

「あ、じゃあいいや」

「ごめんウソ歌う！！歌いたいです〜！！」

急にしかたないからやるよといった感じになった平沢に嫌気がさしたのか田井中がすぐさま拒絶し、この状況でされるところだと思っていなかった平沢は田井中の制服にしがみ付いて一生懸命謝っていた。

「ほんとめんどくせエなこいつ」

「まあまあ〜」

龍斗は謝っている平沢を見ながら愚痴をこぼし、それを琴吹が宥めていた

曲のほうはなんとか弾ける、歌詞は決まった、それを歌うボーカルも決まった。

だがその後問題があった。

平沢にさっそく歌ってもらったが最初は歌うだけで演奏ができず、今度は演奏に集中しすぎて歌うことが出来ない。

つまり歌いながらの演奏が平沢には出来ないということが判明した。どうするかと悩んでいると山中が顧問らしく「特訓してあげる」といいそれに賛成した平沢が絶賛青春ドラマ並みのテンションで何処かへと消え去った。

ちなみに、後々『お前何処に消えた？』と平沢にメールを送ると『先生の家だぜー！』と何のキャラを目指したのかは不明だが場所はわかる返信が来た。

それで終わるかと思えば、今度は琴吹が少し百合気味だということが判明。

琴吹が何故か平沢と山中を見ながらぼくとしているのを見た秋山が今までのことを思い出して、それを隣に座っていた田井中に相談したことから発覚。

といっても

「ムギくさわ子先生のこと好きなのかー？」

「あ、ちよつ！？馬鹿！！」

「ふえ？」

「・・・へっ？」

「ああ。いえ、ただ女の子同士っていいなって」

「え？・・・ま、まさか」

「なあんだ。よかつた」

「ええ！？いいのかよ？」

「本人達がよければ、いいんじゃないでしょうか？／＼」

この一言からわかったというわけだ

「えくとああ・・・ん？」

「な、何言ってるんだ・・・？」

「・・・レスか」

「オイ！？それは的確すぎだろ・・・！」

あの時言った一言も小声だったから田井中あたりにしか聞こえていないだろオがら・・・まア大丈夫じゃねエか？

とこんな感じにそこまで追求なく知っただけで終わったのだが。

（ハア・・・思い返すだけで疲れる日々だな。何で最近こんなに疲れてるんだ俺？）

軽音部のせいかと、この疲れの原因を考えながらも家へと帰っていく。

・ 26 ・ (前書き)

ちよつと断片的になってしまいました。

学園祭編前半です。

- 教室内 -

平沢が学園祭に向けて特訓することが決まってからの次の日。

残り2週間を切った今日、時間割変更によって1時間目が学園祭での出し物を決める時間になった。その為、今は教室内で出し物をどうするかについて話し合っている。

「ねえねえ、やっぱりお化け屋敷やりたくない？」

「うーん・・・私は屋台とかやってみたいかな。やったことないから挑戦してみたいんだよね」

「迷路とか作らね？出来るだけ難しく！」

「それ今から間に合うのか・・・？まあ面白そうっちゃ面白そうだけど」

そんな会話が周りでされている今、龍斗は机にうつ伏せで寝ながら聞いていた。

(くだらねエ。人間で溢れかえる行事の何処がいい・・・)

脳裏で愚痴をこぼしていると、前の席から頭を軽く突かれたので頭だけを上げて前を見る。

番号順であれば平沢がいたのだがもう9月下旬、席替えは3回ほどあったので違う奴の筈なのだが

「何だ・・・」

「寝ちや駄目だよゆうくん。せつかくの学園祭なんだから」

何故かその3回目でもた平沢が目の前に来るといふ悲劇が起きた。

授業中はどうでもいいことを話してきたり、たまに何なのか不明な絵を描いたノートを渡してきたりしてくるので龍斗からしたらただの授業妨害でしかない。

(実際は仮眠妨害と言ったほうが適切か)

「な〜な〜、龍斗は何にするよ？やっぱり料理の腕を生かすために屋台とかか？」

「何でもいい。つつかどうでもいい」

龍斗のことを知っているからこそその提案を出してきた悠二だったが、学園祭に興味がない龍斗はそれを受け流した。

「テキト〜なこと言わずに考えようぜー。もしかしたらメイド喫茶になるという希望だってあるんだぞー！」

「不純だよゆうくん」

意図を察したのか平沢が少しムツとした表情になり、それに衝撃を

うけたのか悠二は驚く。

「まさか唯ちゃんからそんな言葉を貰うとわ・・・！」

「・・・いや誰からでも貰えるだろオが馬鹿なお前？」

「何を言うか！俺と同じ志を持つ同士達がこの世界には多くいるはずなのだよりユークトくん！！」

自信満々に同類の存在を肯定する悠二だったが

「そついやお前は何にすんだよ？前の合宿で言ってたお化け屋敷か？」

「そつだよ。一度はやってみたかったんだ」

「オ・・・ついに存在の認識すらされなくなったか。だがめげんよ俺は！」

悠二は叫びながら「なあー！ミニス力等の絶対領域について話そうぜー！」とクラスに12人ほどしかいない男子のうち3、4人の固まりへと突っ込んでいった。

その中に桐生もいて「お、面白そうだな。いいぜ！」などと乗り気で聞こうとしていた。

「ゆうくん輝いてるね。やりたいことに生きてるって感じだよ」

「・・・」

ある意味本能的で動物そのものとだなと思いつながら悠二の様子を見

ていると、教室の前の扉のほうで様子を見ていた担任から

「じゃあある程度話したので坂本君と柏原さんお願いね」

「「はい」」

それを聞いた二人が教壇へと移動する。あの柏原とかいう奴は特に面識もないのでどうでもいいが、涉がいたので一応聞こうと教壇のほうを向く。

（……………眠イ。目開けるのもだるくなって……………）

が、瞼も重くなってきた顔を上げるのも疲れてきた龍斗は

「まずはみんなのやりたいものを聞いていきたいから、意見がある人は手を上げてくれ」

「ハイハイへ〜イ!!」

「はい悠二。言うておくが変なのはやめろよ」

（……………）

テンション高めな悠二の声と周囲の笑い声を最後に、自分の腕枕の中で意識を手放した。

「で、何で俺が作る係りに入ってんだよ・・・」

その後、起きたときに最初に目に入ったのが黒板。

そこに書かれていたのは多数決でもしたのである。数字とその横に書かれた出し物の題名、そして一番多かったのか丸で囲まれていたのは『焼きそば』だった。

問題はそこではなく、そこから話が進んだのか準備や料理、材料といったものを誰がやるかの係りが決まっただけでその料理担当に書かれていた10名の名前の一つに龍斗の名前があったことが本人からしたら面倒でしかない。

「龍斗が寝てたのが悪いんだからしょうがないだろ。空いてたのが料理の担当だったし、龍斗なら繁盛させてくれるだろうと思ってな」

「不思議とそんな感じがするのよね。なんかやってくれそうって」

「りゅうくんの腕前なら大丈夫だよきつと！」

「そつだー！龍斗さえいれば何とかなる！！」

「・・・そりやどオモ。繁盛するとは思わねエけどよ」

（教室の飾り付けならサボれたのに料理じゃ本番サボれねエじゃねエか。・・・まあ、一応作るんだからそこだけ限定で真面目にやるか。つつか学校にある調理器具でまともに調理できるか不安でもあるな・・・）

サボれないことに鬱陶しさを感じながらも、内心では真面目に作り

方をどうしようかなど考えていた。

それから一週間。

学園祭まで残り3日。

一応自分の演奏する範囲は覚えたが、龍斗には気になることがあった

それは平沢がギターを弾きながら歌えるようにするため、山中から指導を受け始めてから3日がたったころ。

最初、教室で聞いた声が少し枯れていたのが不自然に思ったが特に追求はせず、次の日もそこまで変わらなかったからか特になんとも思わなかった。

だからこそ、今日の前の事態があるのだろつと龍斗は再度確認する。

「なあっ!?!?」

この事態に愕然する秋山達と

「練習させすぎちゃった」

「ごえがれちゃった」

「かわいいごぶつても駄目だー!!!」

この空気を紛らわそうと、ペロツと舌を出してかわいいごぶる山中と声が枯れている平沢がいた。

(休みに入って一気に練習でもしたのか・・・?)

ボーカルなんだから喉ぐらい休ませろよ、と龍斗は思った。

結局のところボーカルがいなくなると演奏も出来ない、じゃあ学園祭ライブをすることも出来ないとなっではいけなかったので、歌詞を書いた本人なら歌えるだろうということで秋山がボーカルになった。

その本人は一時緊張によりダウンしていたがこの現状。当然無理をいうことも出来ずにボーカルの変更は決まった。

・学園祭当日 教室内・

学園祭に至るまでのことを振り返ってみると、平和すぎて逆に生きている心地がしないと思いつつも龍斗は屋台の準備をしていく。

「古川。材料持ってきたぞ〜」

クラスメイトが麺を詰めたダンボールを持ってくる。ソースやマヨネーズなどの調味料はすでに置いてあるので後は麺を焼いていくだけだ。

「こっちに置いとけ」

「お〜け〜」

指定した位置に麺を置いていき、クラスメイトは自分の場所へと戻っていく。

それから周りを見て

「焼くぐらいは・・・できるよな?」

そんなことを思いながらも、高校生で初めての学園祭は始まっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2475w/>

けいおん！ -My story-

2012年1月12日23時59分発行